

筑波大学博士（文学）学位請求論文

大正期の幸田露伴

王 菁 浩

二〇一四年度

第二章 「狂濤艶魂」考・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50

はじめに

第一節 周亮工の評伝

第二節 「学陶」から見る周亮工

第三節 「海上昼夢亡姫」にない鄭成功の登場

おわりに

第三章 「共命鳥」考・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

はじめに

第一節 錢謙益の評伝

第二節 順境から逆境へ―獄中の詩

第三節 共命鳥

おわりに

第Ⅱ部

第一章 「運命」における一人称の語り手―戦争部分をめぐって・・・・・・・・・・・・・97

はじめに

第一節 戦争中の上書―止められない戦争の歯車

第二節 勝敗の分かれ目

おわりに

第二章 「運命」における一人称の語り手―「建文出亡」を中心に―……………111

はじめに

第一節 建文出亡

第二節 「優游自適」の建文帝

第三節 「安き無し」の永楽帝

第四節 逆転する結末

おわりに

第三章 「ケチ」論―私小説との関わりから―……………127

はじめに

第一節 近代以前の老婆から見た近代化―老婆の話

第二節 近代人の「自分」が見た近代化―「市治」の問題

第三節 近代合理主義の相対化―「自分」の心境描写

おわりに

終章 大正期における露伴の文学観 145

参考文献 161

初出一覧 166

凡例

一、叢書・単行本・新聞・雑誌名は『 』で示し、論文・作品名は「 」で示した。なお、刊行元と刊行年月・掲載誌と掲載年月を（ ）に示し、年月は元号に統一した。ただし、日本以外の出版物は西暦とする。

一、作品本文の引用は初出に拠った。

一、作品、論文の引用は、ルビや傍点は適宜省略したが、特殊な読み方をする場合は振った。なお、仮名遣いはそのままに、旧字は新字に改めた。

序章

第一節 本論文の目的

本論文では、大正期の幸田露伴（一八六七—一九四七）が追い求めた文学がどのようなものであったかを明らかにすることを目的とする。

露伴は明治二十二（一八八九）年に「露団々」を文芸雑誌『都の花』に発表し、忽ち脚光を浴びて、次に「風流伝」（『新著百種』第5号、吉岡書籍店、明22・9）によって文壇の地位を占めた。露伴の生い立ちを追うと彼の文学資質を知ることができる。

露伴は本名成行、生家の幸田家は数代続いた古いお坊主衆の一家である。お坊主衆は幕府直属の臣下であり、格式や典例や儀礼の幕府に於けるその方面の案内役であり、高等給仕である。

その家系に育った者は皆教養人であり、同時に明治維新以降もそれぞれの形によって明治国家の建設に使命感を感じ、責任を果たした人々である。露伴の父成延はお坊主衆であるため、風雅を解し、文章に長け、音楽の趣味も持っていた。明治維新後、東京府政が混沌した時代に下谷区長を努めたこともあり、明治十年代には大蔵省の官吏を長く務めていた。母の猷子は殊に音楽の趣味に富んでいた。露伴の兄弟八人のうち、二人が若くして亡くなったことを除き、皆各領域において輝かしい業績を収めている。長兄の成常は鐘ヶ淵紡績、富士瓦斯紡績等を経て、相模紡績会社の社長となった。紡績業は機械制大工業の典型であり、日本の産業革命の先駆の工業である。次兄の成忠は郡司氏を嗣ぐ。いわゆる郡司大尉として、報効義会の創唱者・実行者・統率者であり、北方の千島列島の探検を果した。四男は露伴である。五男の成友は、東京帝国大学史学科を卒業して、大阪市史の編纂

主任として市史の先鞭をつける。後東京商科大学（現在の一橋大学）の教授を務める。日本経済史、海外交通史の権威として、文学博士の学位も持っている。二人の妹は母の影響を受け、延子は上野音楽学校出身でバイオリンとピアノの名手で、幸子も同校の出身で、バイオリンの名手であった。二人とも長く母校の教授として日本の西洋音楽移入に、また音楽教育に貢献した⁽¹⁾。

露伴は近代作家の中で、漢文の造詣がもつとも深い一人である。作品中、それを素材にすることが多く、本論文で取り上げる『幽情記』と「運命」もまた中国の典籍に拠って書かれたものである。そこで、まず、露伴の漢文素養を見てみる。露伴は十三歳の時、青山学院の前身である東京英学校に入った。次の年の初めごろから菊池松軒の漢学塾にも通い始めた。英語学校を退くとともに、昼間のおもな勉強所は図書館であった。迎曦塾の同窓である遅塚麗水が当時の露伴の面目を顧みている。

迎曦塾の聴講生の中に在って、比較的少年組に属してゐるた幸田氏の体（態）の誤植か―引用者註）度は、大人びて寡黙であつたが、一たび講義の席となると、堂々と議論を闘はして、同輩を圧倒した。朱子学派だつた先生は、諸生に対して経書の講義は総べて朱註に拠るべきことを諭したが、幸田氏は多く古註を基礎に論難したので、議論百出、講義の席は何時も賑やかであつた。掌を耳朶の辺に翳して、その議論をきいてゐられる松軒先生はやがて其の議論を是正し論説せられる。当時に於ける幸田氏は、其の旺盛なる知識欲を満足すべく、経史といはず、諸子の書といはず、濫読し、多読し、精読した。迎曦塾講堂の左右の壁間には、先生の手沢を留むる書籍の幾十函が陳べられてあつた。幸田氏は先生の許諾を得て、その蔵書を片ツ端から耽読した、史記、漢書、八家文、孔子家語、古文真宝、左氏春秋、近思録、手の触るゝところ、眼の視ると

ころ、貪るやうに読み耽つた⁽²⁾。

当時お茶の水の聖堂には、東京唯一の東京図書館といふのがあつた。(中略) 迎曦塾の蔵書を読破し尽した幸田氏は、図書館に往て見て、牛に汗し梁に充てる許多の珍しい書籍を発見して驚異の眼を睜つたことである。幸田氏の右の人名指は先づ諸子の書に触れたのであつた。老、莊、列、墨、荀、韓非子、と次第に読み漁つて、終に鬼谷子、抱朴子などの異書にまで及んだ。私も何時となく図書館日参の一人となつてゐた。

(中略) 幸田氏も、善書に逢つては、常に之を筆写してゐた。曾て古註を排撃した先生の言に感奮して、朱註論語を筆写して、先生に褒められたこともあつた。郭註の莊子も全部これを筆写したが、これは大いに先生に叱責された。私も亦た幸田氏と競争して莊子を筆写して先生から訓戒を頂戴した。

露伴は昼に図書館で蔵書を読破し、夜に迎曦塾で経書を議論することによつて、漢文の素養を身につけた。さらに、十七歳で北海道の電信局に赴任した時、永全寺の住職から許可を得て、寺院の蔵書である仏典、漢籍を読んでいた。露伴の漢文素養はこのように培われた。

同時代の夏目漱石や森鷗外が今日においても大衆に読まれている現状と違い、露伴は「巨人」と称されながらも、其の文学は一部の愛好者を除いて、現在はそれほど読まれない傾向にある。何故かと考える際、詩人で評論家の木下杢太郎こと太田正雄は「露伴に入るには幾多の障碍があつた。第一には其文体であつた。第二には其仏学的漢学的の觀念及び用語であつた」と言っている⁽³⁾。そのため現代人だけでなく、大正期の漢文教育を受けていない青年にすら敬遠されている。しかし、鷗外にも現代語と異なる言葉遣いの文章があるにも関わらず、現在も人気があることから見て、さらに重要な原因としては、近代日本文学史において、未だに適切な位置づけ

が行われていないということが考えられるのではないだろうか。

従来の文学史において露伴は、紅露の時代というように尾崎紅葉と並び称され、明治期の理想主義作家と位置づけられている。しかし、文学史で対象とされるのは、明治二十年代から、昭和二十年代にかけての約六十年の間執筆活動のうち、露伴の明治期の小説のみである。また、「理想主義作家」というのは尾崎紅葉の写実主義との対照であり、単に小説の表現形式を表す評価である。小説の思想性にはまったく触れられていない。このような評価は同時代の批評に由来していると考えられる。例えば田山花袋は大正期に紅葉と露伴を、「一方は写実派の統領、一方は理想派の領袖」と整理している⁽⁴⁾。もちろん露伴の小説に理想主義的要素はあるが、それが露伴小説の全体像とは言えない。その全体像が明らかになっていない以上、評価も難しいのである。

明治期における幸田露伴の小説は、多くの批評や研究で明らかになったように、文明批評を意図しながらもロマネスクな世界を構築したものである。例えば、同時代の北村透谷は『伽羅枕』及び『新葉末集』(『女学雑誌』明25・3)において、尾崎紅葉と比較しながら露伴の小説の性質を次のように述べる。

一は実を本とし、一は想を旨とする紅葉と露伴。一は客観的実相を尚び、一は主観的心想を重んずる当代の両名家。(中略)われは「風流仏」及び「一口劍」を愛読す。常に謂へらく、此二書こそ露伴の作として不朽なる可けれ。何が故に二書を愛読する、曰く、一種の沈痛深刻なる哲理の其中に存するあるを見ればなり。

(中略)われは理想詩人なる露伴が写実作家の領域に闖入して、却つて鳥の真似をすると言はれんより、其奇想を養ひ、其哲理を練り、あはれ大光明を発ちて、凡悩の衆生を濟度せられん事を願ふて止まざるなり。

露伴の小説は奇想を有するのみならず、「沈痛深刻なる哲理」をも存すると透谷が評価している。透谷が触れ

た「風流伝」では、仏師珠運が花漬売のお辰と恋に落ちる。しかし、婚礼の夜にお辰がいなくなり、それは生まれる前に去った父が子爵となって現れたからである。珠運はお辰を彷彿とさせる女人像を彫り、彼女の婚約を新聞で読み心乱れた途端、夢幻の中に像に魂が入ったのか、お辰が来たのか、女が珠運を抱きしめたことが描かれる。関谷博氏は『風流伝』論―近代の「奇異譚」においてこの奇想に富む小説の文明批評性について、更にはつきりとさせている。

伝統的「法」概念を破壊し、貨幣収入の増大と公的地位の上昇をめざして、他人と不断に競争する事を強要する近代社会は、個人の可能性の実現を謳い文句としながら、資本の増殖に合致しない人間の能力は尽く否定する。この社会に投げ出された人間は自らの可能性を立身出世主義に合わせて切りきざみ、その一部を誇張して、人生の原理として絶対化しなければならないのだ。珠運が「地下と雲上の等差口惜し」といって反感を抱きつつも、社会秩序に対して結局全く無抵抗だった事を思い出してよい。打ちひしがれた彼が自己救済の名目で、単なる妄想から超越的イメージを捏造した事と、こうした近代人の運命とは、或る相似形を成している（その意味で、珠運の妄想の急所は、それが現世的だった点にあり、「恋愛」性は二次的問題なのである）⁽⁵⁾。

「風流伝」は単なる「奇異譚」ではなく、近代社会から脱落した人間を描くことによって、「個人の可能性の実現を謳い文句としながら、資本の増殖に合致しない人間の能力は尽く否定する」近代社会を批判している。関谷氏は「風流伝」が近代社会の始動期である明治二十年代の倫理的要請と幸福にも合致していると指摘している。

このように従来の露伴研究は明治期の小説を中心に展開してきており、明治の露伴は「理想主義作家」という

位置付けだけではなく、文明批評をも目指していることが指摘されている。

しかし、露伴文学を評価する前提として、その全体像を捉えなければならぬ。先述した通り、従来の文学史は明治期の小説のみを対象にしており、明治以降の露伴文学の性格は未だ明らかになっていない。そのため、明治以降の露伴文学の性格の研究はその全体像を捉えるために必要不可欠である。

明治末に、自然主義文学運動は、客観性を尊重する文学観に拠り次第に事実には縛られる文学に傾斜していく。そのため、時勢に合わなかった露伴は「天うつ浪」（『読売新聞』明36・9・21～38・5・31）の連載が中絶した後、文壇から遠ざかっていた。その後の露伴は小説家よりも学者と見做された。その理由は、露伴の執筆活動において、随筆、考証等が多く見られるためである。明治四十一年五月、露伴は京大文科講師となって、江戸後期文学を担当した（一年で辞任）。四十四年、『遊仙窟』について書かれた論文を主要業績として文学博士号を授与された⁶⁾。その後近世日本文学の編集校訂に携わるほか、『努力論』（東亜堂書房、明45・7）、『修省論』（東亜堂書房、大3・4）などの修養物を書いた。考証研究には「白芥子句考」（『潮音』大10・8～9）「古支那文学に於ける小説の地位」（『斯文』大15・9）「支那文学と日本文学との交渉」（『日本文学講座』1～2、大15・11～12）等多数ある。注釈には『水滸伝』（『国訳漢文大成』文学部十八巻～十九巻、大12・11～13・10）、『評釈芭蕉七部集』⁷⁾がある。このような学術活動を続ける大正期において、小説と見られるのは「ケチ」（後「望樹記」と改題、『現代』大9・10～12）「観画談」（『改造』大14・7）など数少ないものに限られる。

しかし、大正八年四月に歴史を題材とした「運命」によって文壇復帰を果たした露伴は、文学創作を捨てたわけではなかった。むしろ文学とは何かを再考していた。大正期の露伴は、一方で同時代の文学を見据えつつ、他

方でそれらと差別化を図っていたと考えられる。しかし、どのような文学を求めているかは未だに明らかになっていない。

本論文は研究の余地が残っている大正期の露伴文学を対象とし、この時期の露伴が追い求めた文学がどのようなものであったかを明らかにすることで、露伴文学の全体像をより明確にしたい。

第二節 先行研究の問題点と本論文の方法

大正期の作品を対象とした研究は多くない。それは研究をするには幾つもの難関があるためである。一つは、研究対象であるフィクションたる小説が明治期と比較して激減したことである。一節で述べた通り、「天うっ浪」の中絶以降、露伴は文壇から遠ざかって、学術の方に寄り添っていた。また、この時期露伴の創作は資料に基づいて書かれることが多く、時には文学よりも学術書とされており、文学研究の対象としては見落とされることが多い。短編集の『幽情記』（大倉書店、大8・3）は中国才子佳人の物語であり、中国の詩話や筆記小説、さらに伝記、詩集等種々の資料を使用している。「運命」（『改造』、大8・4）は中国の明時代における帝位争奪の歴史事件を書いたものであり、『明史』と『明史紀事本末』等の史料に拠っている。また歴史人物を扱う「平将門」（『改造』大9・4）「成吉思汗伝記（一）」（『改造』大14・1）「蒲生氏郷」（『改造』大14・9）「島の為朝」（後「為朝」と改題、『改造』大15・2）等もそれぞれ典拠がある。

また、大正期の露伴研究が難航するもう一つの理由は露伴の博識が作品に反映されているためである。右に挙

げた通り、大正期における露伴の創作は典拠を有するものが多く、しかも典拠となる資料は和漢の様々な分野にわたっており、典拠を確認し、作品と比較するには、日本文学の知識のみではとてもできない。例えば『幽情記』は中国の才子佳人にまつわる詩詞のある物語であるが、作品中、中国の詩文学は勿論、歴史（『明史紀事本末』、『宣和遺事』）、儒学（『宋元学案』）、仏教（『雜宝藏經』）、謡曲（『松山鏡』）、戯曲（『桃花扇』）、小説（『水滸伝』）随筆小説（『今世説』）等をも踏まえている。このような多くの典拠の存在は、作品を精読する上で大きな難関となる。

さらに、露伴が自ら文学の創作理論を呈示することがないため、彼の文学観を定めることは容易ではない。大正期に歴史文学に転ずる鷗外は、「歴史其儘と歴史離れ」（『心の花』大4・1）において歴史小説の創作理論を説いた。一方、露伴は何故大正期において、完全なフィクションを書かなくなり、代りに典拠に拠って創作しているのか、本人は述べていない。ただ、序文などにおいて作品の特徴について触れている。例えば、『幽情記』の序文において、以下のように『幽情記』が「出処」に拠っていることを述べている。

此の数年の間に人の需によりて草したる文の中に 詩詞の事にたづさはりたる筋ある物語の類を蒐めて
此一冊を為し 題して幽情記といふ 物語には皆出処あり 吾が作り設けたるは無し 物語には皆詩詞あり
詩詞無きは収めず 又時に物語の本幹より 傍枝を繁くし 原流よりは余波を揚げたるあり 吾が意緊しく
は物語に貼かざればなり 蓋し詩のあるところかならず情あり 情の発するところ或は詩となる 詩の成つ
て情を惹くに至つて詩は妙に 情の凝つて詩となるに及んで情は幽也 幽情記一篇 人目して以て情を伝ふ
るものとなすか 或は又詩を説くものとなすか 吾これを知らず 吾ただ吾が燈前茶後の閑事業 世に無毒

にして人に小補あるを得ば望外の幸とするのみ。

詩と情を書く作品集について、露伴は「物語には皆出处あり 吾が作り設けたるは無し」と典拠に拠って書く姿勢を明らかにし、「時に物語の本幹より 傍枝を繁くし 原流よりは餘波を揚げたるあり」と自らの創作にも言及している。また、大正二年に初演する戯曲の「名和長年」は単行本に収録される際、「引」が添えられている。その中においても、露伴は次のように創作の姿勢を示している。

本曲は本より歴史にもあらず、又伝記にもあらねば、筆者の意によりて点綴描画すと雖も、大体は一々皆依拠するところ有りて、鑿空捏妄を敢てせず。此篇は主として群書類従収むる所の伯耆巻に拠りて案を立て、名和氏紀事等を参酌して、事を叙し情を伝へたり。今巻末に附するに伯耆巻を以てし、予が憑虚搗鬼を縦にせざるを明らかにし、かねて曲中の語辞も亦時に或は本づくところ有るを示す。読者若し加ふるに名和氏紀事を読むことを以てせば、予が存心用意の微を知らん(8)。

「名和長年」を書く際も、『群書類従』に収められている「伯耆巻」や、『名和氏紀事』等に依拠して、「事を叙し情を伝へ」る姿勢を明言している。ただし、何故典拠に依拠する方法を用いているかには言及していない。勿論、作家の創作理論をそのままその文学の解釈に適用することはできないが、露伴の場合、文学観を抽出するには露伴自身の理論的論拠がなく、一層紛雑に見える。

このように大正期の研究は容易でないため、露伴研究においては少数派であった。主に近代性及び典拠の二つの問題をめぐって展開される。近代性についての研究は、明治期の小説を対象に出発したため、まず明治期の研究を押さえておく必要がある。戦後、露伴の文学価値を認める一方で、露伴を「夜明け前の巨人」と批評する片

岡良一氏⁽⁹⁾や、「露伴氏の文学には近代がない」と批評する中村光夫氏⁽¹⁰⁾に代表される、露伴の近代性を否定した露伴観が主流となっていた。それに対して、昭和三十年代から露伴の近代性を探ろうと、笹淵友一氏は『浪漫主義文学の誕生』において、作品の中にキリスト教的浪漫主義の要素を見出している。

以上「露伴々々」から「ひとよ草」まで露伴の作品系列を辿ったが、これによつて、露伴が単なる古典主義の作家でも、写実の作家でもなく、他面に浪漫的傾向——それも宮島新三郎が評したやうな意味でのロマンティックではなくて、シュトリツヒの所謂キリスト教的浪漫主義者としての性格傾向をもつてゐたことを認めることができよう。ただ露伴の浪漫的作風が最高調に達したのは、明治二十四年までであつて、その後は理性的、常識的な要素が目立つて来ると共に、情熱は次第に下降線を辿る。これは露伴が「文学界」同人の浪漫主義文学運動に対して完全に先駆者の位置にあつたことを示すものである⁽¹¹⁾。

笹淵氏は西欧文学の内部から理想型を抽出し、その鏡に照らして、受容と変質の相を近代日本文学の内部にさぐるうとする方法を用いている。露伴に関しては、露伴を師とする齊藤茂吉より示唆を受けている。それは「露伴先生に関する私記」である。

露伴先生は東洋的、鷗外先生は西洋的といふ具合に分類するのは、簡潔であろうが入門形式ではないか。成程露伴先生のもものは東洋的な色彩が多いかも知れない。希臘系統よりも印度系統・支那系統の色彩が多いかも知れない。けれども、先生程の巨匠になるとその發育史は決して入門的簡単な分類で片付けてしまはれない複雑多様なものが存して居るものである。「露伴々々」といふ先生の処女作とも謂ふべき小説を見れば既に分かる。また、汝が明眸を蔽へる魚鱗を除いて云々の語、心のまづしき者は多幸なりの語、やをらやをら

月の光に這へる此の蜘蛛！爾思ひ得ずや此の蜘蛛の過去既に一度世にありしとは。月の此の光！爾思ひ得ずや月の此の光の過去既に一度世にありしとはの語、その他随所に散見する詞語乃至思想は決して今時の文芸史家などの簡単に片付けてゐるやうなものではない。ニイチエはシヨオペンハウエルから出たと謂ふが、永遠回帰の説の如きは寧ろドイツセンの影響だと謂ふべきである。さう解釈するのが順当だとすると、此思想の如きは既に先生が初期の小説に於て幾たびも取り扱はれたものであつた。先生の外国文学接触は多く英語を通し、ニイチエの場合でも英訳に拠つたものだが、その撰取の有様が最初から同化的なので、西洋の香をば批評家が見免すのである⁽¹²⁾。

露伴に西洋文学の撰取もあるとの齊藤の指摘を受けて、笹淵氏はさらに詳しく作品の西洋的要素を検証している。これに対し、三好行雄氏は書評で笹淵論の問題点を突いている。

また露伴を論じて、東洋的伝統の大成を「西欧的なもの敗北」と見なし、そこにいたるまでの東西相剋の相に露伴の歴史的意義をかんがえる論理にも、著者の根本的志向はあきらかだとおもう。「日本古典の伝統に媒介されることによつて却つて西欧的伝統を歪曲変質せしめやすいことが近代日本文学にとつて問題」といったふうな断定も、おなじところからでてくるのだろう。露伴のばあい、完成された露伴の意義がほとんどけしとんでしまう惧れがある⁽¹³⁾。

つまり、笹淵氏の研究は露伴の西洋的要素を持つ作品だけを評価し、そうでない作品が抹殺される恐れがあるというのである。

この時、三好氏が「反近代の系譜」⁽¹⁴⁾において打ち出した「反近代」の視点から露伴を積極的再評価する動き

があった。それは「西欧化即近代化の過程がおのずと明らかにした近代化を拒む部分」によって、我が国の近代文学固有の實質を逆に照らしだそうとする試みである」と三好氏が言う。近代化という言葉の概念規定について、三好氏は『日本の近代文学』第二章「反近代の系譜」において次のように述べられている。

明治維新にはじまる日本の近代化のもっとも大きな特質は、それが東西両異質文明の接触をともなったことにある。文学もまた例外ではなく、西洋と出会い、その影響を受けつつけることで近代化をいそいだ。そこでまず最初に、反近代という概念の内包を文明開化にはじまる近代化に対して同調しなかった、あるいは批判的だった作家、ないし文学として規定する⁽¹⁵⁾。

近代性がないと指摘された露伴は、この近代化の視点において最も大きな存在となる。こうして三好氏は従来近代文学史に適切に位置づけられていない露伴を再評価する可能性を与えたといえよう。

右の通り、主に明治期の作品を対象に、近代性があるか否かについて議論が展開され、三好氏に至って、近代化という再評価の視点を獲得した。この視点から、篠田一士氏、瀬里廣明氏、山本健吉氏等が露伴の大正期の作品を再評価を行っている。

欧米文学出身の評論家である篠田一士氏は『幽情記』と「運命」を扱い、文学的感動を評価し、近代日本文学の主潮との関係を論じている。

幸田露伴が文学的メカローマニーの病理症状には冒されなかった、ごく少数の近代作家のひとりであることはいままでもない。ところで、さきに引用した文章（幸田露伴「文章及言語の向上」『向上』大3・11―引用者注）につづけていえば、彼がここで、文章と言語をきびしく峻別し、言語の束縛から文章の自由を獲得

しないかぎり、文章はついにその体をなさない、と説いているのは、自然主義文学から「私小説」にいたる近代日本文学の主潮に対する真向からの挑戦である。これほど本質的な挑戦は反自然主義的とよばれる作家も行ってはいない。鷗外、漱石といえども、露伴の挑戦にくらべれば、微温的であり、逃避的でさえある⁽¹⁶⁾。

篠田氏は「自然主義文学から「私小説」にいたる近代日本文学の主潮に対する真向からの挑戦」と、露伴文学と近代日本文学の主潮との対立する構図を描いた。

また、瀬里廣明氏は文明批評家としての露伴像を呈示し、「露伴における愛について」では、愛の精神から露伴の文明批評性を見ている。

儒、道、仏それぞれ教えの立て方は異なっているけれど、宇宙の根源に愛をおいているのは共通している。露伴が新旧約聖書よりも、儒、道、仏を深く学んだことは、彼の教養の過程からして当然のことであるが、基督教の愛の思想に触れることによって、愛の重大さを一層自覚することになったのである。彼の恋愛思想は近代の自由主義的恋愛観からのみきたものではなく、愛を聖化した基督教精神の刺激を受けて、儒、道、仏からも愛の精神を引き出したものである。もし彼の愛の思想が古いとされるならば、それは儒、道、仏の影のさしているところによるところと思われるが、果してこの愛の思想のとりあげ方が古いものであるかどうか一言できめにくいであろう。

近代は自由主義恋愛思想を生み出したけれど、近代の機械文明のいきつくところ、そこに又愛の喪失をも生み出しているのである⁽¹⁷⁾。

露伴は基督教精神の刺激を受け「儒、道、仏」から愛の精神を抽出し、近代の自由主義的恋愛観を相対化すると

指摘している。『幽情記』の愛と「運命」における仁は、文明史の一環である「愛」、いわゆる「仏教の空、基督教の愛、儒教の仁」に共通する思想の体現とまとめられた。

さらに、評論家の山本健吉氏は「運命」が正史ではないが、正史より「万物自然の数理」を極めていると論じた。

だが彼は、前の引用文に「造物の脚色は、綺語の奇より奇」と言っている。さらにまた、「逸田叟の脚色は仮にして後纒に奇なり、造物爺マッパらの施為は真にして且更に奇なり」とも言う。ここに伝えられる数奇をきわめた建文の事蹟は、もちろん正史に伝えるところではない。だが、正史よりもさらに自然であり、造物主の脚色なのであり、真なのである。(中略)

万物自然の数に合致することは、露伴の日常坐臥の理想であった。「造物爺」の境地に到ることは、同様に、露伴の作家としての理想でもあったろう。芒洋として捕えどころのない巨大なヴィジョンを、彼は抱いている。それが『運命』には脈打っている。その巨大なヴィジョンを、十九年後に自跋を書いたときには、すでに持てあつかいかねているのだ。作者の個のはからいを越えた世界を、ここでは無名の個人の創作に帰してしまった⁽¹⁸⁾。

山本氏は、「運命」における建文出亡のことは正史ではないが、正史より「万物自然の数理」をきわめるとして、いる。ただし、十九年後の自跋において、建文出亡の談が「燕王幕裏の無名子」の書いた小説であると明かされ、元來作家の個のはからいを越えた世界が、無名の個人の創作に帰ってしまったと嘆じている。

しかし、昭和五十年代に入ると、へ反近代への視点そのものの整理が必要になってきた。登尾豊氏が指摘してい

るように「西洋的な近代と東洋的な近代との総体が日本の真の近代」と考えるべきであり、「へ反近代」を前近代もしくは非近代として葬ったところに従来の近代文学史の誤謬があったが、へ反近代」を強調しすぎるならば、所を替えて同じ誤謬に陥るおそれがある」⁽¹⁹⁾。

へ反近代」の立場により研究を始めた登尾氏はその後、作者の内面の表現という近代小説の基本条件を具えている点に露伴文学の近代性を認めようとし、『幽情記』を考察している。この問題意識の元で、登尾は先ず露伴の身辺を顧みる。所謂明治四十三年に良妻賢母の幾美子が病死し、四十五年に長女歌子も病気で亡くなる。大正元年十月に児玉八代子と再婚する。しかし、八代子は外出がちで家事を顧みず、露伴と気持の通じあうこともない妻であった。この間、子供たちが代わる代わる病み、彼自身も体の不調を感じることも多い、という具合である。そして、登尾氏は『幽情記』の各篇を内容によって分類し、夫婦の愛情ひいては幸福な結婚生活を扱った話が七篇あり、「全体の過半数を占める事実は、『幽情記』の特色として注目されている」と指摘し、次のように述べている。

（露伴が―引用者注）読んだ本はいろいろであったろうに、深く結ばれた夫婦愛の物語にこのように一ならず眼が行くのは決して偶然ではあるまい。夫婦の濃やかな愛情、心の通いあいは、露伴にはかつてあり、いまはないものであった。後妻との素然たる現実の苦しさ、その裏返しに亡妻追慕の情がこの七篇（「真真」「共命鳥」「泥人」「金鵲鏡」「玉主」「狂濤艶魂」「幽夢」の七篇―引用者注）の底に流れている。再婚が失敗だった悔恨がこの七篇の話題を彼に選ばせたのであり、そのとき彼は羨望をもって七組の夫婦を眺めたのではなかったか。夫婦の濃やかな愛情、心の通いあいは当時の彼にとっては他人事であり、まさにそのこ

とによって他人事ではなかった。前章で『幽情記』の成立に最も関係ある周辺の出来事として失敗した再婚を挙げた理由がここにある⁽²⁰⁾。

登尾氏は露伴の亡き妻への思いと再婚生活への不満を反映する近代性のある作品だと指摘している。だが、「作者の内面の表現という近代小説の基本条件」という立論から、作品は作家の生活と切り離して解釈することが不可能となる。つまり、作品の独立性をうしなってしまう。近代小説の内実たる個人の内面描写は、作家の内面というより、むしろ小説の中の人物の内面を描くことを指している。露伴を含め明治期の作家達がすでにこの手法を模索していると関谷氏が述べている⁽²¹⁾。

ここまで露伴文学の近代性を中心に研究が展開されてきた。だが、近代性という日本の近代を再考する中に現れた評価基準はそもそも露伴文学の外にあるものである。この基準によって露伴文学を解明するのは、やや遠回りをしていると言える。むしろ作品を出発点に、露伴がどのような文学観を持っていたかを解明すべきではないだろうか。

大正期の研究のもう一つのテーマは典拠の問題である。先述した通り、大正期の露伴の作品は多くの場合、資料に基づいて書かれている。作品の典拠について代表的な先行研究を見てみたい。

まず、『幽情記』の典拠について、原田親貞氏が十三篇を逐一検討し、それぞれ依拠した中国の資料を示し、露伴の参看した資料の範囲は広く、数も多いと指摘している⁽²²⁾。

井波律子氏は中国の筆記類を典拠とし、典拠に比べて「人々の醜悪を希薄している」と指摘し、典拠よりイメージのよい「懐かしい男と愛おしい女が繰り広げる縹渺とした、清新な物語世界」を作り上げたと評価している

「運命」については福本雅一氏、植村清二氏、高橋菊弥氏、田中美樹氏等の研究がある。福本氏は「運命」の注釈（『日本近代文学大系6 幸田露伴集』、角川書店、昭49・6）において典拠を指摘している。「運命」の建文出亡という最後の部分について、植村清二氏は「運命」の典拠である『明朝紀事本末』の拠り所を正し、その性格を明らかにしている。

「明朝紀事本末」は清初に編纂されたものであるが、ほぼ同一の記事（建文出亡の記事―引用者注）は既に明末の「吾学篇」などにも見えている。そして更に遡るとそれらはいずれも史仲彬の「致身録」（説郛所収）や程済の「従亡随筆」に基づいている⁽²⁴⁾。

高橋菊弥氏も同じく『明史紀事本末』の根は「随筆」など野史だったのであると指摘し、「運命」は「歴史」を書くというより、遜国談という伝説を描いた結果となったとしている⁽²⁵⁾。

田中美樹氏は「運命」を典拠の『明史』および『明史紀事本末』と比較した上で、その執筆意図を以下のようにとめる。

露伴が「運命」を書いた意図は、つぎの二点に集約できるであろう。

一、作者自身の空想をまったく付加することなく、「すでに歴史書に記述された史実」のみによって一篇の虚構世界を生み出すこと。（中略）ただし、歴史事実のすべてが記されているのではなく、作者の構想にそわない史書の記述は採用されない。つまり虚構が存在する以上、この作品は小説と称すべきであるが、その虚構は、史実に空想を付加することはなく、全体の史実から一部を削除することによって生み出されてい

る。

二、五人の主要人物（太祖、建文帝、燕王、方孝孺、道衍）を「徳・力・君・臣」という四つの要素の複合型式を象徴する存在として造型し、本来、統一されていなければならない「徳」と「力」が分裂し争闘する悲劇を叙述すること。

そしてこの二つの意図は成功したのである。⁽²⁶⁾

田中氏は、露伴が資料を加工する方法は「構想にそわない史書の記述」を削除することであると指摘し、「徳」と「力」が分裂し争闘する悲劇を叙述すること成功したと評価している。

さらに、須田千里氏には大正期末の作品「観画談」（『改造』大14・7）「暴風裏花」（『女性』大15・10～11）「骨董」（『改造』大15・11）についての典拠考がある。まず、「観画談」については、典拠が『太平広記』巻七十四（道術四）所収の「陳季卿」と『覆元槩古今雜劇』所収の「陳季卿悟道竹葉舟」であると指摘した上で、比較によって「時代を現代に移すことで仙人の存在を払拭し、主人公がもう一つの人生に開眼する経緯を語った作品であった」と述べている⁽²⁷⁾。「暴風裏花」に関しては、典拠の『明史』と『虞初続志』「費宮人伝」に拠り、「典拠を適宜配置し、登場人物の心理を掘り下げ、その場のありさまを鮮明に描写することで、読者を感じ銘させる」と指摘している⁽²⁸⁾。「骨董」については、典拠を『渡世伝授車』巻之四の「道具目利」と、『韻石斎筆談』巻上「定窯鼎記」「石壁題名」とし、「骨董」での再話には語りの妙が認められるものの、提供された話との間に大きな異同はなかった」と指摘しつつ、「定窯鼎記」の話を取り上げたのは「金銭欲や愛着から人を欺いたり死に追いやったりする骨董の魔力を確認し、それに囚われまいとする意識」によると、露伴の意図を示している

(29)。大凡このような典拠考がなされてきた。

典拠と比較する方法には同意するが、まだ典拠については検討の余地が多く残っている。例えば、『幽情記』の場合、原田氏は、詩に関する典拠に、概ね『鉄崖先生古楽府』といったような詩人の個人詩集を挙げている。『幽情記』の本文と相違する場合があります、原田氏も露伴が「どのテキストに拠ったかは未確認である」と述べている。一篇の詩が様々な書物に収録されている場合があり、露伴が必ずしも直接詩人の個人詩集を読んでいたわけではない事を考慮する必要がある。言い換えれば、アンソロジーのような書物より『幽情記』の材料を得た可能性が考えられる。

本論文の方法は周辺から露伴文学にアプローチするのではなく、作品そのものの読みを徹底することによって露伴文学を説明することである。典拠のある作品については、その典拠を定め、作品と典拠とを逐一比較することによって、露伴の創作した部分を際立たせる。そこから作品の解釈を行い、典拠のない作品については、テキストを精読するとともに、同時代の文脈とあわせて解釈を行う。外部の理論や評価軸によって作品を裁断するのではなく、作品そのものから露伴の文学観を抽出する方法を用いることにしたい。

第三節 本論文の構成

本論文は大正期の露伴の文学を二つの観点から追求する。先ず、第Ⅰ部では、文壇復帰以前、露伴が創作方法において、どのような模索を行ったかを押えることとする。第Ⅱ部では、文壇復帰以降の作品を取り上げ、露伴

が文壇の動向をにらみつつ、その創作方法をいかに変化させたかという視点から作品に検討を加えていくことにする。

大正八年に『運命』によって文壇復帰を果たす以前より、露伴は新たな創作方法を模索していた。それを証明できるのは、大正四年七月から六年七月にかけて、『淑女画報』等の婦人雑誌等に発表した十三篇の作品からなる『幽情記』である。露伴は作品の特徴を「出処あり」、「詩詞あり」と言っている。各篇に詩の評論、故事の紹介、詩に纏わる人物の伝記等多様な引用が併存していて、同時代において、そのうちの「真真」「桃花扇」の二篇を「支那文学研究上まことに得やすからぬ珍珠」とし、研究上の価値が評価された³⁰。しかし、『幽情記』には文学創作として見てよい作品もある。第I部では創作として見てよい作品を対象に、露伴が模索した創作方法を明らかにしたい。

先ず第一章では典拠と比較する作業の前提として、『幽情記』各篇の典拠を明らかにする。そして多くの引用がなされつつも、それぞれ独自の作品世界を成している「狂濤艶魂」（『淑女画報』大4・11）と「共命鳥」（『淑女画報』大5・9～10）との二作を第二章と第三章において、それぞれ創作方法について考察する。

第二章に取り上げた「狂濤艶魂」では、明末清初の官吏である周亮工が、「琴瑟の和」の仲であった愛妾王氏が他界した三年後、懐かしさの余り詩を詠んだことが描かれている。『続本事詩』による詩と物語を引用するのみならず、村瀬季徳編の伝記である『清名家小伝』からも周亮工の評伝を引用している。物語に伝記を挿入する方法は単なる人物紹介ではなく、創作上重要な役割を果たしていることを、典拠と比較しながらはっきりさせる。

第三章の「共命鳥」も同じく明清交替期に生きる錢謙益と愛妾の柳如是の物語を描いている。『続本事詩』、『清

名家小伝』の他、史書の『明史紀事本末』、短編小説集の『虞初新志』、錢謙益の詩集『有学集』等からも引用されている。歴史上「二臣」と批判された錢謙益の描写に注目し、典拠と比較しながら本作の創作方法を検討する。

第II部においては、文壇復帰を果たした露伴が『幽情記』での創作方法を援用しつつ、さらに文壇の動向を見据えつつ、どのような新たな創作方法を取り入れたかを論じる。最初に取り上げた「運命」は露伴の文壇復帰を果たした作品である。明時代の建文帝と叔父の燕王の帝位をめぐる戦いとその後のことが、史書の『明史』や『明史紀事本末』等に拠って描かれる。『幽情記』と同じく典拠に拠って書かれたうえで、さらに、「予」という一人称の語り手が顕在化している。この語り手に注目し、露伴の創作方法の変化を明らかにする。

第一章では戦争の部分を、第二章では戦争後、両帝の運命を描く部分を取り上げ、典拠と比較することによって、一人称の語り手の性格について検討し、当時の文壇における私小説の流行との関わりを考察する。

第三章に取り上げた「ケチ」（『現代』大9・10・12、単行本『龍姿蛇姿』に収録される際、「望樹記」と改題）は、「運命」と同じく一人称の語り手が用いられるうえで、私小説の形式を意識して書かれた小説である。この小説が当時の私小説作品とはどこが異なるかについて検討を加え、露伴が目指した小説の有り様をはっきりさせる。

以上の検討を通じて明治期における小説の中絶を露伴がどのように克服したかという過程を明らかにしていくこととする。同時に大正期における露伴の文学観を抽出することを目的とする。

注

- (1) 柳田泉『幸田露伴』（中央公論社、昭17・2）
- (2) 遅塚麗水「迎暎塾時代の幸田露伴」（『文学』6巻6号、昭13・6）
- (3) 太田正雄「露伴管見」（『文学』6巻6号、昭13・6）
- (4) 田山花袋「紅葉と露伴」（『東京の三十年』博文館、大6・6）
- (5) 関谷博「『風流伝』論―近代の〱奇異譚〱」（『国語と国文学』68巻3号、平3・3、後に『幸田露伴論』（翰林書房、平18・3）に収録）
- (6) 井波律子「幸田露伴―その生涯と中国文学」（井波律子・井上章一編『幸田露伴の世界』思文閣出版、平21・1）
- (7) 『評釈芭蕉七部集』は芭蕉一代の撰集の中から「冬の日」「春の日」「曠野」「ひさご」「猿蓑」「炭俵」「続猿蓑」の七部十二冊を選び、芭蕉の風格神韻を探ろうとする大業である。大正九年から露伴が死の五ヶ月前にかけて完成したものである。
- (8) 幸田露伴「名和長年」（白揚社、大15・3）
- (9) 片岡良一「夜明け前の巨人」（『日本読書新聞』昭22・8・4）
- (10) 中村光夫「露伴の死」（『文学界』1巻4号、昭22・10）
- (11) 笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』（明治書院、昭45・4）
- (12) 齊藤茂吉「露伴先生に関する私記」（『文学』6巻6号、昭13・6）

- (13) 三好行雄「笹淵友一著『浪漫主義文学の誕生』」(『文学』26巻5号、昭33・5)
- (14) 三好行雄「反近代の系譜」(『解釈と鑑賞』25巻1号、昭35・1)
- (15) 越智治雄・三好行雄・平岡敏夫・紅野敏郎『日本の近代文学―明治・大正期』(日本放送出版協会、昭51・2)
- (16) 篠田一士「幸田露伴のためにI」(『文学』34巻5号、昭41・5)
- (17) 瀬里廣明「露伴における愛について」(『文明批評家としての露伴』未来社、昭46・9)
- (18) 山本健吉「露伴の「運命」―小説の再発見―10」(『文学界』16巻11号、昭37・11)
- (19) 登尾豊「露伴の「反近代」」(『近代文学』2)『有斐閣、昭52・9、後に『幸田露伴論考』(日本図書センター、平18・10)に収録)
- (20) 登尾豊『幽情記』の周辺―露伴の明治から大正へ―(『国語と国文学』59巻5号、昭57・5、後に『幸田露伴論考』(日本図書センター、平18・10)に収録)
- (21) 前掲注5
- (22) 原田親貞「中国文学と幸田露伴(一)」―主として『幽情記』をめぐって(『学苑』505巻、昭57・1)、
「中国文学と幸田露伴(二)」―主として『幽情記』をめぐって(『学苑』517巻、昭58・1)
- (23) 井波律子「露伴の中国小説―『幽情記』と『運命』について」(『文学』6巻1号、平17・1)
- (24) 植村清二「「運命」伝説について」(『露伴全集』月報23、昭28・12)
- (25) 高橋菊弥「露伴「運命」の原典について―「従亡随筆」を中心として―」(『弘前大学国語国文学』4

号、昭53・3)

(26) 田中美樹 「「空想なき虚構」の世界―幸田露伴「運命」研究」(『学習院大学国語国文学会誌』28号、昭60・3)

(27) 須田千里 「幸田露伴「観画談」「土偶木偶」の材源」(『国語国文』75卷1号、平18・1)

(28) 須田千里 「幸田露伴『暴風裏花』の原話」(『京都大学国文学論叢』31号、平26・3)

(29) 須田千里 「幸田露伴「骨董」の原話」(『叙説』33号、平18・3)

(30) 「新刊紹介」(『読売新聞』大14・6・25)

第
I
部

第一章 『幽情記』の典拠考

はじめに

『幽情記』（大倉書店、大8・3）は、幸田露伴が大正四年七月から六年七月にかけて、婦人雑誌などに発表した十三篇の作品からなる。出処があり、詩がある中国の女性を中心とする物語を集めたものである。

従来の露伴像は簡単に言えば、明治の理想主義作家であり、大正昭和期の文学活動はあまり注目されてこなかった。故にその時期の研究は露伴文学研究において新たな可能性があり、重点的に研究する価値がある。『幽情記』の出版一ヶ月後に発表された「運命」（『改造』大8・4）が露伴の文壇復帰の契機となったのに対して、『幽情記』は当時さほどの反響を呼ばなかった。『幽情記』の出版に際して、「だんだん系統を立ててゆくうちには立派な支那の情詩史が完成するであろうし、又さういふ研究の好指針ともなるであろう」⁽¹⁾と評され、また大正十四年に「運命」と合わせて『幽秘記』（改造社、大14・6）と改題して刊行される際に、「殊にその水滸伝や桃花扇を品薦するあたりは、古今独歩の貫禄を具へ、支那文学研究上まことに得やすからぬ珍味として愛惜される」⁽²⁾と紹介され、『幽情記』の研究的価値が評価された一方、文学的価値は殆ど評価されなかった。しかし、露伴晩年の高足である塩谷賛氏は『幽情記』が露伴の文壇復帰の第一弾⁽³⁾と述べていることから、露伴の創作として認められている。

また、先行研究を概観すると、柳田泉氏が『幽情記』を露伴の創作と認め、史伝に分類している。しかし、その主題を「人事と運命の深秘、因縁奇遇の不可思議」とし、「運命」の小型版として扱う⁽⁴⁾。さらに昭和三十年代よりはじまる露伴を再評価する動きの中、篠田一士、瀬里廣明、登尾豊の諸氏が、『幽情記』に露伴の近代性

を見出そうとしていく。篠田氏は文章表現に注目し、大正時代からの文学活動を「自然主義文学から「私小説」にいたる近代日本文学の主潮に対する真向からの挑戦である」として位置づけ、『幽情記』の詩的性格を認め、その詩的世界から「運命の縁」を読み取っている⁽⁵⁾。瀬里氏は露伴を文明批評家として評価し、キリスト教の愛との関わりで、『幽情記』の中の「共命鳥」と「狂濤艶魂」を男女の愛の物語とし、その愛は仁に達するものと主張している⁽⁶⁾。更に登尾氏は、『幽情記』が明治末から大正初期まで露伴の亡き妻への思いと再婚生活への不満を反映する史伝だと指摘し、「作者の内面を表わすという作品の近代性」を強調している⁽⁷⁾。

以上の先行論によれば、『幽情記』は運命を語る作品、または男女の愛を語る作品であるとされてきていることが分かる。だが、それらは作品解釈に基づいた評価ではない。

露伴の「幽情記引」によれば、「物語には皆出处あり 吾が作り設けたるは無し」とあり、作品中において「明史卷二百八十五に記す」のように典拠を明記する場合もある。同時代評で研究の類いと見なされた『幽情記』を文学作品として認定する際、その出处を明確にすることは有効な方法である。なぜならば、出处を特定すれば、創作する部分が浮き彫りになるからである。これまで『幽情記』の出处を探る作業は原田親貞と井波律子の両氏が行っている。原田氏は二回にわたって『幽情記』諸篇が依拠した中国の古典を示し、露伴の参看した資料の範囲は広く、数も多いと指摘している⁽⁸⁾。井波氏は中国の筆記類との関係に注目し、「玉主」は「作りかえ」の手法が最も顕著であり、王朝交替期に生きる人々を描く「楼船断橋」「共命鳥」「泥人」「狂濤艶魂」の四作は「人々の醜悪を稀薄している」と指摘し、典拠よりイメージのよい「懐かしい男と愛おしい女が繰り広げる縹渺とした、清新な物語世界」を作り上げたと評価している⁽⁹⁾。

しかし、典拠考には検討の余地がまだまだ多く残っている。例えば、「玉主」の典拠に関して、井波氏の言う『万曆野獲編』（妓女・劉鳳台）よりも、原田氏の指摘した、明の詩人の徐燾の「玉主行有引」のほうが内容も文章表現も近いことが認められる。井波氏が比較に使う資料は適切ではない。一方、原田氏の示した本文、特に詩に關しては、概ね『鉄崖先生古楽府』といったような詩人の個人詩集を挙げている。しかし、『幽情記』の本文と相違する場合があります、原田氏も露伴が「どのテキストに拠ったかは未確認である」と述べている。一篇の詩が様々な書物に収録されている場合があります、露伴が必ずしも直接詩人の個人詩集を読んでいたわけではない事を考慮する必要がある。言い換えれば、アンソロジーのような書物より『幽情記』の材料を得た可能性がある。本論文は原田氏の先行研究を踏まえ、露伴が拠り所にした書物を探求したい。

第一節 『情史』

詩のある物語の類、つまり詩話や筆記小説等において調査を行い、『幽情記』の典拠を探したところ、先ず明・馮夢龍編の『情史』の「陸務観」は、『幽情記』の中の「幽夢」と類似性が高く、『幽情記』の題材を多く含んでいることが分かった。『情史』における『幽情記』各篇の物語と類似する箇所を示すと、左の表1の通りである。

(表1)

作品名(『幽情記』の順番を記す)	『情史』における類似する物語の所在
二、師師	卷六情愛類「李師師」、「長沙義妓」
七、泥人	卷八情感類「白頭吟」
九、碧梧紅葉	卷十二情媒類「于祐」
十一、金鵲鏡	卷四情俠類「楊素」、「紅拂妓」
十三、幽夢	卷十四情仇類「陸務観」

『情史』は明代後期の馮夢龍(一五七四―一六四六年)の編纂とされている文語の筆記小説集である。『情史類略』『情天寶鑑』とも称される。男女の情事を情貞、情縁、情私など二十四類に分類して記した書物である。一篇の作品の最後に、編者による評論、類話、考証もある。『幽情記』は、男女を記す内容といい、類話や考証をも有する筆記体の体裁といい、『情史』と似ているのである。

『情史』の日本における受容について、徳田武氏は、『情史』は都賀庭鐘・上田秋成等の江戸中期の人々には盛んに読まれており、さらに遡って貞享頃にも『情史』が日本に伝わっていたと述べている⁽¹⁰⁾。江戸期に既に『情史』が流布していたことが分かる。

齊藤希史氏は、明治初年『情史』からおもだった話を抜粋して、さらに返り点と送り仮名を付して出版された漢文短編小説集『情史抄』が広く読まれたと指摘している⁽¹¹⁾。ただし、露伴が扱ったのは、この田中正彝の『情

史抄』ではない。『情史抄』では表1で示した『情史』における類似する物語のうち、「李師師」「白頭吟」「陸務観」の三篇が『情史抄』には抄録されていない。

森鷗外の自伝的要素の濃い「キタ・セクスアリス」(『昴』7号、明40・9)の中に中国の明小説への言及があり、『情史』が取り上げられている。東京大学附属図書館蔵「鷗外文庫」に収められた『情史』(題名は『情史類略』となる)には、圈点、傍点などが多く見られ、鷗外による書き込みが散見されるという⁽¹²⁾。以上の通り、『情史』は江戸期から明治まで広く受容された書物であることがわかる。露伴もそれを手に入れることは容易である。

次に『幽情記』と『情史』⁽¹³⁾とを比較し、両者の類似性を検証する。比較の作業は語句と内容との二つの面から行う。語句の面は詩の語句、固有名詞、数字等に注目して比較する。なぜならば、露伴が引用する場合、踏襲するはずの箇所だからである。また、露伴は一篇のうちに詩とその逸事を幾つも並べることが多い。その詩と逸事の内容と配列の順序から典拠であるか否かを判断できる。なお、『情史』との比較だけでは『幽情記』と相似する程度を測定し難いので、それをより明瞭に表示するために、原田氏の前掲論文「中国文学と幸田露伴(二)――主として『幽情記』をめぐる――」に指摘された典拠を対照として導入する。以上は比較作業の方法である。

語句と内容の両方において、『情史』との関係が明白である「幽夢」を例として説明する。まず語句レベルで比べてみる。「幽夢」に陸游の禹跡寺の詩が書き下して引用してある。原田氏の挙げた『剣南詩稿』、そして『情史』巻十四情仇類「陸務観」の本文を合わせて並べると以下の通りである。

落日に城の南 鼓角哀しみ、
沈園も 復旧の池台に非ず。
心を傷ましむ橋の下の春の波の緑、
曾て見_レき驚鴻の影を照らし来れるを。

(「幽夢」¹⁴)、傍線―引用者、以下同)

城上斜陽画角哀、
沈園非_ニ復旧池台_一。
傷_レ心橋下春波緑、
曾是_レ驚鴻照_レ影来。

(『劔南詩稿』卷三十八)

落日城南鼓角哀、
沈園非_ニ復旧池台_一。
傷_レ心橋下春波緑、
曾見_レ驚鴻照_レ影来。

(『情史』卷十四情仇類「陸務観」)

原田氏の論考では、この詩は『劔南詩稿』卷三十八所載のものであるが、起句の「城上斜陽画角哀」と結句の「曾是驚鴻照レ影来」については、露伴が「落日に城の南 鼓角哀しみ」及び「曾て見き驚鴻の影を照らし来れるを」としており、露伴の引用は陸游の詩集と違々と指摘している。その異同の箇所について、『情史』「陸務観」の方は、「幽夢」と一致していることが分かる。また、もう一首の壞壁断雲の詩を見てみよう。

年来の俗念 消除し尽し、

回向す 蒲龕に 一炷の香。

(「幽夢」)

年来妄念 消除尽、

回向禅龕 一炷香。

(『劔南詩稿』卷二十五)

年来俗念 消除尽、

回向蒲龕 一炷香。

(『情史』卷十四情仇類「陸務観」)

原田氏の論考では、この詩は『劔南詩稿』卷二十五所載のもので、「年来妄念」及び「禅龕一炷香」を露伴が

「年来俗念」及び「蒲龕一炷香」として見ると、『劍南詩稿』と「幽夢」の異同を指摘している。しかし、見ての通り、「幽夢」の本文は『情史』『陸務観』と完全に一致していることが分かる。

以上、語句レベルで検証してきた。次に内容の面から『情史』と「幽夢」との関係を検証する。表2は「幽夢」の内容を簡条書きにしたものである。表3は『情史』巻十四情仇類、「陸務観」の内容であり、本文を区切り、「幽夢」と対応する部分を表2と同じ数字で示す。

(表2)

①	陸游の伝
②	陸游と唐氏の逸話、釵頭鳳の詞
③	過去の思い、禹跡寺の詩
④	壞壁断雲の詩
⑤	沈園に行く夢を見て作った二章の詩
⑥	姑悪鳥の伝説と詩
⑦	菊枕の詩
⑧	妾の題壁の詩、生査子の詞
⑨	聖門一字の銘、恕

(表3)

陸務觀	②	③	④	⑤	⑧
陸務觀	<p>陸務觀游初娶唐氏、於其母夫人為姑侄。伉儷相得、而弗獲於姑、因出之。唐改適同郡宗子。嘗春日出遊、相遇于禹跡寺南之沈氏園。唐以語宗子、遣致酒殺、陸悵然久之。為賦釵頭鳳、題園壁云、紅酥手、黃藤酒、滿城春色宮牆柳。東風惡、歡情薄。一懷愁緒、幾年離索。錯錯錯。春如舊、人空瘦、淚痕紅浥鮫綃透。桃花落、閒池閣。山盟雖在、錦書難託。莫莫莫。唐見而和之、有世情薄、人情惡之句。未幾、怏怏而卒。聞者為之悵然。</p>	<p>放翁自與唐邂逅、終不能忘情。每過沈園、必登寺眺望、有絕句云、落日城南鼓角哀、沈園非復旧池台。傷心橋下春波綠、曾見驚鴻照影來。</p>	<p>及唐死、沈園亦三易主矣。放翁悵然有懷、復有詩云、楓葉初丹榭葉黃、河陽愁鬢怯新霜。林亭感旧空回首、泉路憑誰說斷腸。壞壁醉題塵漠漠、斷雲幽夢事茫茫。年來俗念消除尽、回向蒲龕一炷香。</p>	<p>嗣後夢游沈氏園、又作絕二云、路近城南已怕行、沈家園裏更傷情。香穿客袖梅花在、綠蘸寺橋春水生。城南小陌又逢春、只見梅花不見人。玉骨久成泉下土、墨痕猶鎖壁間塵。</p>	<p>又陸放翁之蜀、宿一驛中、見題壁云、玉塔蟋蟀鬧清夜、金井梧桐辭故枝。</p>

一枕淒涼眠不_レ得、呼_レ燈起作_二感秋詩_一。放翁詢_レ之、則駭卒女也、遂納_二為妾_一。方余
 理_二半載_一、夫人逐_レ之、妾賦_二卜算子_一云、只知_二眉上_一愁、不_レ識_二愁來路_一。窗外有_二
 芭蕉_一、陣陣黃昏雨。曉起理_二殘妝_一、整頓教_二愁去_一。不_レ合画_二春山_一、依_レ旧留_レ愁住。
 夫出_二一愛妻_一得_二一妬妻_一、母夫人之為_二放翁_一計者誤矣。然愛妻見_レ逐_二於母_一、愛妾復
 見_レ逐_二於妻_一、何放翁之多_二不幸_一也。

(『情史』卷十四情仇類「陸務觀」)

原田氏は「幽夢」が主人公陸游の詩集『劍南詩稿』『渭南文集』及び『詞綜』に基づいて書かれたと指摘している。しかし、『情史』『陸務観』では、「幽夢」②③⑤、⑧(表2による)の詩五首は同じ内容で同じ順番に並べられており、偶然とは言い難いほど一致しているのである。『情史』『陸務観』に⑥⑦の詩はない。おそらく露伴は主に『情史』に拠っているが、そのうえで陸游の詩集に拠って⑥⑦の詩を付け足したと考えられる。

以上、語句と内容の両方から比較し、原田氏が指摘した資料より『情史』『陸務観』のほうが「幽夢」との類似性が高いことが認められる。「幽夢」の本文が『劍南詩稿』『渭南文集』の本文と相違するが、『情史』『陸務観』と非常に一致している。また「幽夢」にある詩は『劍南詩稿』『渭南文集』及び『詞綜』に散在しているが、『情史』『陸務観』では「幽夢」と同じ順番で収められている。したがって、『情史』『陸務観』は露伴が利用した書物であり、つまり「幽夢」の出処であると考えられる。

一方、『情史』に類似の物語が見られる「師師」「泥人」「碧梧紅葉」「金鵲鏡」において、詩の本文に異同が

見られる。「幽夢」が『情史』『陸務観』を出処としたとすれば、『情史』から話を得て、さらに他の資料を利用し、この四作を作った可能性が高い。故に、露伴は『情史』を粉本として使っていたのであろう。

第二節 『続本事詩』

第一節では『情史』と『幽情記』とを比較し、『情史』は粉本であると推察した。ただし、『情史』は『幽情記』すべての物語を含んでいない。残りの作品は露伴が何を見て取ったのか。それらの作品は主に明末清初の物語である。『情史』は明末の編纂物であり、明清交替期の物語は収録されていない。調べたところ、『幽情記』の明末清初の物語は清・徐鉉編の『続本事詩』と類似することが分かった。『情史』と『続本事詩』における『幽情記』各篇の物語と類似する箇所を示すと、表4の通りである。

(表4)

作品名	『情史』、『続本事詩』における類似する物語の所在	物語の時代
一、真真	『続本事詩』巻二前集、貝瓊「真真曲」	元
二、師師	『情史』巻六情愛類「李師師」、「長沙義妓」	宋
三、楼船断桥	『続本事詩』巻一前集、楊維禎「西湖竹枝歌」	元末明初
四、水殿雲廊	『続本事詩』巻一前集、王蒙「宮詞」	明初

五、共命鳥	『続本事詩』卷七後集、錢謙益	明末清初
六、一枝花	『続本事詩』卷五前集、姚士粦、沈珣、袁宏道	明末
七、泥人	『情史』卷八情感類「白頭吟」 『続本事詩』卷二前集、鄭元「管夫人画」竹石」	宋末元初
八、玉主	『続本事詩』卷五前集、徐燊「玉主」	明末
九、碧梧紅葉	『情史』卷十二情媒類「于祐」	唐
十、狂濤艷魂	『続本事詩』卷九後集、周亮工「海上昼夢」亡姬」	明末清初
十一、金鵲鏡	『情史』卷四情俠類「楊素」、「紅拂妓」	六朝
十二、桃花扇	『続本事詩』卷八後集、吳偉業	明末
十三、幽夢	『情史』卷十四情仇類「陸務觀」	宋

このように『情史』『続本事詩』の両方に類似する「泥人」以外、他の作品はそれぞれ『情史』か、『続本事詩』のいずれかに所収された話である。『続本事詩』と類似する作品は九作もある。次に、『続本事詩』と『幽情記』との関係を考えてみたい。

清・徐鉉編『続本事詩』は出版時の表題が『本事詩』である。本論文においては、唐・孟棨編『本事詩』と区別をつけるために、現在の通称通り、清・徐鉉編『本事詩』を『続本事詩』と呼称する。孟棨は『本事詩』において、詩にまつわる物語を記す詩話の体裁を創始した。李学穎は「孟棨以降、事を記す詩話の書物が後について

現れる。(中略) 現存した書物のうち、本当の意味で孟棨の「詩を以て事を繋げる」という体裁を継承したのは、清初の徐鉉の『続本事詩』である⁽¹⁵⁾と述べている。『続本事詩』は詩人別に明初から清初の詩を収録する詩話である。徐鉉が「略例」において「誦_三之尊前酒辺」と言うように、すなわち酒宴の席で話題にするという目的で編集されている。宮廷・香閨・青楼・遊仙等の詩が編集されており、艶情豊かな本である。一方、女性の不幸な運命が詠まれ、国の興亡に対する感慨が窺える。『幽情記』各篇の中、半分以上は女性向けの雑誌に掲載されており、女性と関わる詩と逸事を多く持つ『続本事詩』は良い材料となったのであろう。

全国漢籍データベース・日本所藏中文古籍数拠庫は、日本の主要な大学図書館・公共図書館が所蔵する漢籍の書誌情報について、「経・史・子・集」の四部分類(叢書部を加えて五部分類)に基づきすべて網羅することを目的として、現在も構築中の総合漢籍目録データベースである。『続本事詩』の日本における受容を考える際、このデータベースを用い、その所蔵を調査した。清刊本のデータが十二件あり、そのうち、康熙、乾隆刊本が七点あり、江戸時代に舶載されていたことが分かる。また光緒十四(一八八八)年刊本が二点あり、その刊本が日本に現伝しており、明治期になっても好まれていたことが分かる⁽¹⁶⁾。

また、筑波大学附属図書館蔵、徐鉉『本事詩』十二卷には、「故教授文学博士那珂通世遺書」「那珂」「梧楼主人坐右圖書」「那珂文庫」の印記がある。梧楼は那珂通高(一八二七—一八七九年)の号である。「梧楼主人坐右圖書」から窺えるように、徐鉉の『続本事詩』は那珂通世(一八五一—一九〇八年)が養父の那珂通高から承継した漢籍である。徐鉉編『続本事詩』は、学者に愛読されていたことが窺える。

『続本事詩』⁽¹⁷⁾と類似する物語を有する『幽情記』の作品を比較すると、まず「真真」⁽¹⁸⁾が『続本事詩』

の本文と類似性が高いことが分かった。

原田氏は前掲「中国文学と幸田露伴（一）」——主として『幽情記』をめぐって——において貝瓊の『清江貝先生詩集』巻二の「真真曲」を使っていると指摘している。内容から見て露伴の「真真」と似ているが、人名のところは『幽情記』の「真真」と異同があるのである。『続本事詩』では貝瓊の「真真曲」が収録されており、『清江貝先生詩集』に収められた「真真曲」と語句のレベルで異同がある。例えば、人名についての記述は以下の通りである。

且年齒相当れる翰林の属官黄速（一に曰く王杖）といふものゝ、官猶微なれども人いと好きを択み出し、汝妻無し、此女を与へん、吾は即ち其父なるぞ、と云ひければ、黄は喜びて領承しける。

（「真真」）

且謂翰林属官王棣曰、汝無妻、以此姫配汝、吾即其父也。

（貝瓊『清江貝先生詩集』「真真曲」）

且謂翰林属官王杖按：高季迪集王杖作黄速、且云「速後至顯官」。同館之士、多賦詩者。曰、汝無妻、此姫配汝、吾即其父也。

（『続本事詩』巻二前集、貝瓊「真真曲」）

「真真」には真真の夫が「黄速（一に曰く王杖）」と記されている。貝瓊の『清江貝先生詩集』には「王棣」

と記され、「真真」の記述とは異なる。それが、『続本事詩』巻二前集、貝瓊「真真曲」の序には、本文では王杖となっており、さらに注である「按」の部分では高季迪集における黄逵という人名表記を補足しており、露伴は「真真」において高季迪集における黄逵を採用し、補足に王杖の人名も挙げている。順番は前後するが、名前の表記は『続本事詩』と同じである。原田氏の指摘した貝瓊の詩集より、『続本事詩』のほうが「真真」に近似しており、典拠としての可能性が高い。

また、『幽情記』第五篇の「楼船断桥」⁽¹⁹⁾も『続本事詩』と類似性が高いのである。表5は「楼船断桥」の内容を簡条書きで示したものである。表6は原田氏の指摘した楊維禎『鉄崖先生古楽府』「西湖竹枝歌」の内容であり、表7は『続本事詩』巻一前集、楊維禎「西湖竹枝歌」の内容である。

(表5)

①	竹枝の紹介
②	楊維禎の紹介
③	楊の西湖竹枝歌
④	薛氏二女の蘇台竹枝詞
⑤	曹妙清の竹枝詞
⑥	張妙静の竹枝詞
⑦	楊維禎に和する者五十余人

③ 鐵崖先生古樂府卷之十

門人富春吳復類篇

西湖竹枝歌九首

蘇小門前花滿株、蘇公堤上女當壚。南官北使須到此、江南西湖天下無。

又

鹿頭湖船唱二報郎一、船頭不レ宿二野鴛鴦一。為レ郎歌舞為レ郎死、不レ惜三真珠成二斗量一。

又

家住二城西新婦磯一、勸レ君不レ唱二縷金衣一。琵琶原是韓朋木、彈得鴛鴦一処飛。

又

勸レ郎莫レ上二南高峰一、勸レ我莫レ上二北高峰一。南高峰雲北高雨、雲雨相催愁一殺濃一。

又

湖口樓船湖日陰、湖中斷橋湖水深。樓船無レ柁是郎意、斷橋有レ柱是儂心。

又

病春日日可二如何一、起向二西窓一理二琵琶一。見レ説枯槽能二卜命一、柳州街口問二來婆一。

又

小小渡船如二缺瓜一、船中少婦竹枝歌。歌声唱二入空侯調一、不レ遣二狂夫橫渡一河。

又	石新婦下水連空、飛來峰前山万重。妾死甘為石新婦、望郎忽似飛來峰。石新婦、秦王纜石是也。
又	望郎一朝又一朝、信郎信似浙江潮。牀脚搗龜有時爛、臂上守宮無日銷。
	(楊維禎『鉄崖先生古樂府』)

(表 7)

③	<p>西湖竹枝歌 一作小臨海曲</p> <p>鉄崖既作西湖竹枝歌、一時和者甚衆。遂有薛氏女蘇台竹枝之唱、伝以為佳話云、蘇小門前花滿株、蘇公堤上女當壚。南官北使須到此、江南西湖天下無。</p> <p>鹿頭湖船唱、船頭不宿野鴛鴦。為郎歌舞為郎死、不惜真珠成斗量。</p> <p>家住城西新婦磯、勸君不唱縷金衣。琵琶原是韓朋木、彈得鴛鴦一處飛。</p> <p>勸郎莫上南高峰、勸我莫上北高峰。南高峰雲北高雨、雲雨相催愁殺儂。</p> <p>湖口樓船湖日陰、湖中斷橋湖水深。樓船無柁是郎意、斷橋有柱是儂心。</p> <p>病春日日可如何、起向西窓理琵琶。見說枯槽能卜命、柳州衙口問來婆。</p> <p>小小渡船如缺瓜、船中少婦竹枝歌。歌声唱入箜篌調、不遣狂夫橫渡河。</p>
---	---

石新婦下水連空、飛來峰前山万重。妾死甘為石新婦、望郎忽似飛來峰。石新婦、秦王纜石是也。

望郎一朝又一朝、信郎信似浙江潮。牀脚搗龜有時爛、臂上守宮何日銷。

附薛氏蘇台竹枝詞

吳郡薛氏二女、蘭英蕙英、聰慧能詩、見鐵崖西湖竹枝詞、笑曰、西湖有竹枝曲、東吳獨無乎。乃效其体、作蘇台竹枝詞十章。楊見其藁、手題二詩於後

一云、錦江只見薛濤箋、吳郡今佗蘭蕙篇。文采風流知有日、連珠合璧照華筵。難弟難兄並有名、英英端不讓瓊瓊。好將筆底春風句、譜作瑤箏絃上聲。自是名播遠邇、咸以為班姬蔡女復出也。

姑蘇台上月团团、姑蘇台下水潺潺。月落西邊有時出、水流東去幾時還。

館娃宮中麋鹿游、西施去泛五湖舟。香魂玉骨歸何處、不及貞娘葬虎邱。

虎邱山上塔層層、静夜分明見仏燈。約伴燒香寺中去、自將釵釧施山僧。

門泊東吳万里船、烏啼月落水如煙。寒山寺裏鐘聲早、漁火江風惱客眠。

洞庭金柑三寸黃、笠沢銀魚一尺長。東南佳味人知少、玉食無由進上方。

荻芽抽筍棟花開、不見河豚石首來。早起腥風滿城市、郎從海口販鮮回。

楊柳青青楊柳黃、青黃變色過年光。妾似柳絲易憔悴、郎如柳絮太顛狂。

翡翠双飛不待呼、鴛鴦並宿幾曾孤。生憎宝帶橋頭水、半入吳江半太湖。

一縷鳳髻綠如雲、八字牙梳白似銀。斜倚朱門翹首立、往來多少斷腸人。

⑥	⑤
<p>詞云、憶下把明珠一買妾時上、妾起梳頭郎画眉。郎今何処妾獨在、怕見花間双蝶飛。</p> <p>(『続本事詩』卷一前集、楊維禎「西湖竹枝歌」)</p>	<p>百尺楼台倚碧天、欄杆曲曲画屏連。儂家自有蘇台曲、不_レ去_三西湖唱_二採蓮。</p> <p>按鉄崖竹枝原倡、自薛氏女外、有_三士女曹妙清_一、号_二雪齋_一、居_二錢塘_一、善_レ鼓_レ琴、工_三書法_一。嘗和_二鉄崖西湖竹枝曲_一云、美人絶似_二董嬌嬈_一、家住_二南山第一橋_一。不_レ肯_二随_レ人過_レ湖去_一、月明夜夜自吹_レ簫。因写_レ詩寄_レ楊、楊答_レ之云、紅牙筦蒂紫狸毫、雪水初_レ融玉帶袍。写_一得薛濤萱草帖、西湖紙価可_レ能_レ高。玉帶袍、其家硯名也。</p> <p>又有_三士女張妙浄_一、字惠連、亦_二錢塘人_一、善_三詩章音律_一、居_二春夢樓_一、亦與_二鉄崖_一倡和。其竹枝</p>

原田氏は前掲「中国文学と幸田露伴(一)」―主として『幽情記』をめぐる―において、「楼船断橋」中に引いている竹枝歌(表5の③)は、楊維禎『鉄崖先生古楽府』卷十にある「西湖竹枝歌九首」²⁰⁾(表6)のうちの第四首、第五首及び第八首であると述べている。語句レベルの相違はないが、露伴が他に引用した詩(表5の④⑤⑥)の典拠については述べられていない。一方『続本事詩』卷一前集、楊維禎「西湖竹枝歌」(表7)には、表5の③④⑥の詩を収めており、しかも同じ順番となっている。『続本事詩』「西湖竹枝歌」と「楼船断橋」と類似性が高く、露伴が『続本事詩』に拠って「楼船断橋」を書いた可能性は十分に考えられる。

以上「真真」「楼船断橋」は『続本事詩』に拠ったことを検証した。それ以外の七作も内容において『続本事詩』と類似している。ただし、語句レベルでは「桃花扇」「狂濤艶魂」の詩語に相違があり、引用は他の資料に

扱った可能性がある。露伴は『続本事詩』より物語を得て、「真真」「楼船断橋」のように直接引用もしたが、さらに他の資料を求める場合もあったようである。しかし、『続本事詩』は露伴が『幽情記』を創作する際の粉本であった事は先ず間違いあるまい。

おわりに

『情史』と『続本事詩』はともに『幽情記』の創作時期まで日本に受容されており、『情史』は筆記小説集であり、『続本事詩』は詩話であり、何れも詩のある物語である。内容に関して、『情史』では男女の情事、『続本事詩』では女性を詠む詩と物語が主として収録されており、『幽情記』にとって好都合の材料である。

また「幽夢」「真真」「楼船断橋」を見た通り、『情史』または『続本事詩』の関係する部分は内容及び語句の面において酷似していることから、露伴が利用したもの、つまり出处として認めることができる。さらに他の作品は『情史』『続本事詩』のどちらかに共通する話が含まれていることから、『情史』と『続本事詩』は『幽情記』の粉本と考えてよいだろう。

第二章と第三章においてそれぞれ「狂濤艶魂」と「共命鳥」とを分析し、露伴の創作方法について考察する。その上で『幽情記』の全体を捉え、この時期の露伴の文学観を把握することを目的とする。

註

- (1) 「新刊紹介 幽情記(幸田露伴著)」(『太陽』25巻5号、大8・5)
- (2) 「新刊紹介」(『読売新聞』大14・6・25)
- (3) 塩谷賛「幽情記」(『幸田露伴』中巻、中央公論社、昭43・11)
- (4) 柳田泉『幸田露伴』(中央公論社、昭17・2)
- (5) 篠田一士「幸田露伴のためにI」(『文学』34巻5号、昭41・5)
- (6) 瀬里廣明「露伴における愛について」(『文明批評家としての露伴』、未来社、昭46・9)
- (7) 登尾豊「『幽情記』の周辺―露伴の明治から大正へ―」(『幸田露伴論考』日本図書センター、平18・10)
- (8) 原田親貞「中国文学と幸田露伴(一)―主として『幽情記』をめぐる―」(『学苑』505巻、昭57・1)、「中国文学と幸田露伴(二)―主として『幽情記』をめぐる―」(『学苑』517巻、昭58・1)
- (9) 井波律子「露伴の中国小説―『幽情記』と『運命』について」(『文学』6巻1号、平17・1)
- (10) 徳田武「西鶴と十七世紀中国文学―『西鶴諸国ばなし』と『情史』―」(『西鶴新展望』勉誠社、平5・8)
- (11) 齊藤希史『漢文脈と近代日本―もう一つのことばの世界』(日本放送出版協会、平19・2)
- (12) 林淑丹「森鷗外と明清小説―『舞姫』『うたかたの記』『雁』を中心に」(『国際日本文学研究会会議録』28巻、平17・3)
- (13) 『情史』は、東京大学附属図書館「鷗外文庫」蔵の清刊本『情史類略』(立本堂)を使用する。

- (14) 初出：『淑女画報』大4・8、原題「美人と詩人（古今婦人大觀其一）」
- (15) 李学穎「出版説明」（『本事詩・続本事詩・本事詞』上海古籍出版社、1991・4）
本文の引用は論者が翻訳したものである。本文は以下の通りである。

孟桀之後、紀事詩話踵起。五代処常子曾撰続本事詩、惜已佚而不伝。聶奉先続本事詩、僅存十五條、其中七條明引北宋人事。抑今人吳企明考證、聶奉先続広本事詩五卷、載陳振孫直齋書錄解題卷二十二、則聶当為宋人、書名亦当作「続広本事詩」。以留存過少、姑置不論。宋計有功唐詩紀事、已側重於存人録詩。厲鶚宋詩紀事成於清代、卷帙浩繁、更具有詩歌總集的規模、与「紀事」相去日遠。今存真正繼承孟桀「以詩繫事」的、当推清初徐鉉的続本事詩。

- (16) 残りの二点も清刊本であるが、刊年不記である。
- (17) 『続本事詩』は、筑波大学附属図書館「那珂文庫」蔵の清刊本『本事詩』（十二卷）を使用する。
- (18) 初出：『淑女画報』大6・1、原題「史譚群玉峰」
- (19) 初出：『新修養』大4・11、原題「竹枝韻話」
- (20) 楊維禎『鉄崖先生古楽府』（『四部叢刊』384、上海商務印書館）

第二章 「狂濤艷魂」考

はじめに

幸田露伴の「狂濤艶魂」は大正四年十一月に婦人雑誌の『淑女画報』で「驚濤艶魂（婦人大観其二）」と題して発表された。大正八年には「狂濤艶魂」と改題され、大倉書店の単行本『幽情記』に収録される。「狂濤艶魂」は明末清初の英俊の士たる周亮工と、その愛姫王氏との物語である。二人は戦場で詩を唱和しながら辛い日々を送る「琴瑟の和」の仲であったため、王氏の病死には、亮工は哀傷してやまなかつた。三年後、猶王氏のことを忘れることができず、既に清の臣となった彼は、明の忠臣である鄭成功と海上で対戦する際、遂に王氏の亡魂を見たと感じる。それに感嘆した亮工は詩を八章残した。これが「狂濤艶魂」の概略である。

この作品に対し、瀬里廣明氏はキリスト教の〈愛〉との関わりで、『幽情記』の中の「共命鳥」と「狂濤艶魂」が「夫婦の愛」の物語であり、「妻への鎮魂歌」であると指摘している⁽¹⁾。また、登尾豊氏は「狂濤艶魂」を「夫婦の濃やかな愛情・心の通いあい」の物語とし、露伴の亡妻追慕の情、再婚失敗の悔恨が込められていると主張し、作家の内面を表すという近代性を指摘している⁽²⁾。両氏は本作を露伴の実生活の反映として見ている。このような解釈には作品の独立性を消してしまう恐れがある。

第一章において、明・馮夢龍編の『情史』と清・徐飢編の『続本事詩』とが『幽情記』粉本であることを考察した。「狂濤艶魂」における周亮工と愛姫王氏との物語も『続本事詩』に収められる周亮工の詩「海上昼夢亡姫」に拠るものである⁽³⁾。そこには確かに周亮工と愛姫王氏の愛の物語、周亮工が亡妻を偲ぶ詩が記されている。ただし、露伴は他の典拠にも依拠している。その他の典拠を取り入れたことによって、本作は単なる夫婦愛

を描いた物語として片付けることができないと考える。本論は典拠との比較を行った上で、作品解釈を試みる。

第一節 周亮工の評伝

「狂濤艷魂」では、『続本事詩』巻九後集、周亮工「海上昼夢三亡姫」から得た周亮工と王氏との物語が描かれる前に、周亮工の評伝が挿入されている。それは以下のようなものである。明末の臣であった周亮工は清に仕え、人民を守る良い官吏である。人材を愛し、軍事の才能にも長け、獄で死に直面する時さえ自若としている。また、錢謙益等の諸家に高く評価され、詩文、絵画、印章、戯曲等、趣味が多い。この評伝は典拠の「海上昼夢三亡姫」に拠るのではなく、露伴が別の書物から集めてきたものである。その上、作品全体の半分弱を占めており、看過できない存在となっている。よって、露伴が物語の前に長々と周亮工の評伝を挿入したことは、何か意図があるのではないか。これについて考察していきたい。

原田親貞氏⁽⁴⁾によれば、周亮工の伝は清の錢儀吉の編になる『碑伝集』に基づいたと言う。両者を比較してみると、たしかに一致する部分を確認できる。しかし、清朝の人物伝を収集した伝記集は『碑伝集』に限らない。それよりも「狂濤艷魂」の記述とより一層類似している、露伴が蔵した⁽⁵⁾、江戸時代の村瀬季徳編の『清名家小伝』が典拠として相応しい。

『清名家小伝』は四巻四冊からなり、漢文で記されている清朝名家の伝記で、金彦章・錢謙益など本伝三十七名、付伝三十余名の伝記を収めている。成立時期は分らないが、文政二（一八一九）年の古賀侗庵（名は煜）

の序がある⁽⁶⁾。内容の出処については、「清名家小伝例言」⁽⁷⁾に、「清人事績。厘散^ニ見群冊^一。湊^一合為^レ編者鈔矣^一、「凡其所^ニ裁成^一。悉用^ニ原文^一。註^ニ其所^レ出^一とあるように、村瀬季徳は伝記を各書物から抄録し、その書名を示しているという。また「伝外有^ニ余意^一者。登^ニ之附録^一。或褒^ニ貶其人^一。或評^ニ隲^レ其著書及詩文^一。亦同登焉^一とあり、伝記の後に附録を付けて、その人、その著書、詩文に対する評価を記していることが分かる。

そこで、表記と内容の二つの面から、周亮工の伝が『清名家小伝』に拠ることを証明したい。まず、周亮工の著書の表記について比較する。左に本文と『清名家小伝』の記述を挙げる。

詩文に巧にして頼古堂集十二卷あり。絵画を嗜みて読画録四卷あり。篆籀の文、玉石の印、字妙刀奇を欣賞して、印人伝三卷あり。多く文芸の雑事を記して、間戯曲の韻話に及び、後人をして因りて以て考ふるあらしむるもの、因樹屋書影四卷あり。其他撰述少なからず、蓋数十種に至る。

(「狂濤艷魂」、傍線―引用者、以下同)

所^レ著有^ニ頼古堂集十二卷^一。閩小記二卷。同書四卷。印人伝三卷。読画録四卷。書影四卷等書^一。其他述撰至^ニ数十種^一。

(村瀬季徳編『清名家小伝』「周亮工」)

原田氏の前掲論文では、周亮工の著作をめぐる露伴の記述について、「頼古堂集十二卷」は二十四卷の誤りであり、「因樹屋書影四卷」は十卷の誤りであると指摘されている(傍点―引用者)。傍線部分に明らかかなように、露伴の書いた周亮工の著書は『清名家小伝』と同じ誤りとなっている。また、周亮工の著作については『碑伝集』

では記録されておらず、『清名家小伝』に録されている。

次に内容から見て、「狂濤艶魂」における周亮工の評伝は原田氏の指摘した『碑伝集』には記載されておらず、『清名家小伝』に記載されている。

一つ目は『今世説』の引用である。露伴は周亮工の人物を語る際、「王丹麓の著はす所の今世説の巻一に記す。」と『今世説』から引用したことを明記している。『碑伝集』における周亮工の伝では、『今世説』の記録は収められていない。それに対して、『清名家小伝』の「周亮工」では、出処を『今世説』と示しているのである。ただし、「狂濤艶魂」における『今世説』の引用が『清名家小伝』より詳しいことから、露伴は『清名家小伝』を手がかりにし、その後で『今世説』に至り、直接『今世説』から引用したと考えられる。

二つ目は錢謙益の評の部分である。「狂濤艶魂」における周亮工に対する錢謙益の評は、『碑伝集』には記載されておらず、『清名家小伝』の周亮工の伝に附録として載せられている。左記を見れば、「狂濤艶魂」の傍線部と『清名家小伝』の記述が一致することが分かる。

錢牧齋は明清の二朝に跨りて、一流の大官たり、海内の文宗たりし人なるが、また亮工を称して、元亮の人となりや、親に孝、君に忠、巋然として巨人長徳なりといひ、且其の朋友に篤く、故人門客の仰慕するところとなるを揚げたり。亮工はまことに懐かしき人なり。

(「狂濤艶魂」)

附録。錢牧齋曰。元亮之為人也。孝_ニ于親_一。忠_ニ于君_一。巋然巨人長徳也。(中略)其篤_ニ于朋友_一。如_レ此。

嘗守漳城也。故人門客在重囿中。相與登陴賦詩。無一人思解免者上。蘊義生風。豈徒哉。有学集

(村瀬季徳編『清名家小伝』「周亮工」)

以上の比較によって、先行論の指摘した『碑伝集』より、『清名家小伝』の方が「狂濤艶魂」における周亮工の評伝の典拠として相応しいことが確認できる。そして『清名家小伝』を「狂濤艶魂」の本文と比較してみると、露伴は原文を訓読して引用する、或は要約して記述する等、忠実に使用していることが分かる。ただし、典拠にはない露伴の創作による箇所もある。

清の順治二年清の師南京を下し、明の福王清に降るに及びて、亮工遂に明の復如何ともす可からざるを思ひ、清に仕へ民を安んずるを力めぬ。

(「狂濤艶魂」)

順治二年。清師下江南。遂以御史。招撫兩淮。尋授塩法道。

(村瀬季徳編『清名家小伝』「周亮工」)

このように、典拠との記述を比較してみると、傍線部の相違が目につく。『清名家小伝』では「御史を以て、兩淮を招撫す。尋いで塩法道に授かる」と清に仕え出した頃の官職が記されている。それに対して、「狂濤艶魂」では明の官であった周亮工が明朝は復興できないと見て、ならば人民のために努めるべきという心情が説明されている。本文はこの心情説明以降、『清名家小伝』の内容を用いて、周亮工が人民のために努める姿を描いている。「亮工の治を為すや、身を以て民を保つ、こゝをもて民其の恵を受け、黠猾の者も亦漸く負かざるに至る」

と述べ、下に『清名家小伝』から周亮工が八閩の人民を虐殺から守る事実を引用し、「まことに百姓に取りては好官たりしなるべし」と周亮工を評価し、誣告された時に百姓が憤慨する逸話をも引用している。このように露伴は『清名家小伝』から、人民のために振る舞う事実と、人民に愛される逸話を引用し、そこから典拠に書かれていない明に背き清に仕えた周亮工の心情まで創り上げている。典拠の逸話を利用して筋道の通った周亮工の像を描き出しているのである。

「狂濤艷魂」において、周亮工の明に背き清に仕える心情から、彼が容易に明に背くわけではなく、また自分の利益を優先させるわけでもないことが読み取れる。明の皇帝が都で清軍に降伏することになり、明朝への義を全うして最後まで清軍と戦うか、もしくは清の官となって戦争に巻き込まれた人民を救うか、明朝に対する義と人民に対する義と、二つの義のうち、どちらかにすることを余儀なくされ、彼は人民に対する義を選択したが、明に背くことに抵抗がないわけではなかったことは、この心情から窺えるのである。このように、露伴は典拠における周亮工の事跡を利用して、清朝に仕える周亮工の複雑な心情を描き出している。

第二節 「学陶」から見る周亮工

周亮工と王氏の物語の典拠である『続本事詩』巻九後集、周亮工「海上昼夢亡姫」は、周亮工が他界した愛姫王氏を海上で夢見て詠んだ詩である。詩話の体裁であるため、まず詩にまつわる物語が記され、その後詩八首が並べられている。海上の実景から王氏の亡魂、更に王氏との思い出が描かれ、王氏と死別する哀傷が表出さ

れる。「狂濤艶魂」ではその物語文に拠って周亮工と王氏の物語に成されており、最後に詩八首のうち四首が挙げられている。典拠と比較することによって、周亮工と王氏の物語においても周亮工の心情が仄めかされていることが分かる。

王氏の臨終の場面が次のように描かれる。

左手には念珠を持ち、右には君が名および学陶の字ある彼の小玉印を賜はりて此を握りつゝ逝かん。

(「狂濤艶魂」)

王氏が臨終の際に、周亮工の名及び学陶の字のある印章を手取ることを願ったと描かれている。典拠である周亮工「海上昼夢亡姫」の物語文の同じ場面では、遺言に「左持念珠、右握郎君名字章」と周亮工の名の印章としか提示していないが、「狂濤艶魂」では「学陶の字」のある印章と補足されている。この補足は典拠の詩の自注に拠るものである。

香粉瑩中葬佩刀、月明起舞鬼能豪。新銘嘱記前金粟、小伝歡携旧学陶。百雉城高驚白浪、孤鴛夢冷憶江阜。依稀更見帷中面、玉歩声揺大海濤。 姫嘗自称金粟如来弟子。予有連珠小玉章、鐫予名及学陶字、 姫没時嘱予納掌中。白浪河在北海城西。

(『続本事詩』卷九後集、周亮工「海上昼夢亡姫」)

詩の自注に周亮工の名及び学陶の字を鐫刻した小玉章とあり、露伴はこれを物語文の遺言と調合させて本文を成している。露伴が意図的に「学陶」の語を加えたことの意図について検討したい。

まず、この「学陶」は何を意味するだろうか。「学陶」という熟語は宋の時代に既に見られる。宋・陳善の詩

話『捫虱新話』下集卷七⁽⁸⁾では、

柳子厚白樂天学_レ陶東坡和_二陶詩_一

山谷常謂、白樂天柳子厚俱效_二陶淵明_一作_レ詩、而唯子厚詩為_レ近。

とタイトルに「学陶」の言葉があり、その意味は本文に「陶淵明に倣って作詩すること」と説明されている。したがって、「学陶」とは陶淵明に倣って作詩することを言う。中国古典文学では、李白、杜甫を「李杜」と称するのように、姓を用いて特定の人物を指すという方法がある。それと同じように陶が陶淵明を指している。中国古典に詳しい露伴はこれを当然知っていたと思われる。

では、「学陶」の印章は周亮工にとってどのような意味を持っているだろうか。陶淵明は東晋末の政治に失望して官を辞任し、やがて郷里に帰って田園生活を楽しむこととなったのは周知の通りである。周亮工が自分の印章に「学陶」を入れることは、陶淵明を志すとする意味であろう。典拠である「海上昼夢_二亡姫_一」にも周亮工の「学陶」の志が反映している。

瀚海誰憐_レ驅_二戰船_一、草堂空約_レ註_二農書_一。瀕_レ行猶道_二波濤惡_一、何似_二閒乘_二下沢車_一。

(『続本事詩』卷九後集、周亮工「海上昼夢_二亡姫_一」)

下沢車とは、沼沢地帯に走れる軽便な車のことであり、田舎で運搬に使われる物である。険悪な海戦の中で、農書を注釈し、下沢車に乗るような長閑な生活がとても送れないことが詠まれており、陶淵明のような田園生活を憧憬していることが読み取れる。「学陶」には周亮工が明が滅亡し、清の時代となる乱世において官を辞任し、田園生活を送るといった願いが込められている。更に王氏が遺言でその「学陶」の印章を要求していることから、

この思いは二人に共通しているものと考えられる。しかし、評伝部分で述べられるように、周亮工は人民を守るため清の官となった。陶淵明のように官を辞任すると人民を守れなくなる。そのため、「学陶」はあくまでも理想として胸中に潜み、現実的には官となって、その責任を果たすことができなかつた。この第二首の詩は「狂濤艶魂」では引用されていないが、露伴はそれを読んだに違いない。周亮工と王氏の物語において、この「学陶」の字のある印章を補足することで、明清交替期を生きる周亮工の苦悩を一層複雑なものにしている。

第三節 「海上昼夢三亡姫」にない鄭成功の登場

「海上昼夢三亡姫」の背景として、時はただ「己丑之夏」と書かれており、海戦の相手も記されていない。己丑の年といへば、清の順治六年の事なり。此時天下既に殆んど清の有とはなり居しが、明亡びんとして一縷の脈猶永明王を存し、鄭成功が忠義、一木を以て大厦を將に倒れんとするに支ふるあり。大勢定まるありと雖、鉄石屈せず、昼策甚だ力め、慷慨して休まず、時に苦闘して勝を得れば、則ち燭火の風を得て焰を揚ぐるが如きあり。順治の二年を以ては南京清に落され、三年を以ては福建も陥られけれども、四年に於いては成功功を以て国姓を賜はりて、国姓爺と号し、五年に於いては成功潼州を抜きて勢やゝ振ひ、此年六年、明の永曆三年、成功の衆を率ゐて来り攻むるや、櫟園既に清の官たれば兵を以て守らざる可からず。

詩の背景は鄭成功との対戦の場とされている。この典拠について考察したところ、特に傍線部の記述は『清名家小伝』『周亮工』での記述と似ているのである。

時鄭成功拋_レ厦門_一。率_レ衆來攻。亮工繕_三軍需_一。鳩_三民兵_一。堅_レ壁不_レ出。後八閩甫定。帥府以_三泉州十四寨居民爲_レ賊。欲_三發兵征勦_一。亮工力爭_レ之。願以_レ身保_三其無_レ他。全活不_レ可_三勝計_一。江南通志

(村瀬季徳編『清名家小伝』「周亮工」)

ただし、『清名家小伝』では鄭成功が何年に攻めたのかを記していない。よって、この戦役は必ずしも周亮工が王氏の亡魂を見て詩を詠む戦役と同一のものとは限らない。しかし、露伴はその記述を用いて、詩の背景と成している。鄭成功の人物について、「狂濤艷魂」中二箇所において書かれている。それはまず、冒頭に明末清初の英豪俊偉の士を枚挙する中、

明は李自成に覆され、李は清に亡ぼされ、朱氏の統、將に絶えんとして纔に存するの時に当りて、身を挺して義を唱へ、隻手に頽瀾を回さんとせるものを、国姓爺鄭成功とす。志成らずと雖、成功は実に明末の豪なり。

と鄭成功を「明末の豪」と賞賛している点である。「狂濤艷魂」で挙げられた明末清初の英豪俊偉の士のうち、鄭成功が唯一『清名家小伝』に伝記のない人物であり、鄭成功を挿入することに特別の意図があると考えられる。次いで、海戦の歴史背景を明かすところでも、鄭成功が「忠義」の士として描かれている。

此時天下既に殆んど清の有とはなり居しが、明亡びんとして一縷の脈猶永明王を存し、鄭成功が忠義、一木を以て大厦を將に倒れんとするに支ふるあり。大勢定まるありと雖、鉄石屈せず、晝ヒラ(画の誤植か―引用者注)策甚だ力め、慷慨して休まず、時に苦闘して勝を得れば、則ち燭火の風を得て焰を揚ぐるが如きあり⁽⁹⁾。

「海上昼夢亡姫」では詩の背景が記されていないが、露伴は『清名家小伝』の周亮工と鄭成功の対戦する記

述に抛り、詩の舞台を両者が対戦の海上と設定したと考えられる。更に鄭成功が明末の豪、忠義の士として描かれ、明臣であったが清に仕える周亮工とは政治的対立の立場となったとされているが、人民を守るためにやむを得ず明に背く周亮工は、明の忠臣である鄭成功を憎むことができず、この戦いは彼にとって不本意のものであると描かれている。この不本意な戦いの中、典拠には書かれていない周亮工の心情が次のように吐露される。

一天の暴、四海の乱、明清喊を發し箭叫を挙げて日の光暗く、南北怒を飛ばし恨を迸らして濤の勢激する、今の世の態、此の日の状、攻むる者は王に勤む、彼、何ぞ悪からむ、守る者は民の為にす、我も非ならざる也。ただ運蹇み時睽きて、世穩やかならず、風急に水動いて、海平らかならぬぞ是非なき。人の世に在る幾干も無きに、天霽海静、和楽の日の何ぞ少くして、風妬波曠、惨苦の境の何ぞ多き、と現世を飽かず想へるよりや亡人を恋ひ偲びけむ、切に王氏の憶ひ出され思ひ出されて已まず、雲黯く、空黯く、潮ぐもり黯き海中の船艙の裏に、風呻き浪呻き物の軋り呻く声を聞きて、心も暗く結ばるゝ時、王氏の亡魂は遂に形を現はしぬ。

周亮工は、明の忠臣である鄭成功と、人民の為に清の官となる自分のどちらにも非はないにも関わらず、対戦せざるを得ないという苦しい境地に追い込まれる。そのような戦いが続く明清交替の時期、和楽の日はなんと少ないことかと、王朝交替の乱世に翻弄される無力感と惨苦の人生に対する感嘆が吐露されている。戦争より平和の日が望ましいと考える周亮工は、「学陶」の志を共有する王氏を頻りに想うようになり、さらに現世の解決しえない苦悩があつた世の王氏への恋しい情へと発展する。その情が高まっていき、遂に王氏の亡魂を見るところというクライマックスに達する。苦悩している周亮工にとって、王氏への恋しさは彼女の亡魂を見るほど激しいものにな

ったのである。

また補足すれば、戦争より平和の日が望ましい周亮工は臆病で戦争を嫌うわけではない。なぜならば、評伝で述べられるように彼は軍事的才能を持っており、しかも死に直面して自若する気概がある人物だからである。あくまでも忠義の鄭成功との対戦という点に対し苦悩するのである。

このように、典拠の「海上昼夢三亡姫」では海戦の背景が書かれておらず、単に周亮工が海上でさびしい景色を見て王氏の亡魂を夢に見た筋となっており、そこから愛しい王氏を悼む情が読み取れる。一方、「狂濤艶魂」では、詩の舞台が明の忠臣である鄭成功との対戦とされており、それによって王朝交替の乱世における周亮工の苦悩が描かれる。そうすることで周亮工の王氏に対する恋しさは、現世の耐え難い苦悩を救うほど強烈な情であることがより鮮明となる。

おわりに

露伴は『続本事詩』巻九後集、周亮工「海上昼夢三亡姫」に拠り、周亮工とその愛姫の王氏との物語を描き、『清名家小伝』を材料に作った周亮工の評伝を記している。典拠を忠実に引用しながら、露伴なりに加工して、「海上昼夢三亡姫」にはない周亮工の王朝交替の乱世における心の葛藤をを現前させ、王氏に対する、苦悩を救うほど強烈な情を呈している。

明清交替期に生きる周亮工の内面を描くことは、この時期の露伴にとって決して偶然ではなかった。井波律子

氏が指摘したように、『幽情記』の中では、さらに「楼船断橋」、「共命鳥」、「泥人」の三篇も「王朝交替期に複雑な生き方をした人々をとりあげたもの」である⁽¹⁰⁾。高橋菊弥氏は『幽情記』の他、それと同じ時期の『運命』にも、「忠節の臣たちの壮烈で流血淋漓の刑死」を詳細に描く場面があると述べている⁽¹¹⁾。露伴が王朝交替期の人々を取り上げた背景について考えたい。「忠義」という問題は日本古来より論じられてきたテーマである。日露戦後、その問題が再び盛んに議論されていた。そして、一九一一年に勃発した辛亥革命の時期に、清朝を救援する忠臣義士がいればかりか、袁世凱のような革命党と連携する臣が目立っていた。そこで、日本には赤穂浪士などの忠臣義士がいるのに対して、清国にはいないと物議を醸していた。この背景について第三章で取り上げる「共命鳥」において詳しく考察することとする。露伴は当時の議論に対し単純に忠臣義士を賞賛し、二臣を貶めるのではなく、明に背いて清に仕えた周亮工の内面を現前させることによって、英俊が乱世において理想と離れた生き方を余儀なくさせられた結果、愛した王氏に対する強烈な情詩に詠んだ様子を描いた。

「狂濤艶魂」はその多くを典拠に依拠しており、文学作品と認識されなかったが、典拠と比較することで、露伴の創作部分に分かり、さらにそれが個々の引用を一つの作品世界と成していることが分かった。露伴は「天うつ浪」の中絶以降小説を書けなくなったと言われているが、「狂濤艶魂」において、彼は典拠を手にして創作を行っているのである。『幽情記』の他の篇も一見典拠を忠実に引用したのみに思われるが、「狂濤艶魂」のように、露伴の創作した文学作品として読み得る。そこで、第三章において「共命鳥」を取り上げ、典拠と比較しながら確認していく。

注

- (1) 瀬里廣明「露伴における愛について」(『文明批評家としての露伴』未来社、昭46・9)
- (2) 登尾豊「『幽情記』の周辺―露伴の明治から大正へ―」(『幸田露伴論考』日本図書センター、平18・10)
- (3) 『続本事詩』は、筑波大学附属図書館「那珂文庫」蔵の清刊本『本事詩』(十二卷)を使用する。
- (4) 原田親貞「中国文学と幸田露伴(二)」―主として『幽情記』をめぐる―(『学苑』517巻、昭58・1)
- (5) 柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」(一)〜(二)(『文学』34巻3号〜4号、昭41・3〜4)
- (6) 近藤春雄編『日本漢文学大事典』(明治書院、昭60・3)
- (7) 杉山精一「清名家小伝例言」は、村瀬季徳編『清名家小伝』に拠る。『清名家小伝』は筑波大学附属図書館蔵の刊本『清名家小伝』(文政2年序)を使用する。句読点と返り点は本文に従う。その他の漢文資料の句読点、返り点は論者による。
- (8) 宋・陳善『捫虱新話』下集卷七(上海書店、1990・9)
- (9) 鄭成功をモデルに脚色した近松門左衛門の『国性爺合戦』が、正徳五(一七一五)年十一月に初演されてから大人気となり、鄭成功の忠義の士というイメージが人口に膾炙すると言える。幸田露伴が「鄭成功」(『少年世界』4巻4号、明31・6)においても、同じく鄭成功を忠義の臣として描いている。
- (10) 井波律子「露伴の中国小説―『幽情記』と『運命』について」(『文学』6巻1号、平17・1)
- (11) 高橋菊弥「露伴の歴史小説「運命」の背景―野史的復元力の様相―」(『郷土作家研究』27巻、平14・7)

第三章 「共命鳥」考

はじめに

幸田露伴の「共命鳥」は大正五年九月と十月の二回にわたって婦人雑誌『淑女画報』に「共命鳥―清初の詩人とその愛人」と題して発表された。大正八年三月には「共命鳥」と改題され、単行本『幽情記』に収録される。

「共命鳥」は明末清初の大文豪である

錢謙益とその愛姫、才色双全の柳如是との物語である。明の末頃、錢謙益は南明の官吏だったが、南明が敗北してから、殉死を促す柳如是の意見を聞かず、清に降伏し、清朝の官吏となった。しかし、やはり獄に下され、門弟や家族が多くある中、唯一柳如是が救出を画策した。それに対して錢謙益は感激して詩を詠む。さらに錢謙益の死後、柳如是は家を崩壊から守った後、錢謙益に殉死する。これが「共命鳥」の概略である。

『幽情記』は刊行当時、創作というより、研究的価値が評価されていた⁽¹⁾。典拠と比較して実証的に『幽情記』が創作であると論証するのは井波律子氏の論考である⁽²⁾。「共命鳥」に関しては、錢謙益の「二臣」というマイナス面を深く描かず、「文学者としての偉大さ」というプラス面に目を向けつつ、柳如是との「深き縁」に力点を置いたものと指摘している。本論文は井波氏の指摘を受けつつ、さらに露伴の依拠した複数の典拠との比較を通して、「共命鳥」の独自性を考察していきたい。

第一章において「共命鳥」の典拠は清初の詩話集『続本事詩』であると論じた。しかし、『続本事詩』に拠っているのは一部であって、さらに多くの資料が他の典拠より採取され、露伴独自の錢謙益と柳如是との物語が繰り広げられる。以下「共命鳥」の構成とそれぞれの典拠を示す。

I 錢謙益の評伝

(典拠)

- 1、明末清初の江左三大家…錢謙益、吳偉業、龔鼎孳。
- 2、錢謙益の字、号、出身地。
- 3、明末から清にかけて、官途に険難が多い。
- 4、学識豊富、文才卓絶。詩文の評価。
- 5、人品は水滸伝の浪子燕青に擬される。

『続本事詩』

『清名家小伝』

『清名家小伝』

『明史紀事本末』

II 柳如是と錢謙益

- 1、才色双全の柳如是与錢謙益とがめでたく結ばれる。
- 2、紅豆山莊を築き、二人で生活する。
- 3、紅豆の伝説。
- 4、錢謙益の紅豆集。
- 5、錢謙益と柳如是が競って詩を作る。

『虞初新志』

『続本事詩』

『有学集』

『虞初新志』

III 柳如是を後世まで伝える理由

- 1、柳如是の才能、美貌ではない。
- 2、柳如是の義の行動。

『続本事詩』

(1) 国が滅ぶにあたって、錢謙益に殉死しようとする。

(2) 錢謙益が獄に下され、進退を同じくすると決心し、一人で夫を支える。

『有学集』

(3) 錢謙益の死後、悪人から家を守り、夫に殉死する。

『虞初新志』

以上に示した通り、「共命鳥」は『続本事詩』より基幹的な題材を得たものの、部分部分については、他の典拠に拠るものであることが分かる。そこで、「共命鳥」の錢謙益と柳如是の話がどのように語られているのか、そこからどのようなことが見えてくるのか、露伴が取り入れた典拠との比較を手がかりに考察していきたい。

第一節 錢謙益の評伝

「共命鳥」は、『続本事詩』が詩やその物語を記録するのと違い、錢謙益の評伝が詳しく挿入されている。無論日本の読者に紹介するためでもあろうが、物語と関わりながら取捨選択する工夫が読み取れる。錢謙益について、とりわけ明末から清初までの政治活動、詩文の才能、さらに『水滸伝』の浪子燕青に擬される性格が叙述されている。

前掲した「共命鳥」の典拠のように、この評伝は江戸時代の村瀬季徳の『清名家小伝』⁽³⁾「錢謙益」と清の谷応泰の『明史紀事本末』⁽⁴⁾巻七十一「魏忠賢乱政」に拠ったものである。作品中、『明史紀事本末』は「谷氏記事本末」の別名で明示されている。それに対して、『清名家小伝』は明示されていない。比較を通して、「共命鳥」の本文は『清名家小伝』との類似性が高く、露伴は『清名家小伝』に拠ったことが分かる。

次の『清名家小伝』「錢謙益」の構成を見てみると、「共命鳥」との類似性が高いことが分かる。

本伝：

- ① 明朝の頃の官途
- ② 明末清初の官途
- ③ 学問と詩文の評

附録：

- ④ 柳如是の逸事（主に『虞初新志』による）
- ⑤ 閻潜邱の銭が列朝詩集を撰する逸話及び銭の文章への評価
- ⑥ 銭死後乾隆頃の悪評価

傍線は露伴が「共命鳥」において引用した部分を示す。銭謙益の評伝以外、『虞初新志』（清の張潮が編纂した短編文言小説集である）に拠った柳如是の逸話、また銭謙益の文章への評価、銭謙益の死後乾隆頃の評価も「共命鳥」と一致している。加えて、第二章に論じたように、「狂濤艶魂」における主人公周亮工の評伝も『清名家小伝』に拠ったものであるため、露伴が『清名家小伝』より銭謙益、柳如是の評伝や逸話を入手したと考えられる。

銭謙益は清朝に降伏して官となったことで、乾隆帝の頃に二臣、無節の人と議論されていた。このことは露伴も十分承知していた。例えば「共命鳥」においては、次の二箇所のように銭謙益の歴史的評価が述べられている。

国亡びて生を偷み、節虧けて官に任ぜる謙益の所行は、後の人の厭ひ悪むところながら、才能尋常ならざりければ、礼部右侍郎をもて、秘書院学士の事を管かりけり。

康熙（乾隆の誤り―引用者注）の世に当り、臣節を励まし、人心を正しうするの議を以て、牧齋（錢謙益の号―引用者注）の著述詩文は、尽く銷燬削す可きを命ぜられたりと雖も、其の有学集・初学集以下、楞齋經鈔等に至るまで、遂に滅亡せず。

（「共命鳥」）

井波氏は露伴が錢謙益の「二臣」というマイナスの面を深く描かず、「文学者としての偉大さ」というプラス面に目を向けたと論じているが、少し掘り下げて考察する必要がある。典拠との比較によって、露伴は意図的に明末清初という王朝交替期における錢謙益の政治活動を描いていることが明らかになったからである。

典拠の『清名家小伝』では、錢謙益の政治活動が記されている。まず、明朝の政治活動について、事件の一つが述べられている。それは次のような事件である。明万曆に進士に及第し、編修となるが、人に害され、俸を奪われる。左諭徳となるも、魏忠賢の勢力によって籍を削られる。崇禎年間に礼部右侍郎となり、温体仁に弾劾される。このように、明の頃の政治活動について典拠では詳細に事件が記述されている。一方、「共命鳥」では次のように、錢謙益の明朝における官途について「險艱多」と言うに止まっている。

明の万曆（曆の誤植、または乾隆帝の名「弘曆」を避けたものか―引用者注）の庚戌に進士及第し、編修となりしが、それより或は斥けられて退き、或は用ゐられて立ち、官途險艱多くして、甚しきに至つては刑部の獄に下されしこともありき。樹は高くして風おのづから激するならひなれば、大官高位に居るものゝ安からぬことあるは免れぬことながら、是一には明季朋党争鬪の止む間無かりしに因る。

（「共命鳥」）

錢謙益の明朝の政治活動に関する典拠の記述が「共命鳥」では省略されている。これに対して、錢謙益の明末清初における行動は、左記のように典拠の記述に即して、加筆を施しながら詳細に描かれていくのである。

①時に明の徳既に衰へて、流賊大に熾んに、崇禎十七年三月、京陥り帝死するに及び、謙益たま／＼官を罷めて野に在りしが、南京に趣きて諸大臣と共に潞王を立て、帝となさんと議りぬ。議未だ定まらざるに馬士英・劉澤清等の福王を擁立するに会ひ、謙益も此に随ひて礼部尚書となりぬ。されど馬も劉も謙益を疑ひ、特に阮大鍼げんたいせいといふものは謙益が敵党なりければ、事を仮りて謙益を誅せんとさへしたり。幸に士英の大獄を起すを欲せざりしより事無きを得たるも、②上に立つの帝もとより回天の大志無く、事に当るの臣また掃寇の雄材ならねば朱氏の晩業終に觀るに足るもの無くして、弘光元年には、南京も清に陥れらるゝに及び、③弘光帝と共に謙益も出で、降るに至りぬ。

(「共命鳥」)

明末の頃に錢謙益が二度にわたり、王を立て、最後に清に降伏する経緯が詳細に描かれている。典拠『清名家小伝』のこの箇所に対応する部分は次の通りである。

十七年三月。京師陥。報至。謙益赴南京。与諸大臣議立潞王。議未定。而鳳督馬士英及劉澤清諸將。擁福王至。福王立。阮大鍼用事。謙益懼不見容。遂附二人。得為礼部尚書。又上疏頌士英。且為大鍼訟冤修好。然二人終疑之。狂僧大悲獄起。大鍼欲假以尽誅清流。造為十八羅漢。五十三参之目。謙益亦列焉。士英不欲興大獄。而止。順治二年。清師定江南。謙益出降。

典拠と照らし合わせてみると、「共命鳥」は典拠に沿う形で書かれていることが分かる。そのうえで、傍線部は典拠にない露伴の加筆であることが分かる。加筆の①において、「徳」とは為政者としての皇帝の属性であり、「流賊」とは当時李自成、張献忠等が率いた革命軍の蔑称である。ここに明の終焉の様相が物語られている。②では錢謙益が清に降伏する経緯について、立てられた弘光帝は明の敗勢を挽回する志がなく、軍事に有能な臣もいないことから、明の敗北が回避できないことが強調されている。③では、典拠の「謙益が出でて降る」を、「弘光帝と共に」清に降伏したと付け加えている。

以上、典拠の記述が引用されながらも、加筆の①と②によって、明の終焉が余儀なくされていることが提示・強調されている。加筆の③では、錢謙益は弘光帝と一緒に清に降伏したと書かれ、主君に背く行為とは言えない描き方となっている。このように、錢謙益の明末清初の政治活動に焦点が当てられ、さらに加筆によって、無節という批評に対して弁解するような書き方となっていることが分かる。

同様の弁解の記述は他にも見られる。次は清朝に降伏した後の仕途に関する記述である。「共命鳥」と『清名家小伝』の本文を挙げる。

①国亡びて生を偷み、節虧けて官に任ぜる謙益の所行は、後の人の厭ひ悪むところながら、才能尋常ならざりければ、礼部右侍郎をもて、秘書院学士の事を管かりけり。②されど流石に清に仕ふるは心よからずやありけん、尋で老病をもて職を辞し、故郷に閑居して二十年ばかりを経、康熙三年をもて年八十三にして卒りぬ。③謙益が一生、大略是の如し。寿を享くるは甚だ多かりしも、意を得たるは実に短く、官途に顛頓して、

其の朝に立ち時に榮えしは、僅に五年に満たざりしといへばまた福分に寡かりしといふべし。

(「共命鳥」)

以_二礼部右侍郎_一。管_二秘書院学士事_一。尋以_二老病_一乞_レ帰。四年復以_二江陰黃毓祺事_一。牽連下_レ獄。事白得_レ釈。里居十六年。以_二康熙三年_一而卒。年八十有三。謙益顛_二頓仕途_一。立_レ朝不_レ滿_二五載_一。

(『清名家小伝』「錢謙益」)

この箇所も『清名家小伝』に拠ったところであるが、「共命鳥」の傍線部は同じく露伴の加筆となる。加筆の①は先述したように、錢謙益の後世における評価が示されている。露伴は錢謙益の無節という悪評を十分意識していることが分かる。また清の官となる理由として、尋常でない才能が挙げられる。②は錢謙益の辞職する理由を推測した挿入句で、清に仕えたことに対する錢謙益の苦渋を言う。③では錢謙益の官途について「福分」が少ないと述べられ、同情の念が読み取れる。このように、錢謙益は尋常でない才能を持つ故に清の官となった。しかし、清朝に仕えることは畢竟明朝に背くこととなるため、罪悪感があつたのであろうか、まもなく辞職したと書かれている。一方、省略された部分もある。『清名家小伝』の本文の傍線部に錢謙益が入獄したことが記述されているが、「共命鳥」では省略されている。これは錢謙益の仕途ではないため省略されたと考えられる。

以上、典拠との比較を行った。「共命鳥」では、錢謙益の明末清初の行動に焦点が当てられ、明末に政治の混乱、社会の動乱の中、錢謙益は新たに弘光帝を立てるなどの活動をしていた。しかしながら、主君の志の無さ、軍事人材の欠如の状況によって、明の終焉となり、彼は清に降伏し、仕えることになったが、本心でないため辞職するという経緯が描かれている。このように後世に無節の人とひたすら憎まれた錢謙益が明朝に背く意志を抱

かず、ただ王朝交替期という動乱の時代に翻弄され、結果的に二朝に仕えた者となり、才能を發揮できないという悲劇の人生が描かれているのである。すなわち、露伴は錢謙益の二臣というマイナス面を深く描かないというよりは、むしろ詳細にその経緯を描いて、無節という評価に対して弁解して見せたものと言えよう。

さて、露伴は何故このように錢謙益を悪評から守ったのか。その点については柳如是の評価について見ることで答が得られる。「柳夫人の伝ふ可きは、其の書を善くし、詩を能くせるを以てにはあらざるなり。又其の貌の美と才の敏とを以てにあらざるなり。院中の出身の賤しきにして、一代の風流大臣の抜くところとなりしを以てにあらざるなり」と前言して、その後柳如是の義の行動が描かれていく。それらは、前掲した「共命鳥」の構成によれば、

(1) 国が滅ぶにあたって、錢謙益に殉死しようと促す。

(2) 錢謙益が獄に下され、進退を同じくすると決心し、一人で夫を支える。

(3) 錢謙益の死後、悪人から家を守り、夫に殉死する。

とした箇所である。この三つの義の行動の話の末尾は、それぞれ次のような一句で結ばれている。

牧齋伝ふるに足らざるも、如是実に伝ふべきなり。

牧齋伝ふるに足らざるも、如是実に伝ふ可からずや。

牧齋伝ふるに足らざるも、如是実に伝ふ可きなり。

(「共命鳥」)

大文豪の錢謙益は本意ながら二朝に仕えた者となる。それが賞賛されなくても、柳如是の義が賞賛されるべ

きであると繰り返されている。さらに、柳如是について「人豈其美を愛して然るならんや。実に其義を重んじて然るなるのみ」とその義を評価している。相思相愛の錢謙益と柳如是であるゆえ、柳如是が賞賛されるほどの人物なら、彼女がどこまでも追隨していく錢謙益を悪い人に描く訳にはいかないであろう。

「共命鳥」では錢謙益の無節の問題が議論され、柳如是の義が評価されている。第二章で触れたように、「忠義」という問題は日本古来より好まれるテーマであり、日露戦後、それが再び盛んに議論されていた。「共命鳥」が書かれた背景には、その時の中国の時局が関係しているよう。一九一一（明治四十四）年十月に中国で辛亥革命が勃発し、翌年一月に中華民国が成立したが、二月に袁世凱が帝を退け、臨時大總統に就任し、さらに一九一五（大正四）年十二月に自ら皇帝となった。この清末の政局は日本で大きな反響を呼び、忠義の問題が再度俎上に載せられた。例えば、雑誌『太陽』明治四十四年十二月号の某支那通による「擾乱裡に在る清国の時局」では、次のように中国には「忠君愛国の觀念がない」と指摘されている。

例へば日本人は上に万世一系の皇室を戴き奉り、忠君愛国の念の盛んなること世界無比である。然るに支那人は二十四代の興亡を歴て、殆ど日本に於けるが如き意味の忠君愛国の觀念がない⁽⁵⁾。

また翌年二月、雑誌『中央公論』の社論「清国に義人なし」にも「忠義」に関する議論がある。

昔周の粟を食はざりし伯夷と叔斉とありき、近く明末には台湾に抛りて孤節を守れる鄭成功ありき、鄭成功日本人の血を享けしが故に然りとのみ見做すと勿れ、支那古来実に忠節の士少からざりし也、唯々今日清朝の亡びるに方つて、一人の節に殉ずる莫きは、風氣全く地に墮ちし乎、思ふに利害のみに急なる、今日の支那人の如きは尠からん、夫れ既に利害にのみ急也、仁義なき素より其の処のみ、我が国近時智者才人多く、

利害に聡明なる倫を絶つもの多し、而して仁義を迂として嘲るなきや否や、若し然らば徒らに支那人のみを嗤ふと能はざらんとす、是吾人の深憂とする所、敢て此の論を為す所以也⁽⁶⁾。

同じく清朝の亡びる時、殉死する義士がいけないことが指摘され、日本社会にも「利害に聡明なる倫を絶つもの」が多いと本国の国民に戒めの意が示されている。

このような世情のなかで、「共命鳥」で露伴はあえて無節という評価の錢謙益を取り上げた。機械的にその評価を踏襲するのではなく、清に降伏し、まもなく辞職する経緯を詳細に描き、乱世において翻弄された人物として描き出しているところにこの作品の意味があると考えられるのである。

第二節 順境から逆境へ―獄中の詩

さて、柳如是は多くの求婚者の中から、「ただ心ひそかに牧齋に許して」錢謙益を選び、錢謙益も「吾が世に当りて此の人を失ふ可けんやとて」、柳如是を迎えた。二人の結婚については、以下のように書かれている。

願へるなり望めるなり、所を得たるなり人を得たるなり、金蘭の好^{よし}、琴瑟の情、如何ばかり濃^マや（濃^マやかの誤植―引用者注）にやありけむ、牧齋は山莊を築きて、紅豆と名づけ、姫と与^{とも}に其内に吟詠し、茗椀薫爐、繡床禪板、いと楽しくぞ日を送りける。

（「共命鳥」）

錢謙益と柳如是とが結ばれたことについて、典拠の『虞初新志』では「相得歎甚」と四文字のみで二人の喜び

が描かれている。一方、「共命鳥」では傍線部で示した通り、二人は願い通りに結ばれ、深い付き合い、睦まじい仲、相思相愛の夫婦として描かれ、二人の愛情が典拠と比べて詳細に描かれていることが分かる。

露伴は『虞初新志』や『続本事詩』を駆使して、紅豆山荘における悠々自適の生活と錢謙益と柳如是の濃やかな愛情を描き出している。そして、この順境の生活を描くに止まらず、さらに逆境の時の話、つまり柳如是の義の行動を三話挙げている。そのうちの二番目の、謙益が獄に下され、柳如是が進退を同じくすると決心し、一人で夫を支えるエピソードについて、詩を引用しながら、詳細に描いており、二人の情を描出している。

この話は錢謙益の「和東坡西台詩韻六首并序」に拠るものである⁽⁷⁾。錢謙益が獄に下されたおりに、病中の柳如是は以下のように夫を激励している。

時に如是は病に冒されて蓐に臥し居たりけるが、これを聞いて蹶然として起つて身を顧みず従ひ行き、吾夫心強くおぼしめせ、君が罪なはるべき事のおはさぬは、妾飽くまで之を知る、誓つて書を上りて妾代りて死なんとすべし、さても猶君赦されたまはずば、君に従ひて泉下に見えまつらむ、と慷慨して雄々しく言ひたりければ、牧齋も如何に嬉しく思ひたりけん、後に自づから記せる文にも「余も亦頼つて以て自づから壮にす」と載せたり。

(「共命鳥」)

柳如是は病に冒されても、獄に下された夫に追隨する。そして錢謙益もそれに慰められている。その後、錢謙益が獄中で妻に決別の詩六首を残した。「共命鳥」では六首の中から、一部を書き下して引用している。例えば、第一首は次のように引用されている。

其一に曰く

朔気 陰森として 夏も亦凄じ。

窮虚 四よもに盖おほいて 天の低きを覚ゆ。

青春 望は断ゆ 帰を催すの鳥。

黒獄 声は沈む 暁を報ぐるの鶏。

働哭 江に臨みて 壮子無く、

従行 難に赴く 賢妻有り。

重困も禁ぜず 郷に帰るの夢。

却つて淮東を過ぎて 又浙西。

働哭従行の一聯は、門弟甚だ多けれど皆頼甲斐無く、家人ただ僅に独り誠あるを道ひて、凄冷の懐、感謝の意をあらはせり。獄の夜、郷の夢、蓋牧斎河東君と手を執つて泣きしならん。

(「共命鳥」)

露伴は一首目をすべて引用しているが、特に頸聯に注目して、困難な情況にあたつて妻しか頼りにならないと錢謙益が嘆くことを解説している。さらに、尾聯の「郷に帰るの夢」に関して露伴は夢の中、錢謙益が河東君つまり柳如是の手を執つて泣いたと推測し、柳如是が逆境においても夫を支え、そのような柳如是对する錢謙益の愛を読み取っている。また、第二首は頸聯のみが引用されている。

其二の腰聯に曰く、

肝腸 迸裂す 題襟の友、
血涙 模糊たり 織錦の妻。

唐の段成式、温庭筠等の唱和の詩集を漢上題襟集といふによりて、肝腸の句あり。晋の竇滔の妻蘇若蘭の夫の流沙に徒ママ（徒の誤植か―引用者注）されしを思ひて、錦上に廻文旋図の詩を織りて贈りしといふによりて、血涙の句あり。河東君をば蘇氏に比せるなり。

（「共命鳥」）

第二首の頸聯について、露伴は「織錦の妻」の故事を紹介している。柳如是を、夫を思い血涙を流して廻文の詩を織った蘇若蘭に比していると解釈し、錢謙益が柳如是を愛重することを浮き彫りにしている。

他の詩も頸聯を主として引用している。露伴が頸聯を中心に解釈しているのは、その聯に妻の故事があり、柳如是への情が読み取れるためである。「共命鳥」の次の箇所においてそれが確認できる。

坡翁の詩、たまく妻の字ありしによるとは云へ、牧齋が河東君を愛し、河東君を重んぜること、此詩によりて詳に知るべく、而して河東君が婉柔の質をもつて凜烈の氣を有せしも、また徴知すべし。

（「共命鳥」）

蘇東坡の原詩に和韻したものゆえ、錢謙益の詩六首も頸聯の韻字がすべて「妻」となる。露伴はそれらの頸聯により錢謙益の柳如是への愛、そして柳如是の氣質を読み取るのである。

このように、逆境においても二人は別れずに愛し合い続けている。この錢謙益が獄に下され、進退を同じくすると決心し、一人で夫を支える話は柳如是の義を表わすエピソードとして挙げられているが、獄中にいる錢謙益

を見捨てることなく従う義は、周りの目を意識したものではなく、順境のうちに描かれた二人の愛情からも分かるように、この行動は心から発した真摯なものである。このように義を教条的に説くのではなく、二人の真情に基づく深い絆を描き出すことで、柳如是の義の行動の根拠を提示するのである。

第三節 共命鳥

錢謙益が獄を出たあと夫婦の深い絆を詠んだ詩が次のように引用されている。

其二の一聯に曰く、

花を囚して 却つて喜ぶ 同心の蒂、

鳥を学びて 応に師とすべし 共命の禽。

と。雑宝蔵經きょうめいてつに共命鳥きやうめいてつは雪山の鳥なり、一身二頭なりとあり。牧齋が温存つぶさに至るのさま想ふべし。

(「共命鳥」)

露伴はその中の「共命鳥」を作品のタイトルにし、錢謙益と柳如是との生命共同体を象徴させ、より一層二人の愛情に対する共振を拡大して見せた。

さらに、その共命鳥と類似した表象として、「紅豆」が用いられている。典拠の『続本事詩』では、錢謙益は生活する所を紅豆山荘と名付けたと書かれている。錢謙益は自作の詩集をも『紅豆集』と名付けており、好んで詩に詠んでいる。露伴は次のように紅豆を紹介し、別名の伝説を挿入している。

紅豆は亦相思子といふ。木質蔓生して、高さ丈余、莢を成して子を結ぶ。其の大き豌豆の如く、色鮮やかに紅にして、甚だ愛すべし。嶺南暖地の産にして、中土は稀なり。昔人ありて遠き境に歿しけるが、其妻これを思ひて樹下に哭して卒りしといふ伝説あるより相思子の名あり。されば其子のしほらしく美しく、其名のなつかしく韻^{にほひ}あるに、唐以来の詩人のこれを詠ぜるもの多し。牧齋の山莊、此の樹ありて、此の樹の伝説、愛す可きあるより、取りて以て名とはなしけむ。

(「共命鳥」)

亡くなった夫を偲んでその樹の下で泣いて死ぬというロマンチックな伝説がまさに共命鳥と対応していると言えよう。露伴は紅豆の伝説を挿入し、その表象を用いて錢謙益と柳如是との関係を象徴させている。

さらに、錢謙益と柳如是との関係に重ねる形で蘇東坡と朝雲との関係が描かれている。既述した錢謙益の獄中の詩は、蘇東坡が妻に寄せる詩の韻に和したものである。

獄急にして牧齋ほとんど自づから危ぶめる時、獄中紙筆を禁遏しければ、書して贈らん由は無けれど、流石に錢老も詩人なりけり、むかし蘇東坡の弾劾されける折、御史台より妻に寄せる詩を憶ひ出で、其韻に和して詩を賦し、事決まり身死すべくんば、河東君への決別の辞となさんと、風に臨んで闡誦し、不覺の涙に暮れたりといふ。

(「共命鳥」)

傍線部の蘇東坡とその妻はここで初めて登場したのではなく、錢謙益と柳如是の紅豆山莊での生活を詠んだ詩の引用に次いで、左記のようにすでに伏線が張られている。

おもふに如是が眼には東坡ありて、牧齋が胸には朝雲ありしなるべし。

(「共命鳥」)

さて、蘇軾と朝雲との関係について露伴自身が書いた文章を見てみよう。

侍妾の朝雲は東坡が六十一の時に三十四歳で惠州に卒つた。先生が自ら記した朝雲の墓誌銘に、「字は子霞、姓は王氏、錢塘の人、敏にして義を好み、先生に事ふる二十有三年、忠敬一の如し」とある(中略)東坡も榮えて居た頃は、自分で記して居る通りに、家に教妾が有つたが、遠謫されたりなどして悲しい境界になつてからは、それ等の妾は四五年に相継いで辞して去つたが、朝雲は東坡に随つて南遷した⁽⁸⁾。

朝雲は東坡の困難の時ずっと離れなかつた。二人はやはり「共命鳥」である。露伴は紅豆山莊の生活を描くところにおいて、錢謙益と柳如是の仲を東坡と朝雲に擬し、後に柳如是は獄中にいる錢謙益を見捨てることなく従うことも、錢謙益が柳如是を獄中で思い続けることも、まさに朝雲と東坡の關係に似た關係と見なすのである。作品の結末において、錢謙益が亡くなった後、柳如是が殉死したエピソードを記して、次のように共命鳥をもう一度登場させる。

鳥を学びて応に師とすべし共命の禽とありし偶然の一句も讖をなして、幽明にわたりて相迫^{ママ}(迫の誤植か
—引用者注)随せるは、如何ばかり深き縁なりけむ。

(「共命鳥」)

共命鳥を再度喚起することで作品を終始させているのである。

おわりに

以上、「共命鳥」では、明末清初を舞台に、錢謙益の二臣としての苦勞と柳如是の「芳心烈志」が描かれ、さらに二人の濃やかな愛情が詳らかに描き出されている。この作品は単なる忠義の説教話でもなく、才子佳人の艶話でもなく、錢謙益と柳如是との二人の人間性に焦点を当てた一作である。さらに、〈紅豆〉、〈朝雲と蘇東坡〉、〈共命鳥〉等の詩中の表象を用いることによって、二人の深い絆がまさに詩情豊かに描出されている。

既述したように、「共命鳥」は詩話『続本事詩』より題材を得ている。作品の体裁も詩話の如く、詩とそれに纏わる話が書かれている。ただし、詩話の場合、詩に纏わる話はいくまで詩の背景としてあり、中心となるのはやはり詩そのものである。それに対して、「共命鳥」の性格はむしろ歌物語に近く、詩は物語の一環となり、情を掻き立てる働きを持っている。

作品の発表された大正五年頃、文壇の主流たる自然主義文学は下火となりつつあった。露伴は「自然派勃興以降の小説壇」⁽⁹⁾において、当時の「低級な」「講談的小説」や「小さな個人の感激」の小説に不満を漏らしている。そこで新たな文学形式を模索すべく、露伴は「共命鳥」をはじめとする『幽情記』各篇を書いたものと考えられる。

本論文は第I部では文壇復帰する以前の作品群『幽情記』を取り上げた。第一章では、露伴が創作する際、筆記小説集の『情史』と詩話の『続本事詩』を粉本にしたことを明らかにした。『情史』と『続本事詩』はともに『幽情記』の創作時期までに日本に受容されている。『情史』は筆記小説集であり、『続本事詩』は詩話であり、

何れも「詩詞あ」る物語である。内容に関して、『情史』では男女の情、『続本事詩』では女性を詠む詩と物語が主として収録されており、『幽情記』にとって好都合の材料である。『幽情記』各篇と典拠とを比較した結果、特に「狂濤艶魂」と「共命鳥」との二篇は多くの引用がなされつつも、それぞれ独自の作品世界を成していることが認められた。第二章と第三章において、この二作を考察し、この時期の創作方法をはっきりさせた。

第二章の「狂濤艶魂」では、典拠の『続本事詩』、『清名家小伝』等との比較によって、周亮工の清朝に仕える理由や、詩が詠まれる背景に鄭成功との対戦を置いている点が露伴の創作であることを示した。『続本事詩』では単に愛妾への挽歌が記されているが、「狂濤艶魂」では、王朝交替の乱世に周亮工は人民のためにやむを得ず清朝に仕え、更に明の忠臣である鄭成功と対戦せざるを得ない境遇になることが挿入され、その時の苦悩が王氏への恋しさへと転じ、彼女の亡魂を見るほど激しい情になって詩が書かれるという全く新たな物語が生成されていくことが明らかになった。

第三章の「共命鳥」では、同じく典拠の『続本事詩』、『清名家小伝』等と比較を行った。後に「二臣」と批判される錢謙益は、露伴の意図的な引用によって、明朝に背く意志を抱いたのではなく、ただ王朝交替期という動乱の時代に翻弄され、結果的に二朝に仕えた者として描き出されている。この錢謙益の死後に殉死した柳如是の「芳心烈志」という人間性に焦点を当て、〈紅豆〉、〈朝雲と蘇東坡〉、〈共命鳥〉等の詩の表象を用いることによって、二人の深い絆が诗情豊かに描出される。

「狂濤艶魂」と「共命鳥」は多くの典拠に依拠しつつも、意図的な創作によって、情に溢れる物語に仕上げられている。典拠である『続本事詩』の他に、資料に拠る歴史背景を利用して、人物の内面を引き出し、立体的な

人物造形を果たした。『幽情記』は、単なる研究的性格ではなく、この時期の露伴の創作方法を示すものなのであって、事実には縛られる同時代の自然主義文学をにらみつつ新たな文学の模索を試みたものであると考えられる。

第二章と第三章で取り上げた「狂濤艶魂」と「共命鳥」とは共に男女の深い情が描かれている。この上で、『幽情記』全体は如何なるものを描いているかを検討したい。まず、この短編集は露伴が意識的に編集した物である点を確認したい。編集の際に露伴が改題と加筆を行っている。

改題に関しては、前の十二篇の題目は二篇ずつ対になっており、最後の「幽夢」は『幽情記』の書名と呼応する形になっている。以下、その題目と初出の原題を順番に並べる。

- 一、「真真」 原題 「史譚群玉峰」
- 二、「師師」 原題 「水滸伝中第一の美人李師々」
- 三、「楼船断桥」 原題 「竹枝韵話」
- 四、「水殿雲廊」 原題 「詩縁」
- 五、「共命鳥」 原題同
- 六、「一枝花」 原題 「詩と花と」
- 七、「泥人」 原題 「土偶」
- 八、「玉主」 原題 「情不尽」
- 九、「碧梧紅葉」 原題 「紅葉艶話」
- 十、「狂濤艶魂」 原題 「驚濤艶魂」

十一、「金鵲鏡」 原題同

十二、「桃花扇」 原題「桃花扇中の三美人」

十三、「幽夢」 原題「美人と詩人」

「共命鳥」と「金鵲鏡」の二篇の他、皆改題されており、前の十二篇の題目は二篇ずつ対偶になっている。塩谷氏は『幽情記』の題目の形式は露伴の意識的な企てであると指摘している。

これを以て終る「幽夢」は「美人と詩人」の題で「淑女画報」の大正四年八月号に載り、これだけは対偶となる篇を持たないで最後に一つだけある。しかし偶然にそうだったのでなく、「修省論」でも説明したようにこれまで二つずつ並べた調子を最後に破り統一の単調から逃げたのであろう⁽¹⁰⁾。

改題の他、「真真」「碧梧桐紅葉」「幽夢」において加筆も施されている。「碧梧桐紅葉」では詩と関係する類話が加筆されている。ここに注意すべきことは、第一篇の「真真」の結末の「仁の説」と、最後の篇の「幽夢」の結末の「聖門一字の銘」との加筆である。この『幽情記』という単行本を編集する際に単行本の首尾の作品に施した加筆は『幽情記』の趣旨に大きく係わっていると考えられる。このように、『幽情記』の各篇を編集する時の、露伴の細心の工夫が窺えるため、『幽情記』をまとめて考察すべきである。

次に、『幽情記』における「幽情」の意味を確認したい。露伴の『幽情記』の序文に「情の凝つて詩となるに及んで情は幽也」という解題の文章があり、これによれば、情を深く思いこむことよって詩に詠めば、その情は幽である。つまり、「幽情」とは詩に読まなければならないほど深い情のことである。では『幽情記』において具体的にどのような深い情が描かれているのかについて考察する。そのために各篇の詩にまつわる物語の概要

をまとめてみた。

一、「真真」

大儒の後裔である妓女の真真が翰林学士の姚燧に救われ、幸せに生活した。

二、「師師」

宋の徽宗が名妓の李師師を愛しながらも、恋人がいる彼女を恨む物語。

三、「楼船断橋」

元末明初の才人高士楊維禎が蘭英・蕙英の姉妹、曹妙清、張妙静等の閨秀と唱和する竹枝詞。

四、「水殿雲廊」

元末明初の詩人王蒙は「宮詞」を詠んだおかげで、兪友仁に激賞され、妹を妻として与えられた逸話。また王蒙の妻趙氏を悼む詩より、王、趙は若い頃から中年まで、相思相愛の仲が窺える。

五、「共命鳥」

明末清初の錢謙益と柳如是は睦まじい夫婦で、紅豆山荘における閑適な生活を送る。

六、「一枝花」

才学がある瓶花を好む妓女の周綺生は身の非遇を痛み死去する。袁宏道は、佳人薄命を傷み詩を詠む。沈珣、姚子舜といった詩人も周綺生に詩を送る。

七、「泥人」

宋末元初、趙孟頫は妻の管道昇が寄越す泥人の詞によって、妾を蓄えることを止めた。

八、「玉主」

林丙卿と結婚した妓女の劉鳳臺は遠く旅立った林丙卿を思い奪れて死去する。林丙卿も悲しみのあまり妻の玉主を抱いて旅に出る。しかし、江賊に遭い命を落とした。劉鳳臺の魂が官の夢に現れ夫の冤を告ぐ。官によって夫の冤が雪がれた。

九、「碧梧紅葉」

于祐は官人だった韓夫人と紅葉の題詩によって情を交わし、遂に縁を結ぶことになった。

十、「狂濤艶魂」

明末清初、周亮工の転戦に愛姫の王氏が伴い、詩を交わす。後に王氏に先立たれ、周亮

工が三年後も彼女を忘れられず、遂に海上に王氏の亡魂を夢に見て詩を詠む。

十一、「金鵲鏡」

陳の末頃徐徳言と妻の樂昌公主は国が滅ぶに当って離ればなれになったが、破った鏡によつて互いを見つけ、樂昌公主の主である楊素は俠義の心を持ち、徐徳言に妻を返した。

十二、「桃花扇」

才学のある名妓卞玉京は詩人呉梅村と結ばれず、乱世において不幸の身になり、早くも死去した。呉梅村は悲しんで詩を詠み、他の文人も卞玉京を愛重した。また、同じく名妓の寇白門は朱保国公に豪華な結婚式とともに嫁いだ。しかし、家の零落の時売られそうになり、それを嫌がった寇白門はもう一度旧業に戻つて大金を稼いで朱保国公に送金した。

十三、「幽夢」

陸游は親の反対で愛妻の唐婉と別れ、後に正妻の反対で知音の妾が追い出された。

十三篇の物語に皆男女の主人公が登場するが、必ずしも恋愛物語ではない。登尾氏はこの十三篇を「夫婦の濃やかな愛情・心の通いあいを扱ったもの」、「運命の測りがたさを扱ったもの」、「風流なつきあいを扱ったもの」、「単に事実を考証したもの」の四種類に分類しており、そのうちの「夫婦の濃やかな愛情・心の通いあいを扱ったもの」の七篇のみを考察している⁽¹¹⁾。しかし、こうした分類では『幽情記』の統一性が見られない。そこで、『幽情記』の粉本の一つである『情史』を手がかりに考察したい。『情史』はそれまでの書物にある、男女の情事を情貞、情缘、情私等の二十四類に分類して記した筆記小説集である。しかし、その男女の情は必ずしも恋愛感情とは限らない。例えば、『情史』巻四情俠類「江陵刺史」では刺史が美姫を元の夫に返すという義侠の話であり、『情史』における男女の情のは必ずしも恋愛とは限らない。

「金鵲鏡」における詩にまつわる物語は『情史』巻四情俠類「楊素」に拠っており、これ楊素は俠義の心によつて楽昌公主を夫の徐徳言に返す話であり、恋愛物語とは言い難い。また、『続本事詩』に拠っている「真真」、「楼船断桥」、「一枝花」等も恋愛物語ではなく、男性が女性に同情し、賞賛する物語となっている。『情史』と同じように、『幽情記』における男女の情とは、恋愛だけでなく、同情し、賞賛する心情も含めた情である。

このような男女の情を描いた意図について、『幽情記』の編集にあたる加筆の部分と併せて考えたい。先述した通り、露伴は第一篇の「真真」の結末に「仁の説」を、また最後の篇の「幽夢」の結末に「聖門一字の銘」を加筆している。『幽情記』の編集意識と係わる二つの加筆を考察し、男女の情を描く意図を明らかにしたい。

第一篇の「真真」における「仁」の説は以下の通りである。

西山先生かつて人の仁といふことを問へるに答へて曰く。凡そ天下至微の物も皆この心あり、発生皆此より出づ。稟受の初、皆天地發生の心を得て以て心と為す。故に其心の能く発生せざるもの無し。一物に一心あり、心中より生意を發出し、又無限の物を成す。蓮の実の中に謂はゆる玄荷といふものあるが如き、便ち巖然として一根の荷なり。他物も亦是の如くならざる莫し。是の故に上蔡先生（謝良佐、字は顕道、程子門人、所謂上蔡学派の祖なり。其学は仁を以て本となす。人或は謂ふ、陸象山の学、これに源すと。）桃の仁杏の仁を以て之に比す。其中に生意ありて、才に種うれば便ち生ずるが故なり。惟れ人は中を受けて以て生れ、全く天地の理を具ふ。故に其の心たるや、又物より靈なり。故に其の蘊むところの生意纔に發出すれば、便ち近くしては親を親しみ、推しては民を仁み、又推しては物を愛し、可ならざる所無し、以て四海を覆冒し、百世を惠利するに至るも、亦此よりして之を推すのみ。此仁心の大なる、天地と量を同じうする所以也。今

学を為すの要、須らく常に此心を存して、平居省察し、胸中盎然として、慈祥惻怛の意あり、伎忍刻害の私無きを覚え得るを要すべし。此れ即ち所謂本心なり、即ち所謂仁也。便ち当に之を存し之を養ひ、之を失はざらしむれば即ち萬善皆これよりして生ぜん。知らず姚枢のかつて此説を読めるや否やを。

(「真真」)

西山先生は真徳秀のことである。「真真」では朱子学の伝承における重要な人物として紹介され、翰林学士の姚燧は真真が真徳秀の後裔だと知り、惻隱の心によって彼女を救ったと描かれている。上蔡先生も朱子学の学者である。傍線部が示すように、平素から「慈祥惻怛の意あり、伎忍刻害の私無きを覚え得る」という行いによつて、「本心」、所謂「仁」を養うべきと説いているのである。

また、最終篇の「幽夢」の加筆を挙げる。

放翁の語に曰く、一言もつて身を終るまで之を行ふ可きものは其れ恕なる乎、此は聖門一字の銘なりと。恕とは今の邦語に謂ふところの「おもひやり」なり。一字銘の語、下し得て妙、おもふに放翁深く恕字に於て悟れるところあるなるべし。

(「幽夢」)

この陸游の言葉は宋の王應麟『困学紀聞』卷七「論語」に拠っているが、聖門一字の銘は『論語』靈公第十五に記されているのである。以下『新釈漢文大系』を用いてその内容を示す。

子貢問ひて曰く、一言にして以て終身之を行ふ可き者有りやと。子曰く、其れ恕か。己の欲せざる所は、人に施すこと勿かれと⁽¹²⁾。

『新釈漢文大系』によれば、恕は広大な仁徳の働きの一面であると述べられている。「恕」は乃ち仁である。男女の情を記す『幽情記』の首尾の作品において儒学の仁にまつわる言説が引用され、男女の情は仁に通ずると理解できるであろう。

男女の情は仁に通ずるといふ考えは露伴の「情」と題される文章においても示されている。

情と欲とは違ふ。情は変化もすれば、大きくもなるが、欲は決して大きくならぬ。欲は人間の年齢に相伴はぬ発達もするが、際涯の無いものでない。

譬へば、若い男が、若い女に下つて、遂に我が心の中を認めらるゝに到れば、初めて感じ、感じて而して後に通じ、而も和樂する。ところが茲に一人の卓絶した人物がありと仮定し、此の人が自分の考へた良いことを世に施さうとするが、初めから、汝之れを用ゐよと呼号しても、誰も之れに応ずる者が無い。男の女に對すると同様であることを思はねばならぬ。秦の始皇の法律の失敗は、即ちそこに在るのである。高い地位に在る治者と雖も身を低い者に下つて之れを行へば、天下の人民は、威な其の徳に化するのである。茲が即ち優し味と柔らか味の妙用で、両者初めて相親しむことが出来るのである。これがすなほに発達すれば、啻に愛のみではなく、立派に仁となるので、『ものゝ哀れをこれよりぞ知る』云つたのは、即ち此の要訣を色読達体し得たのである(15)。

露伴は男が女に下る「優し味と柔らか味」を用いれば、徳で国を治めることが出来ると論じ、この「優し味と柔らか味」が男女の愛情だけでなく、仁となれると主張している。『幽情記』において様々な男女の情を描き、首尾の篇に仁に関する説を加筆したのは、このような「優し味と柔らか味」の情を実践すれば、あらゆる人や物

を愛する仁の心を養えるためである。

『幽情記』の創作意図は典拠である『情史』の一致している。『情史』における江南詹詹外史の序文では、次のように情の働きの示されている。

六経皆以レ情教也。易尊ニ夫婦一、詩有ニ閨雎一、書序ニ嬪虞之文一、禮謹ニ聘奔之別一、春秋於ニ姬姜之際一、詳然言レ之。豈非レ以下情始ニ於男女一、凡民之所ニ必開一者、聖人亦因而導レ之、俾レ勿レ作ニ於涼一、於レ是流ニ注於君臣父子兄弟朋友之間一而汪然有レ餘乎（14）。

儒学の經典である六経は皆情によつて教えており、男女の情を誘導すれば、君臣、父子、兄弟、朋友にも敷衍することができる。『情史』の編纂者とされる馮夢龍は当時中国最大の絹織物工業の都市である蘇州に暮らしていた。その経済発展と相まって、文化思想も活気に溢れるのであった。馮夢龍が情を肯定的に考えることには経済的社会的基盤があったのである。また、馮夢龍は万暦二（一五七四）年に生まれ、青年時代から続けて科挙の受験勉強をし、合格できず、若い頃は享樂的な生活を送った。しかし彼の生きた万暦年間には明の滅びを育む時代であった。政治が乱れ、莊園主の土地を合併することによって農民は土地を失い、多くは流民となった。また宮廷の豪華な生活や戦乱によって国家財政が悪化し、頻りに増税することとなり、社会の不安が拡大するばかりだった。崇禎三（一六三〇）年、五十七才の時に歳貢（長年科挙に受験しつづける人材として国家に送ること）となり、六十一才の時に福建省寿寧県の知県に任命され、徳政を施すことに尽力していた（15）。馮夢龍が『情史』を刊行したのは知県に任命される以前の天啓年間（一六二一〜一六二七年）であった（16）。社会の不安に対して、情を用いて人心を落ち着かせたかったであろう。

日本では日露戦後の資本主義の発展によって、物質主義が高まっていた。これに対して露伴は『幽情記』において男女の情を説き、それによって人々が仁を養うことを期待していたであろう。

注

- (1) 「新刊紹介 幽情記（幸田露伴著）」（『太陽』25巻5号、大8・5）、『新刊紹介』（『読売新聞』大14・6・25）
 - (2) 井波律子「露伴の中国小説―『幽情記』と『運命』について」（『文学』6巻1号、平17・1）
 - (3) 『清名家小伝』は、筑波大学附属図書館蔵の刊本『清名家小伝』（文政2年序）を使用する。句読点と返り点は本文に従う。その他の漢文資料の句読点、返り点は論者による。『清名家小伝』は柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」（一）〜（二）（『文学』34巻3号〜4号、昭41・3〜4）によれば、露伴の蔵書に入っている。
 - (4) 『明史紀事本末』は『谷氏紀事本末』の別名で書かれている。「共命鳥」の他、発表時期の近い露伴の「運命」（『改造』大8・4）にも引用されている。
 - (5) 某支那通「擾乱裡に在る清国の時局」（『太陽』17巻16号、明44・12）
 - (6) 社論「清国に義人なし」（『中央公論』27巻2号、明45・2）
 - (7) 錢謙益「和二東坡西台詩韻一六首并序」（『錢牧齋全集』4、上海古籍出版社、1996・9）
- 本文は以下の通りである。

丁亥三月晦日、晨興礼レ仏、忽被ニ急徴一。銀鐙拖曳、命在ニ漏刻一。河東夫人沈疴卧レ蓐、蹶然而起、冒レ死

從行、誓_レ上_レ書代_レ死、否則從_レ死。慷慨首塗、無_レ刺刺可憐之語_一。余亦賴以自壯焉。獄急時、次_二東坡御史台寄_レ妻詩_一、以當_二訣別_一。獄中過_二紙筆_一、臨_レ風聞誦、飲_レ泣而已。生還之後、尋_二繹遺忘_一、尚存_二六章_一。值_二君三十設_レ輓之辰_一、長筵初啓、引_レ滿放_レ歌、以博_二如臯之一笑_一、并以_レ伝_二眎同聲_一、求_二屬和_一焉。

朔氣陰森夏亦凄、穹廬四蓋破_二天低_一。青春望斷催_レ歸鳥、黑獄聲沈報_レ曉鷄。慟哭臨_レ江無_二壯子_一、徒行赴_レ難有_二賢妻_一。重囿不_レ禁還_レ鄉夢、却過_二淮東_一又浙西。

陰宮窟室昼含_レ凄、風色蕭騷白日低。天上底須論_二玉兔_一、人間何物是_二金雞_一。肝腸迸裂題襟友、血淚模糊織錦妻。却指_二恒雲一望_二家室_一、溥沱河北太行西。

紂絕陰天鬼又凄、波吒声沸柝鈴低。不_レ聞西市曾牽_レ犬、浪說東城再鬪_レ鷄。並_レ命何当同_二石友_一、呼_レ囚誰与報_二章妻_一。可憐長夜歸_二俄頃_一、坐待悠悠白日西。

三人貫索語_二酸凄_一、主犯_二災星_一僕運低。溲溺閔通真並_レ命、影形絆繫似_二連鷄_一。夢回_二虎穴_一頻呼_レ母、話到_二牛衣_一並念_レ妻。尚說故山花信好、紅闌橋在_二画樓西_一。余与_二僕_一、共_レ梏拏者。

六月霜凝倍_二慳悽_一、骨消皮削首頻低。雲林永絕離_レ羅雉、砧几相鄰待_レ割_レ鷄。隨_二落劫塵_一悲_二宿業_一、歸_二依法喜_一媿_二山妻_一。西方西市原同觀、梟鼓分明落日西。

梏拏扶將獄氣凄、神魂刺促語言低。心長尚似_二拖_レ腸鼠_一、髮短渾如_二禿_レ幘鷄_一、後事從他携_レ手客、殘骸付与画_レ眉妻。可憐三十年來夢、長白山東遼水西。

- (9) 幸田露伴「自然派勃興以降の小説壇」(『露伴全集』別巻上、岩波書店、昭55・2)
- (10) 塩谷賛「幽情記」(『幸田露伴』中巻、中央公論社、昭43・11)
- (11) 登尾豊「『幽情記』の周辺―露伴の明治から大正へ―」(『幸田露伴論考』日本図書センター、平18・10)
- (12) 吉田賢抗『新釈漢文大系 1 論語』(明治書院、昭53・10)
- (13) 幸田露伴「情」(『日本及日本人』671号、大5・1)
- (14) 『情史』は、東京大学附属図書館「鷗外文庫」蔵の清刊本『情史類略』(立本堂)を使用する。
- (15) 陸樹命『馮夢龍研究』(復旦大学出版社、1987・9)
- (16) 大木康『中国明清時代の文学』(放送大学教育振興会、平14・2)

第Ⅱ部

第一章

「運命」における一人称の語り手―戦争部分をめぐって―

はじめに

第Ⅰ部では、文壇に復帰する以前に発表された『幽情記』における、意図的に典拠を引用するという創作方法を明らかにした。第Ⅱ部において文壇復帰以降はどのような新たな創作方法を取り入れたかを論じる。まず第Ⅱ部第一章と第二章は文壇復帰の作とされた「運命」を取り上げる。「運命」は『幽情記』と同じく資料を自在に駆使しているが、さらに一人称の語り手を使用している。この語り手に着目して検討を行う。

「運命」は大正八年四月に雑誌『改造』の創刊号に発表され、忽ち注目を浴びた。これは中国の明時代の歴史に取材した作品である。当時の建文帝と叔父の燕王とが帝位をめぐって戦い、燕王は勝ち永楽帝となり、建文帝は負けて僧となった。だが、皇帝となった永楽帝は征戦を続けて最後に辺境で亡くなり、一方、建文帝は漂泊の後、宮中で長寿を全うする。以上の筋を『明史』⁽¹⁾や清・谷応泰の『明史紀事本末』⁽²⁾（以下『本末』と略す。）等をもとに描いたのが本作品である。「運命」の典拠について、福本雅一氏は注釈「運命」において、詳細に指摘している⁽³⁾。

典拠との比較を行った先行論に、田中美樹氏と井波律子氏の論考がある。田中氏は具体的に資料を比較検討し、露伴が資料を加工する方法が「構想にそわない史実を削除」し、「歴史書に記述された事実」のみによって「独自の虚構の世界」を生み出すことであると指摘し、作品のテーマを「徳」と「力」が分裂し争闘する悲劇」としている⁽⁴⁾。井波氏は建文帝の後日談における露伴の判断や解釈を指摘し、露伴は「政治的・軍事的、つまり現世的な価値基準における勝者と敗者の立場を逆転させ」、道家思想である「心の安らぎ」を称揚したと述べて

いる⁽⁵⁾。これらの研究は資料との比較において、「運命」研究の基盤を成しており、田中氏の資料との比較によって、その加工方法を明らかにするという手法や、井波氏の建文帝の後日談における永楽帝と建文帝との対比的描写に関する指摘については、論者は有効であると考ええる。本論文では、こういった指摘に基づいた上で、「運命」には「予」⁽⁶⁾という語る主体が存在する点に着目して「運命」のテーマを検討することを試みたい。

「運命」の冒頭では語り手の「予」が「造物の脚色は、綺語の奇より奇にして、狂言の妙より妙に、才子の才も敵する能はざるの巧緻あり、妄人の妄も及ぶ可からざるの警拔」があると述べ、小説、稗史、戯曲や寓言等の「烏有の談」ではなく、「造物の脚色」、所謂歴史事実の奇を示そうと宣言している。植村清二氏⁽⁷⁾や高橋菊弥氏⁽⁸⁾は建文出亡の典拠である『本末』巻十七（建文遜^{ゆずる}国）が材料を史仲彬の『致身録』や程済の『従亡随筆』といった随筆類から取り、結局稗史に基づいたものと述べ、「運命」の冒頭部分で「稗史」を否定することの矛盾を指摘している。

しかし、「運命」において注目すべきことは、稗史に基づいて書かれたか否かよりは、むしろ全能的視点から客観的に歴史を叙述するのではなく、「一人称」の語り手を導入している点である。「運命」では、資料の引用の間に、「予」がしばしば顔を出す。これは歴史とは誰かが語るものという認識の表明となっている。露伴は『運命』自跋において「吾嘗て曰く、虚言を束し来つて歴史有りと」と述べているが、すでに明治三十七年に『読売新聞』に発表され、翌年に単行本にされた長篇叙事詩『あとの出廬』（春陽堂）第二篇第十三章に「世に事実ほど虚偽は無く、／虚誕^{いっはり}を束^{つか}ねて 歴史成り出づ」の言葉がある。つまり、露伴は「運命」を執筆する以前より、歴史記述は一種のフィクションであるという認識を持っている。本論文では、露伴の一人称の語り手を導入した

歴史叙述の方法に注目し、まず第一章において前半の戦争部分に焦点を当て、先行研究で指摘された依拠資料とも合わせて読みながら、語り手の「予」はどのように歴史を語ったかを考察する。

第一節 戦争中の上書―止められない戦争の歯車

「運命」の前半部分では、建文帝と燕王との戦争が描かれている。戦争の経過については『本末』巻十五「削^一奪諸藩^二」、巻十六「燕王起^レ兵」に拠って書かれていることが指摘されているが、所々に語り手の「予」が現れ、典拠にないコメントをしている点が注目される。まず、大臣たちによる上書部分をめぐる部分を見てみたい。戦争に向かって事態が進展していく中、大臣等が戦争を避けるべく上書をする場面がある。また戦争の間にも、戦争を鎮めようと上書することが描かれる。しかし、それらの意見は採用されず、戦争へ向かう歯車は止められない。その理由が語り手によって語られるのである。

まず、高巍による上書の例を見てみたい。

諸藩漸く削奪せられんとするの明らかなるや、十二月に至りて、前軍都督府断事高巍書を上りて政を論ず。

(中略「高巍の人物伝」―引用者注) 時に事に当たる者、子澄、泰の輩より以下、皆諸王を削るを議す。独り巍と御史韓郁とは説を異にす。巍の言曰く、我が高皇帝、三代の公に法り、嬴秦の陋を洗ひ、諸王を分封して、四裔に藩屏たらしめたまへり。然れども之を古制に比すれば、封境過大にして、諸王又率ね驕逸不法なり。削らざれば即ち朝廷の紀綱立たず、之を削れば親を親むの恩を傷る。賈誼曰く、天下の治安を欲するは、

衆く諸侯を建て、其力を少くするに若くは無しと。臣愚謂へらく、今宜しく其意を師とすべし、晁錯が削奪の策を施す勿れ、主父偃が推恩の令に效ふべし。西北諸王の子弟は、東南に分封し、東南諸王の子弟は西北に分封し、其地を小にし、其城を大にし、以て其力を分たば、藩王の権は、削らずして弱からん。臣又願はくは陛下益親親の礼を隆んにし、歳時伏臘、使問絶えず、賢者は詔を下して褒賞し、不法者は初犯は之を宥し、再犯は之を赦し、三犯改めざれば、即ち太廟に告げて、地を削り、之を廢処せん、豈服順せざる者あらんやと。帝之を然なりとは聞召したりけれど、勢い既に定まりて、削奪の議を取る者のみ充滿ちたりければ、高巍の説も用ゐられで已みぬ。

（「運命」からの引用、以下同）

傍線部分は典拠にない、語り手のコメントとなる。諸藩の領地が削られようとした当初、高巍が建文帝に上書して、漢代の推恩の令に倣い、平和な手段で徐々に藩の勢力を弱めていくべきと提言した。しかし、「勢い既に定ま」ったために建文帝に採用されなかつたとされている。この不採用の理由は典拠の『本末』巻十五「削」奪諸藩にはなく、語り手が付け加えたものである。その「勢い」とは「時に事に当たる者、子澄、泰の輩より以下、皆諸王を削るを議す」という状況のことと考えられる。典拠では、黄子澄、斎泰の諸藩の領地を削除する議論はあるが、他の大臣の議論には触れられていない。語り手は、削藩の議論を多数の意見として述べ、諸藩を削奪することが高巍の上書で中止できない勢いを描いている。

次に、卓敬による上書の例をあげる。

二月に至り、燕王入覲す。皇道を行きて入り、陛に登りて拜せざる等、不敬の事ありしかば、監察御史曾鳳

韶これを効せしが、帝曰く、至親問ふ勿れと。戸部侍郎卓敬、先に書を上つて藩を抑へ禍を防がんことを言ふ。復密奏して曰く、燕王は智慮人に過ぐ、而して其の拠る所の北平は、形勝の地にして、士馬精強に、金の由つて興るところなり、今宜しく封を南昌に徙したまふべし、然らば則ち万一の変あるも控制し易しと。帝敬に対へたまはく、燕王は骨肉至親なり、何ぞ此に及ぶことあらんやと。敬曰く、隋文楊広は父子にあらずやと。敬の言実に然り、楊広は子を以てだに父を弑す。燕王の傲慢なる、何をか為さざらん。敬の言、敦厚を缺き、帝の意、醇正に近しと雖、世相の險惡にして、人情の陰毒なる、悲む可きかな、敬の言却つて実に切なり。然れども帝黙然たること良久しくして曰く、卿休せよと。

建文元年二月の燕王の都での不敬な行動に対して、卓敬は、燕王の藩地を北京から南昌に移し、勢力を抑えるべしとする上書を奉った。この提言が採用されれば、燕王の勢力が大いに衰え、起兵に至らなかつたであろう。しかし、建文帝は血縁の関係にあることを理由に、不敬な燕王を彼の拠点である北京に帰らせ、燕王の領地を削奪する機会を逃した。傍線部の語り手のコメントでは、卓敬の上書は、世相に相応しいと述べられている。

ここまでのところでは、建文帝が卓敬の上書を採用しなかつたことが、燕王が戦争を起こす事態に繋がるというようにも読める。だが、次の語り手のコメントでは、これを建文帝の過ちに帰するのではなく、「時」、「勢」にその理由を求めている。

高巍の説は、敦厚悦ぶ可しと雖、時既に晩く、卓敬の言は、明徹用ゐるに足ると雖、勢回し難く、朝旨の酷責すると、燕師の暴起すると、実に互に已む能はざるものありしなり。是所謂^す数なるものか、非耶。

語り手が典拠にない「時」、「勢」を理由に、事態が戦争に向かつており、もはや止めることができないと述

べている。ここでいう「時」とは、語り手によると朝廷ではすでに削奪の議が主流となっている時期のことを指し、「勢」とは燕王が危機を感じて起兵しようとしていることを指すと考えられる。建文帝と燕王とが対立しつつある時勢であると語り手は述べている。このような時勢によって、たとえ見識の高い高巍と卓敬の上書であっても事態を止められないのである。

最後にこの事態を「数」とする語り手の感慨が語られる。この「数」とは運命のことであり、本作品ではこのように「数」と感慨する語り手の言葉が頻出する。ここでは、戦争の始まりは個人の計らいで変えられないものであり、建文帝が上書を採用する採用しないという問題とは関係なく、戦争が勃発するのは運命だと語り手が解釈していると考えられる。

次の韓郁の上書についても、「時」、「勢」を理由とし、個人の行動を超える運命の力によって戦争が止められないと語られている。

その（監察御史韓郁の―引用者注）論、彝倫を敦くし、動乱を鎮めんといふは可なり、齋泰黄子澄を非とするも可なり、ただ時既に去り、勢既に成るの後に於て、此言あるも、嗚呼亦晩かりしなり。帝遂に用ゐたまはず。

韓郁が削奪された藩王を優遇し、燕王に勧め、戦乱を鎮めようと上書する。しかしながら、ここでも、傍線部のように語り手によって、建文帝がその意見を採用しなかった理由は「時」、「勢」にあると述べられる。この「時」、「勢」とは、建文帝が燕王を削奪できず、燕王は兵を挙げ、戦争を起こした状況である。戦争が勃発した以上、韓郁の上書はそれを鎮めることができないと語り手が解釈しているのである。

また、高巍が出した燕王への上書もまた、以下のように戦争を止めることができないとされる。

(高巍―引用者注) 憚るところ無く白しける。されども燕王答へたまはねば、巍数次書を上りけるが、皆効無かりけり。

巍の書、人情の純、道理の正しきところより言を立つ。知らず燕王の此に対して如何の感を為せるを。ただ燕王既に兵を起し戦を開く。巍の言善しと雖も、大河既に決す、一葦の支へ難きが如し。

燕王の将士が疲労するのを見て、高巍は建文帝の了承を得て、燕王に数回上書して、もし謝罪をして兵を休ませれば朝廷が寛大な処置をするであろうと勧めた。しかし、燕王は応じなかった。その理由は典拠の『本末』には記されていないが、語り手はやはり傍線部の通り、時勢の関係だと指摘している。「燕王既に兵を起し戦を開き、戦争という「大河既に決」したため、高巍の上書という「一葦」は無力であると述べている。

以上の通り、語り手は戦争を止めようとする大臣の上書を引用し、上書の採用されない理由を述べている。何れの上書も優れた進言ではありながら、「時」、「勢」に合わないため採用されなかったという語り手の理解が示されている。戦争に負けた建文帝に関して、典拠では、建文帝が上書を採用しない理由が記されていないため、建文帝に過失があるような理解も可能である。しかし「運命」では、語り手はその都度、「時」、「勢」のために上書が採用されなかったことを強調する。このように、戦争の勃発は建文帝個人の決断によるものではなく、「是所謂数なるものか、非耶」と語られるように、運命という神秘的な力の仕業であると語られているのである。語り手の建文帝を弁護する姿勢が見て取れる。

典拠の『本末』では、単なる事件の羅列に過ぎない部分が、「運命」では語り手のコメントによって、上書を

めぐる一段が豊かになり、戦争のリアリティを増している。「運命」前半の戦争部分では、一見戦争の出来事が長々と説かれているようではあるが、この上書の場面を強調することによって、ダイナミックな戦争とそれを止めようとするスタティックな上書とが対照となり、戦争の長い記述に緩急の変化が与えられているのである。

第二節 勝敗の分かれ目

前節では、優れた上書にもかかわらず、戦争を阻止できない建文帝を弁護するという語り手の姿勢が読み取れた。戦争は建文帝の敗北と燕王の勝利によって幕を閉じている。第二節において、戦争の勝敗の理由について、語り手はどのように建文帝と燕王を語っているかを検討していく。まず建文帝が戦争に負けた理由を見てみよう。時に帝諸将士を誡めたまはく、昔簫繹、兵を挙げて京に入らんとす、而も其下に令して曰く、一門の中自ら兵威を極むるは、不祥の極なりと、今爾将士、燕王と対壘するも、務めて此意を体して、朕をして叔父を殺すの名あらしむるなかれと。(中略「簫繹の人物伝」―引用者注)建文帝の仁柔の性、宋襄に近きものありといふべし。それ燕王は叔父たりと雖も、既に爵を削られて庶人たり、庶人にして凶器を弄して王師に抗す、其罪本より誅戮に当る。然るに是の如きの令を出征の将士に下す。これ適以て軍旅の鋭を殺ぎ、貔貅の胆を小にするに過ぎざるのみ、智なりといふ可からず。燕王と戦ふに及びて、官軍時に或は勝つあるも、此令あるを以て、飛箭長槍、燕王を殲すに至らず。然りと雖も、小人の過や刻薄、長者の過や寛厚、帝の過を観て帝の人となりを知るべし。

傍線部は語り手のコメントである。建文帝は、戦いを始める前に、敵の燕王が叔父であるという理由で、殺してはならないという命令を出している。語り手はそれが兵士の士気を殺す令であり、過ちと認めている。しかし一方で、その過ちは建文帝の「仁柔の性」、「寛厚」の人柄を表すとも語っている。

また、以下のように、戦争の後半に建文帝が軍事才能のない李景隆を起用し、戦争の状況が燕王にとって有利になることが指摘される。

炳文の一敗は猶復すべし、帝炳文の敗を聞いて怒りて用ゐず、黄子澄の言によりて、李景隆を大將軍とし斧鉞を賜はつて炳文に代らしめたまふに至つて、大事ほとんど去りぬ。景隆は紈袴の子弟、趙括の流なればなり。趙括を挙げて廉頗に代ふ。建文帝の位を保つ能はざる、兵戦上には実に此に本づく。

建文帝が老将の耿炳文の代わりに李景隆を用いることに対して、傍線部は典拠の『本末』にない部分である。語り手は「大事ほとんど去りぬ」と建文帝の敗北を予言している。趙括と廉頗は戦国時代、趙の国の武将である。軍略を自慢していた趙括は老将廉頗に代つて、秦と戦ったが、敗北して、虜となった兵士四十万人は生き埋めにされ殺された。李景隆と耿炳文とをこの二人に喩えて、建文帝の策の過ちを明示している。ところが、次のように『本末』巻十六「燕王起兵」にない李景隆を大將軍に抜擢する理由を示している。

景隆は是の如く人の長子にして、其父の蓋世の武勳と、帝室の親眷との関係よりして、齋黄の薦むるところ、建文の任ずるところとなりて、五十万の大軍を統ぶるには至りしなり。

語り手は李景隆の父の功績と帝室との親戚関係を紹介し、建文帝が李景隆を大將軍に抜擢する理由を示している。このように理由が示されることによって建文帝の過ちが擁護されているとも解し得る。

一方、燕王が勝利する理由については、以下のように語られる。

王驍騎を率ゐて、傑の軍に突入し、大呼猛撃す。南軍箭を飛ばす雨の如く、王の建つところの旗、集矢蝟毛の如く、燕軍多く傷つく。而も王猶屈せず、衝撃愈々急なり。会々たまたままた暴颿起こり、樹を抜き屋を翻す。

燕軍之に乗じ、傑ら大いに潰ゆ。燕軍追ひて真定城下に至り、驍將鄧馱、陳鵬等を擒にし、斬首六万余級、尽く軍資器械を得たり。王其の旗を北平に送り、世子に諭して曰く、善く之を蔵し、後世をして忘る勿らしめよと。旗世子の許に至る。時に降將顧成、座に在りて之を見る。(中略「顧成の人物伝」―引用者注)旗を見るや、愴然として之を壯とし、涙下りて曰く、臣少きより軍に従ひて今老いたり、戦陣を歴たること多きも、未だ嘗て此の如きを見ざるなりと。水滸伝中の人の如き成をしてこの言を為さしむ。燕王も亦悪戦したりといふべし。而して燕王の豪傑の心を攬る所以のもの、実に王の此の勇往邁進、艱危を冒して肯て避けるの雄風にあらずんばあらざる也。

右はまず燕王が自ら悪戦苦闘し、その証しである旗を後継ぎに送るエピソードが紹介される。燕王は自ら戦い、しかも兵士より先頭に立つ勇敢な軍人である。そのあとの傍線部分のように語り手は『明史』『顧成伝』に拠り、燕王がその雄風の故、豪傑を自分の味方にしたと戦争に勝つ理由を示している。

戦争の終盤には、以下のように、両方の軍隊の相違点が戦争の結果に影響すると語られている。

南軍は北軍の騎兵の馳突に備ふる為に、塹濠を掘り、壘壁を作りて營と為すをば常としければ、軍兵休息の暇少く、往々虚しく人力を耗すの憾ありて、士卒困罷退屈の情あり。燕王の軍は塹壘を為らず、たゞ隊伍を分布し、陣を列して門と為す。故に将士は營に至れば、即ち休息するを得。暇あれば王射獵して地勢を周覽

し、禽を得れば將士に頒ち、罌を抜くごとに悉く獲るところの財物を賚ふ。南軍と北軍と、軍情おのづから異なること是の如し、一は人役に就くを苦しみ、一は人用を為すを楽しむ。彼此の差、勝敗に影響せずんばあらず。

両方の軍隊が対峙する際、南軍（建文帝の軍隊）は防御の工事に休憩が少なく、兵士が退屈する。一方、北軍（燕王の軍隊）は工事せず、休憩を十分に取らず、燕王は取った獲物を部下に与え、営を変える時に兵士を財物で労う。この相違が勝敗に影響すると指摘している。

以上、自らも勇敢に戦い、軍略に優れた燕王に対し、過った軍事策を取る建文帝を語ることで、両者の勝敗が誰の目にも明らかかなように描かれている。ただし、建文帝については、「仁柔の性」、李景隆を起用する合理性を補うという語り手の弁護の姿勢が見受けられる。

おわりに

露伴は「運命」において歴史事実を語ろうとする「予」という一人称の語り手を仕掛け、「予」の認識した歴史を語らせている。戦争の部分は、典拠の『本末』に基づいて描かれながらも、建文帝が上書を採用せず戦争を阻止できなかったのは、「時」、「勢」のためであり、戦争の発生は個人の計らいを超えた運命の力によるものであると語られる。また、語り手は勝敗が分かれた理由についても指摘する。語り手の「予」は戦争に負けた建文帝について、過った策を使用したのは「寛厚」な人柄のためであり、軍事才能のない人を起用したのはその人の

背景のためであると弁護している。このように語り手は建文帝に同情する立場でこの歴史事件を語っていることが考えられる。第二章では戦争降の「建文出亡」の部分を中心に、語り手は意識的に語っているか否かを検証する。

注

(1) 『明史』は、筑波大学附属図書館所蔵の刊本『欽定明史』（『欽定二十四史』五洲同文局、1903）に拠る。『欽定二十四史』は柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」（一）～（二）（『文学』34巻3号～4号、昭41・3～4）によれば、露伴の蔵書リストにある。

(2) 『明史紀事本末』は『明朝紀事本末』という別名で挙げられている。第I部第三章で取り上げた「共命鳥」では「谷氏記事本末」の別名で典拠の一つとして挙げられている。本論文において『明史紀事本末』は、筑波大学附属図書館所蔵の刊本『明史紀事本末』（『歴朝紀事本末九種』巻49～55、慎記書莊、1899）に拠る。

(3) 福本雅一注釈「運命」（『日本近代文学大系6 幸田露伴集』、角川書店、昭49・6）。

(4) 田中美樹「「空想なき虚構」の世界―幸田露伴「運命」研究」（『学習院大学国語国文学会誌』28号、昭60・3）

(5) 井波律子「露伴の中国小説―『幽情記』と『運命』について」（『文学』6巻1号、平17・1）

(6) 作中では、一人称の語り手が「予」、「我が」、「吾が」等に表記されている。本論文は主格の「予」を代表させて用いる。

- (7) 植村清二 「運命」伝説について (『露伴全集』月報23、昭28・12)
- (8) 高橋菊弥 「露伴「運命」の原典について―「従亡随筆」を中心として―」 (『弘前大学国語国文学』4号、昭53・3)

第二章

「運命」における一人称の語り手―「建文出亡」を中心に―

はじめに

第Ⅱ部第一章では「運命」の前半部分に焦点を当て、『明史紀事本末』⁽¹⁾（以下『本末』と略す。）に拠りつつも、一人称の語り手の「予」の認識に基づき、戦争部分を語り直していることを考察した。本章では資料を操作する痕跡がさらに著しく見られる戦争後、建文帝と永楽帝との運命の逆転する部分を考察し、「予」が典拠に拠りつつどのように語り直しているかを確認したい。

第一節 建文出亡

建文帝と燕王との戦争は建文帝の敗北で幕を閉じた。建文帝のその後の行方は以下のように語り手によって推論されている。

建文皇帝果たして崩ぜりや否や。明史には記す、帝終る所を知らずと。又記す、或は云ふ帝地道より出で亡ぐと。又記す、滇黔巴蜀の間、相伝ふ帝の僧たる時の往来の跡ありと。これ言を二三にするものなり。帝果して火に赴いて死せるか、抑又髪を薙いで逃れたるか。明史卷一百四十三、牛景先の伝の後に、忠賢奇秘録および致身録等の事を記して、録は蓋し晩出附會、信ずるに足らずの語を以て結び、^①暗に建文帝出亡、諸臣庇護の事を否定するの口気あり。^②然れども卷三百四鄭和伝には、成祖（永楽帝―引用者注）、恵帝（建文帝―引用者注）の海外に亡げたるを疑ひ、之を蹤跡せんと欲し、且つ兵を異城に輝かし、中国の富強を示

さんことを欲すと記せり。鄭和の始めて西洋に航せしは、燕王志を得てよりの第四年、即永楽三年なり。永楽三年にして猶疑ふあるは何ぞや。③又給事中胡濙と内侍朱祥とが、永楽中に荒徼を遍歴して数年に及びしは、卷二百九十九に見ゆ。仙人張三丰を索めんとすといふを其名とすと雖、山谷に仙を索めしむるが如き、永楽帝の聡明勇決にして豈真に其事あらんや。得んと欲するところの者の、真仙にあらずして、別に存するあること、知る可き也。

(「運命」)(傍線―引用者、以下同)

これは建文帝が戦争中に亡くなったか、それとも出亡したかについて、語り手が『明史』を手がかりに論述する部分である。引用文中から分かるように、『明史』では建文帝の行方に関する記述が一定していない。というのは、傍線部①の通り、建文出亡の事を否定する箇所もあるが、傍線部②の通り、卷三〇四「鄭和伝」では永楽帝が建文帝が海外に逃げたのではないかと疑う記述もある。語り手はそれらを述べた上で、傍線部③の通り、卷二九九「張三丰伝」によって、永楽帝の命令で胡濙が仙人を捜すエピソードを紹介し、さらにこれは仙人の他に、建文帝を捜そうとしたのであろうと推測している。『明史』には、鄭和の航海の意図が建文帝を捜すことであると明記されているが、胡濙の求仙に同様の目的が含まれていたとの記述は存在しない。このように推測した背景には、『本末』卷十七「建文遜^{ゆずる}レ国」の以下の記述があると思われる。

五年冬十二月、建文帝祭^ニ死難諸人^一、自為^レ文哭^レ之。時朝廷偵^レ帝甚密、戸科都給事胡濙訪^ニ求張三丰^一、蓋為^レ帝也。帝知^レ之、遂遁^レ跡不^レ出。

(谷応泰『本末』卷十七「建文遜^レ国」)

右記のように、『本末』では、胡濙が張三丰を訪ねたのは、実は建文帝を捜す為であったと書かれている。この『本末』の記述を手がかりに、永楽帝が建文帝を捜したと推測したのである。ちなみに、『本末』「建文遜国」では「時胡濙・鄭和、数往_レ来雲貴間_一、踪_レ跡建文帝_二」と鄭和と胡濙が共に建文帝を捜していたことが記述されている。作者はそれを契機に『明史』の「鄭和伝」と「張三丰伝」とを参看した可能性が高い。ともかく、語り手が鄭和の航海も胡濙の求仙も建文帝捜しの目的を含むことを記したのは、建文帝が生きて逃亡したということの意味する。以上のように、『明史』は建文帝の行方について断定していないが、語り手は『本末』に記述された建文帝捜しのことを描き、正史の『明史』によって推測する方法でその信憑性を高めている。

その上に語り手は永楽帝が建文帝を捜す動機を提示している。それは次に描かれたように、明朝の辺境で、外敵が甘肅に乱入した事態に関連している。

若し建文帝にして走つて域外に出で、崛強にして自大なる者に依るならば、外敵は中国を覷ふの便を得て、義兵は邦内に起る可く、重耳一たび逃れて却つて勢を得るが如きの事あらんとす。是永楽帝の懼れ憂ふるところたらずんばならず。鄭和の艦を浮めて遠航し、胡濙の仙を求めて遍歴せる、密旨を銜むところあるが如し。

(「運命」)

傍線部は『春秋左氏伝』(僖公二十三年)に拠る話である。重耳は春秋時代晋の公子。父献公が驪姫に迷って、彼女の生んだ子に国を譲ろうとしたので、禍を恐れた重耳は数人の忠臣と共に国外に逃亡し、辛酸を嘗めた後帰国し、晋の文公となり、諸侯に号令して春秋五霸の一人となった。語り手が明朝の辺境の情勢を分析し、重耳の

ように、もし建文帝が外敵を連れて帰れば、国内の義兵と合わせて永楽帝の政権を動揺させる可能性を指摘し、永楽帝が鄭和と胡濙に命じて密かに建文帝を捜したことの裏付けをしている。

以上、永楽帝の建文帝捜しを正史である『明史』の曖昧な記述を利用して推測し、更にその動機を示すことによつて、語り手は建文帝が生きていることを暗示して見せた。このように、戦争の終焉の時点で、建文帝と永楽帝との運命は定まったわけではなく、更なる運命の転変が孕まれることとなる。

それ以降、典拠の書名を挙げずに『本末』巻十七「建文遜_レ国」に拠り、『明史』に記述されていない建文出亡の経緯を年代順に描いていく。建文帝が敗戦して、僧侶を装い宮中から逃げ出し、漫遊して最後にまた宮中に戻り、天寿を全うする。また、その間に永楽朝の出来事が『明史』巻五_ノ巻七「成祖本紀」、巻三三二「西域伝」、及び『本末』巻二十一「親_二征漠北_一」に拠つて書かれている。次にこれらの箇所を典拠と比較しながら、語り手が描こうとした戦争後の建文帝と永楽帝の人物像を明白にする。

第二節 「優游自適」の建文帝

敗北して出亡した建文帝について語り手は以下の二箇所において、「優游自適」だと述べている。

建文帝は今は僧_レ応文たり。心の中はいざ知らず、袈裟に枯木の身を包みて、山水に白雲の跡を逐ひ、或は草庵、或は茅店に、閑坐_レして漫遊_レしたまへるが、燕王今は皇帝なり、万乗の尊に居りて、一身の安き無し。

これより帝優游自適、居然として一頭陀なり。

(「運命」)

語り手は逃げ出した建文帝について、僧侶の身分を強調し、「優游自適」の生活を送っていると述べている。その造形は『本末』の建文帝像と大きく異なっている。以下に幾つかの例を見てみよう。

十五年史彬白龍庵に至る、庵を見ず、驚訝して帝を索め、終に大喜庵に遇ひ奉る。十一月帝衡山に至りたまふ、避くるある也。

(「運命」)

この引用は『本末』と一致しているが、傍線部の「避くるある也」とは何を避けたいのか不明である。以下の部分を『本末』と比較することによって、建文帝の避けたかったものは明確になる。

永樂元年、帝雲南の永嘉寺に留まりたまふ。二年、雲南を出で、重慶より襄陽に抵り、また東して、史彬の家に至りたまふ。留まりたまふこと三日、杭州、天台、雁蕩の遊をなして、又雲南に帰りたまふ。

(「運命」)

傍線部では、ただ建文帝が史彬の家に三日間泊まったと簡略化されている。典拠の『本末』では、このエピソードがさらに詳細に記述されている。

二年春正月、建文帝離雲南^一、由重慶^二抵襄陽^三。六月、入呉。八月八日、復至史彬家^四。時天將暝、彬家已举火矣。帝突至、彬及家人出拜。举酒半酣、帝曰、我明晨当即去。彬云、臣掃門而俟、久矣。即有不^レ肅、亦乞^レ見原。欲留^レ師数月^一、明晨何遽耶。先是、帝命^二從亡者^一俱師弟称、故彬等呼為^レ師。帝泣曰、

彼方急図レ我。昨於ニ西安道中一、見ニ冠蓋来者一、瞪目視レ我。此臣我目善レ之、彼必有レ以レ奏也。東南逋臣、屈レ指先レ汝、我去政為レ汝計。对哭久レ之。且曰、此近ニ宮闕一、不レ便。彬曰、亦無レ害。視ニ帝衣履敝甚一、固留ニ三日一、命ニ家人一製ニ布衣一而去。

(谷応泰『本末』卷十七「建文遜レ国」)

建文帝が黄昏に史彬の家を密かに訪ね、史彬は彼を長く滞在させようとする。だが建文帝は官吏に捕まるのを恐れ、翌朝にすぐ史彬の家を後にするつもりであると書かれている。傍線部分において、建文帝は追捕する者を避けようと心がけている。「避くるある也」の対象は建文帝を捜す永楽帝側の者と考えられる。このような逃亡生活の中、建文帝は心が安んじるはずがないのである。このエピソードは語り手の言う「優游自適」の「僧応文」像と齟齬しており、そのため引用されなかったと考えられる。また、建文帝が病気になるエピソードが次のように書かれている。

夏帝白龍庵に病みたまふ。史彬、程亨、郭節たま〜至る。三人留まる久しくして、帝これを遣りたまひ、今後再び来たる勿れ、我安居す、心づかひすなど仰す。帝白龍庵を捨てたまふ。

(「運命」)

建文帝が病を患い、従臣等が来たが、再び来ないようにと言い、落ち着いた対応をしている。これもやはり「優游自適」の建文帝像に即している。しかし、田中美樹氏が指摘している通り、この部分において『本末』にある「発病に際して平静さを欠き大いに狼狽したこと」と「臣下に対する物質的要求」との記述が削除されている⁽²⁾。さて、『本末』の記述を見てみよう。

帝復結_ニ菴於白龍山_一。顔色憔悴、形容枯槁。夏月患_レ痢、因_レ有_ニ戒心_一。不_レ能_ニ出_レ山_一、覓_レ膳、狼狽殊甚。適史彬・程亨・郭節訪至。帝相對大慟、隨問曰、汝等携有_ニ方物_一否。各為_レ獻。史彬独有_レ僮、而所_レ獻豐。且当年職居_ニ禁近_一、知_ニ帝所_レ好_一。帝遍嘗_レ之曰、不_レ食_レ此已三年矣。三人相留許久、帝遣_レ之歸。別時痛哭失_レ聲。帝属曰、今後勿_ニ再来_一。道路阻修一難、関津盤詰二難。況我安居、不_ニ必慮_一也。彬等叩_レ首領_レ命而去。後帝復舍_ニ白龍菴_一他去。

(谷応泰『本末』卷十七「建文遜_レ国」)

傍線部分は「運命」に引用されない部分である。『本末』卷十七「建文遜_レ国」では、建文帝は病気になつても、永楽帝の搜索への「戒心」のため山に籠もり、食事を探せずに狼狽した上、訪れてきた旧臣たちの前で泣き崩れ、さっそく食べ物を要求した。以上の部分は田中氏が指摘している相違点である。また、建文帝は好物を食べて、三年ぶりだと感嘆する。別れる時に声が出なくなるほど痛哭する。「運命」では臣下に来ないように言う理由は「我安居す」となるが、実際『本末』において道路の行きにくさと検問所との二つの難関が挙げられる。心身共に弱い凡人の姿はこの病気のエピソードにはつきり映し出されている。しかし、作中ではそれが略されており、ただ「我安居す」等といった臣下を思いやる言葉が引用され、建文帝の冷静な対応が描かれているのである。このように、典拠の文章が引用されているが、一部の省略によって、まったく違う建文帝像が描かれることとなる。また、田中氏が指摘したように、建文帝が永楽帝の死を聞いた場面において『本末』の「篡奪者たる燕王_{||}永楽帝が榆木川で不慮の死を遂げたことに対する喜び」の部分が削除されている⁽³⁾。井波律子氏も同じ部分の違いを述べている⁽⁴⁾。「運命」と典拠の『本末』の本文は次のようになる。

二十二年春、建文帝東行したまひ、冬十月史彬と旅店に相遇ふ。(中略「永樂帝の死」―引用者注)永樂帝既に崩じ、建文帝猶在り、帝と史彬と客舎相遇ひ、老実貞良の忠臣の口より、篡國奪位の叔父の死を聞く。世事測る可からずと雖、薙髮して宮を脱し、墮涙して舟に上るの時、いづくんぞ茅店の茶後に深仇の冥土に入れるを談ずるの今日あるを思はんや。あゝ亦奇なりといふべし。知らず応文禪師の如何の感を為せるを。即ち彬とともに江南に下り、彬の家に至り、やがて天台山に登りたまふ。

(「運命」)

二十二年春二月、建文帝東行。冬十月、与史彬相遇於旅店。言及榆木川、稍色喜。史彬問道路起居状、答曰、近来強飯、精爽倍常。即同彬下江南、至彬家。

(谷応泰『本末』卷十七「建文遜国」)

一つ目の傍線部分について、榆木川は永樂帝が亡くなった場所である。典拠では、永樂帝の死に対して建文帝が喜びの表情を見せたと書かれている。この田中氏と井波氏の指摘した部分だけでなく、さらに二つ目の傍線部分では、近来食欲を増し、いつもより元気と言うことから、今後追捕されることがなくなり、安心した思いを垣間見ることが出来る。「運命」では建文帝がかつての敵の死に快意を覚える部分が削除され、代わりに「知らず応文禪師の如何の感を為せるかを」と述べ、有為転変に対する感無量の情より達観の心境へと導かれる建文帝の像が維持されている。

以上見てきた通り、典拠の『本末』に記述された建文帝の逃亡生活からは、彼が一人の人間としての喜怒哀楽を有していることが窺える。しかし、「運命」では、敗戦して逃亡した建文帝が「優游自適」の「僧応文」とし

て語られ、それと齟齬する典拠のエピソードが引用されていない。このように戦争では負けたが、情、欲、榮、辱に惑わされない、心が安んじている人物として建文帝は描き出されている。

第三節 「安き無し」の永楽帝

先述した通り、建文帝が出亡した後、年代順にその事跡が語られているが、その間に永楽帝をはじめとする永楽朝の事件が挿入されている。井波氏の指摘した通り、この戦争後の部分において、建文帝と永楽帝とが明らかに対比して描かれているのである。例えば前掲の引用のように、建文帝が「優游自適」であるのに対して、永楽帝は「今は皇帝なり、万乗の尊に居りて、一身の安き無し」と描かれている。永楽帝は辺境の擾乱に対し、次のように憂慮が絶えない状態に置かれている。

永楽元年には、韃靼の兵、遼東を犯し、永平に寇し、二年には韃靼と瓦剌（Orats, 西部蒙古）との相和せざる為に、辺患無しと雖、三年には韃靼の塞下を伺ふあり。特に此年はタメルラン大兵を起して、道を別失八里（Bisbalik）に取り、甘肅よりして乱入せんとするの事あり。甘肅は京を距る遠しと雖、タメルランの勇威猛勢は、太祖の時よりして知るところたり、永楽帝の憂慮察す可し。此事明史には其の外国伝に、朝廷、帖木児の道を別失八里に仮りて兵を率ゐて東するを聞き、甘肅総兵官宋晟に勅して儆備せしむ、とあるに過ぎず。然れども塞外の事には意を用ゐること密にして、永楽八年以後、数々漠北を親征せしほどの帝の、帖木児東せんとするを聞きては、奚んぞ能く晏然たらん。太祖の洪武二十八年、傅安等を帖木児の許に使せしめ

て、安等猶未だ還らず、忽ちにして此報を得、疑虞する無きを得んや。(中略「帖木児のの人物伝」―引用者注) タメルランの来らんとするや、帝また別に虞るゝところあり。蓋し燕の兵を挙ぐるに当つて、史之を明記せずと雖、韃靼の兵を借りて以て功を成せること、蔚州を囲めるの時に徴して知る可し。建文未だ死せず、從臣の中、道衍金忠の輩あつて、西北の胡兵を借るあらば、天下の事知る可からざるなり。鄭和胡濙の出づるある、徒爾ならんや。建文の草庵の夢、永樂の金殿の夢、其のいづれか安くして、いづれか安からざりしや、試に之を問はんと欲する也。

(「運命」)

永樂帝が在位する間、北の辺境に擾乱があり、外敵を恐れるだけでなく、建文帝が外敵と連携することをさらに不安に思っていることが描かれている。北の辺境の擾乱は資料を引用しているが、傍線部分の永樂帝の不安の理由が建文帝の復権であることは、語り手の推測である。このように語り手は再び建文帝の「草庵の夢」と対比して、永樂帝の「金殿の夢」は「安からざりし」と述べている。その次に永樂帝が外敵を駆逐しようと、度々親征することが記される。

此歳(永樂八年―引用者注) 永樂帝は去年丘福を漠北に失へるを以て北京を發して胡地に入り、本雅失里(Benyashili) 阿魯台(Altai) 等と戦ひて勝ち、擒狐山、清流泉の二処に銘を勤(勒)の誤植か―引用者注)して還りたまふ。

此歳(永樂十二年―引用者注) 永樂帝また塞外に出で、瓦刺を征したまふ。皇太孫九龍口に於て危難に臨む。

此歳（永樂十九年―引用者注）阿魯台反す。二十年永樂帝、阿魯台を親征す。

（「運命」）

右記のように、永樂帝が度々辺疆に親征し、皇帝の身ではあるが「安き無し」の生活が続いている。しかし、典拠の『本末』巻二十一「親征漠北」において、永樂帝の親征はさらに詳細に記述されており、彼の軍事的才能が発揮される場面が多くある。例えば、永樂八年の親征については次のように書かれている。

五月丁卯朔、入臚胸河、哨馬略黃峽、遇寇騎、得箭一矢、馬四疋而還。甲戌、指揮款台略玉華峰、擒一騎、訊之、始知寇在兀古兒札河、大兵遂渡飲馬河。乙亥、以清遠侯王友駐兵河上、留金幼孜營中。上以輕騎前進、人齎二十日糧、以方賓・胡広隨。戊寅、至兀古兒札河、本雅失里先遁、夜倍道追之。己卯、至幹難河、元太祖始興之地也。本雅失里率衆拒戰、上麾前鋒迎擊、一鼓敗之、本雅失里棄輜重、以七騎渡河遁去。六月、班師至飛雲壑、阿魯台復來戰、上率精騎衝陣、大呼奮擊、阿魯台墮馬復上、我師乘之、追奔百余里、斬其名王以下百數十人、阿魯台携家属遠遁。時熱甚、乏水、軍士飢渴、遂收兵還營。己酉、車駕發廣漠、時殘騎尚出沒尾我、上命伏兵河曲、佯以數人載輜重誘之、上按精兵千余最後發。寇望見大兵渡河、貪所載物、競趨而至、伏發、倉皇走、上率兵扼之、奔渡河、馬陷入泥淖、生擒數十人、遂無敢窺我後。師次橋（擒の誤植か―引用者注）狐山、上令勒銘曰、漸（瀚の誤植か―引用者注）海為鐔、天山為鏢、一掃風塵、永清沙漠。次清流泉、又勒銘曰、於鑠六師、禁暴止侮。山高水清、永彰我武。會軍士乏食、上令以所儲供御

糧鈔^一、散^一中給之^上、下令^二軍中^一、糧鈔多者許^二借貸^一。還^レ京倍酬^二其直^一、軍中頼^レ之。上在^二師中^一、每日暮猶未^レ食、中官具進膳、上曰、軍士未^レ食、朕何忍^二先飽^一。七月、還次^二開平^一、宴勞^二將士^一。上曰、朕自^レ出塞、久素食、非^レ乏^レ肉也。念^二士卒艱食^一、朕食^レ肉豈能^二甘味^一、故寧已^レ之。車駕還至^二北京^一。

(谷応泰『本末』卷二十一「親^二征漠北^一」)

典拠では、永楽帝の親征する経過が詳細に記述されている。厳しい自然の中、永楽帝は自ら先頭に立ち戦い、謀略を用いて敵に勝利し、擒狐山と清流泉においてその功を刻して残す。さらに、食料が不足した時に、自身の米を軍士に配り、軍士が食べる前に食事をせず、一人で肉を食べずに軍士等と甘苦を共にするエピソードが記述されている。このように、智勇兼備で、軍士を愛護する良き指導者の姿が読み取れる。特に傍線部では永楽帝が身の安全を顧みず先頭に立ち戦う勇姿が描かれる。「運命」ではそれらのエピソードが引用されず、ただ在位中、度々征戦する永楽帝が描かれているだけなのである。このように、戦争後敗者である建文帝が「優游自適」の生活を送っているのに対して、勝者である永楽帝の外敵との交戦の連続を外的に点描するだけで、「安き無し」状態が強調されている。遂に両者の境地も戦争の結果と逆転することになる。

第四節 逆転する結末

皇位争いで負けた建文帝は「宮中に在り、老仏を以て呼ばれたまひ、寿をもて終わりたまひぬ」と、『本末』卷十七「建文遜^レ国」の「帝既入^レ宮、宮中人皆呼為^二老仏^一、以^レ寿終。」に拠って語られている。一方、勝った

永楽帝は、先述した辺境に親征する途中で亡くなった。

此歳阿魯台大同に寇す。去年阿魯台を親征し、阿魯台遁れて戦はず。師空しく還る。今又塞を犯す、永楽帝また親征す。敵に遇はずして、軍食足らざるに至る。①帰路榆木川に次し、急に病みて崩ず。②蓋し疑ふ可きある也。

(「運命」)

傍線部①は『明史』の記述に拠って⁽⁵⁾、永楽帝が病死したと書かれている。しかし、傍線部②のように、語り手の「疑ふ可きある也」という一言によってその死の記述に対して疑問が突きつけられている。このことについて結末部で、次のように述べられている。

女仙外史に、忠臣等名山幽谷に帝を索むるを記する、有るが如く無きが如く、実の如く虚の如く、縹渺有趣の文を為す。永楽亭榆木川の崩を記する、鬼母の一劍を受くとなし、又野史を引いて、永楽帝榆木川に至る、野獣の突至するに遇ひ、之と搏す、攫されてたゞ半軀を剩すのみ。殞して而して匠を殺す、其迹を泯滅する所以なりと。野獣か、鬼母か、吾之を知らず。西人或は帝胡人の殺すところとなる為す。然らば即ち帝丘福を尤めて、而して福と其の死を同じうする也。帝勇武を負ひ、毎戦危きを冒す、榆木川の崩、蓋し明史諱みて書せざるある也。

(「運命」)

語り手は永楽帝の病死説を疑い、『女仙外史』における永楽帝が「鬼母」か「野獣」に殺された説を紹介した後、敵に殺された。この死に方は、永楽帝の自負していた勇武に対する皮肉であると考えられる。このように語

り手は歴史記述を選別しながら、意図的に語り直している。

おわりに

以上戦争後の建文帝と永楽帝との運命の逆転する部分を考察してきた。建文帝の行方を検討する時、語り手が意図的に正史の『明史』を利用し永楽帝が建文帝を捜していると述べ、更に明朝辺境の情勢によって永楽帝の建文帝捜しの動機を示している。こうして建文帝が宮中から出亡したことを歴史事実のように叙述している。そして建文帝と永楽帝との運命が戦争の際に定まったのではなく、更に変化していくように仕掛けている。語り手の描いた「優游自適」の建文帝と「安き無し」の永楽帝の人物像を基準に、典拠の『本末』が取捨選択されている。最後に、建文帝の長寿と対比して、歴史記述を選別しながら、永楽帝が勇武でありながら戦死したと語っている。このように「予」の主観的な語りによって明時代のこの歴史事件が叙述されている。

先行論は両皇帝の運命の逆転により作品のテーマを見出しているが、これは「運命」の後半部分のみに注目する結果である。第Ⅱ部第一章で明らかになった語り手の立場を併せて考えると、「運命」における一人称の語り手は終始建文帝に寄り添う形で語っていることが分かる。その結果、「予」という語り手が一大事件を歴史事実として語るように見せかけながら、実際には語り手の主観によって資料を裁断するという一篇の歴史小説が呈示されている。

「運命」では、『幽情記』と同じく意図的な引用を用いて創作し、さらに一人称の語り手という創作方法を用

いている。この一人称の語り手の使用は当時の文壇における私小説の流行と関係していよう。第三章において「ケチ」を通して、私小説との関係をはっきりさせる。

注

- (1) 谷応泰『明史紀事本末』は、筑波大学附属図書館所蔵の刊本『明史紀事本末』（『歴朝紀事本末九種』巻49～55、慎記書莊、1899）に拠る。
- (2) 田中美樹「「空想なき虚構」の世界―幸田露伴「運命」研究」（『学習院大学国語国文学会誌』28号、昭和60・3）
- (3) 同右
- (4) 井波律子「露伴の中国小説―『幽情記』と『運命』について」（『文学』6巻1号、平17・1）
- (5) 永楽帝の死について、『明史』巻七「成祖本紀三」では「庚寅、至榆木川、大漸。遺詔伝位皇太子、喪礼一如高皇帝遺制。辛卯、崩、年六十有五。」と記述されている。大漸とは、病勢が段々と進んで危篤になることであり、永楽帝が病死したと書かれている。『明史』は、筑波大学附属図書館所蔵の刊本『欽定明史』（『欽定二十四史』五洲同文局、1903）に拠る。『欽定二十四史』は柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」（一）～（二）（『文学』34巻3号～4号、昭和41・3～4）によれば、露伴の蔵書リストにある。

第三章

「ケチ」論―私小説との関わりから―

はじめに

幸田露伴の「ケチ」は雑誌『現代』に大正九年十月創刊号から十二月号まで三回にわたって掲載され、後に単行本『龍姿蛇姿』（改造社、昭2・1）に収録される際に「望樹記」と改題された⁽¹⁾。これについて、塩谷賛氏は、『龍姿蛇姿』に収める時に、「観面談」（『改造』、大14・7）と並べるために改題されたと推測している⁽²⁾。事実、第I部で取り上げた『幽情記』（大倉書店、大8・3）が編集される際、二篇ずつ題名が対になるように一部の作品も改題された例がある。塩谷氏の推測は当たっているであろう。一方、川村二郎氏は小説の中心を樹の被害をめぐった東京の治政に対する「考証的・批評的論述」とし、題名は「望樹記」であるべきと主張している⁽³⁾。関谷博氏は、塩谷氏の推測を認めた上で、「ケチ」と「望樹記」が語り手の「意識の統御から自由な他者性を守っている」ことで、題名として質的差異は無いと指摘している⁽⁴⁾。論者は塩谷氏の改題事情や、関谷氏の題名の間質的な差異がない指摘に賛同する。そこで、同時代的意義を考察対象とするため、「ケチ」という初出の題名に従う。

川村氏と関谷氏は共に「ケチ」の批評性を読んでいる。川村氏は東京の治政に関する「考証的・批評的論述」を小説の中心とし、作品の主題は「時世の移ろいに対する感慨」であると述べている⁽⁵⁾。関谷氏は川村論を踏まえて、この作品における「時務論的批評」の内実を分析し、蓮實重彦氏の「『大正的』言説と批評」（『批評空間』、平3・7）に依拠しつつ、この作品の批評性は、「分離よりも融合を、差異よりも同一をおのれにふさわしい環境として選びとり、曖昧な領域に『主体』を漂わせたまま」の『大正的』言説に抗して「言葉の他者性を

いつくしんだという、語り手のふるまい」にあると論じている⁽⁶⁾。しかし、批評性を表す部分だけでなく、作品全体を読むべきであろう。

「ケチ」は、第二章第一章と第二章で取り上げた「運命」（『改造』大8・4）と同じく一人称の語り手を使用している。本作のジャンルについて、塩谷氏は「露伴がいままで筆にしなかつた」「作者の身边や心境も窺え」る私小説であると指摘している⁽⁷⁾。それに対して川村氏は、塩谷氏の「私小説」というのは「ごく軽く用いられた評語」であると述べ、本作と「心境私小説」との違いを指摘している⁽⁸⁾。こうした川村氏の評論に異論を唱えるのではないが、何故塩谷氏が私小説と称したかを考えてみたい。私小説は大正末から盛んに議論されるようになるが、本作の発表された大正九年に、宇野浩二による私小説に関する初期的言説が掲載された。

近頃の日本の小説界の一部には不思議な現象があることを賢明な読者は知つて居らるゝであらう。それは無暗に「私」といふ訳の分らない人物が出てきて、その人間の容貌は無論のこと、職業としても、性質にしても一向書かれなくて、そんなら何が書いてあるかといふと、妙な感想の様なものばかりが綴られてゐるのだ。気を付けて見ると、どうやらその小説を作つた作者自身が即ちその「私」らしいのである。大抵さう定まつてゐるのである。だから「私」の職業は小説家なのである。そして「私」と書いたら小説の署名人を指すことになるのである、といふ不思議な現象を読者も作者も少しも怪しまない⁽⁹⁾。

宇野浩二は『奇蹟』の同人であるが、この時期は他の同人と違い、自然主義の伝統からやや身をずらしていた。そのためでもあろうか、私小説を否定的に捉えていた。この言説では、当時の文壇において人物設定のない「私」が感想のようなものを綴り、読者もその「私」が小説を書いた作者自身であることを疑わない小説の出現を指摘

している。

この言説に照らして見れば、「ケチ」は私小説の要素を備えている。「ケチ」において、主人公の「自分」の一つの言葉にまつわる心境が語られる。冒頭から人物紹介が為されず、「自分」がこの一、二年來、「年をとるとケチになる」という言葉が時々脳裏に浮かぶことから始る。また「自分」が書齋で仕事をすることや、釣りの趣味を持つこと、住まいの場所等は、露伴と重なっており、また、露伴は本作について「一々皆真に其物有り、其人有り、其景致、其情感有つて、而して写し出したものである」と証言している⁽¹⁰⁾。塩谷氏はこのような根拠により私小説と評したのであろう。

ただし、私小説との異同に関する川村氏の指摘や、本作の批評性にこだわる関谷氏の指摘からも明らかのように、「ケチ」は単なる私小説ではない。「天うつ浪」が中絶した後、文壇から遠ざかった露伴は、大正八年に歴史を題材とした「運命」によって再び文壇に復帰した。その次の年に、何故私小説の形式を借りてこのような小説を書いたのだろうか。本論文は、作品分析を行い、本作品の主題を考察した上で、同時代における本作品の位置づけを試みる。

第一節 近代以前の老婆から見た近代化―老婆の話

本作では「年をとるとケチになる」という言葉をめぐって二つのエピソードが書かれている。一つは十数年前の神様の下で「勿体無い」を唱え、糸屑や紙屑を再利用する老婆のエピソードである。以下は老婆は「自分」の

所にやってきて、糸屑をもらう時の会話のなかで、「時世おくれ」と自嘲しながら、当時の社会現象への批判を話したと書かれている。

「ハ、ハ、ハ。しかし世の中は小癩になりましたネエ、何様でせう一寸買物をしてもこんな糸で縛くつてよこすなんて。むかしは緘く蕘な繩はばかりで済んだものです。買物するには風呂布を持つて行きますもの、一々紙で包んでこんな物で縛るなんてことは、実は無駄手数無駄物づかひですが御体裁すぎの無精の人には気に入りさうな事なので、何処でも仕無いところは無いやうになりました。此糸だつて何でせう遠くの国の百姓がこしらへた綿を、えつちらをつちら石炭を焚く船で運んで来て、それから外国ごしらへのすばらしい機械へかけて、年が年中芝居の雪に降られた石灯籠みたやうな工女さんの手の世話を受けさせた果が、やつと世の中のこんな用に立つのでせう。考へてごらんさい、あだやおろそかにしては勿体無いぢやありませんか。」

(「ケチ」)

老婆は先ず包装の無駄遣いの現象を批判している。日本の産業革命以来の、機械による大工業生産が背景にある(II)。その中で、物が安く多くなるにつれ、このような商品の過剰な包装が社会現象となつてきている。そして糸の生産過程において、「年が年中」働く女工の問題が提起される。産業革命中に成立した主要な機械制大工業は綿紡績業であった。その中で、出稼ぎ女工は低賃金で長時間の労働をした。

「デイデイ屋」という鼻緒の前つぼ等を直す江戸の風俗の代りに、老婆が手製の鼻緒の前つぼで通りかか
りの人を助けようとする。この日、老婆がある婦人を助けた後に、二人の男に嘲笑われた。以下は老婆の言葉である。

通りかゝつた二人づれの男、余り感心しない洋服に、やすい洋杖ステッキ薄ッ髭、ぶら〜と鷹揚らしく勿体ぶつ

て歩いて来かゝりましたが、一人が行過ぎながら、わたしの方を見て、『御安直な慈善かうゐサネ。』と言ふと、もう一人が振顧つて見て、『フン。』と云つて、『慈善でもないサ、ト言つて義侠といふほどでも無しカ、ハ、ハ、ハ。』『ハ、ハ、ハ。』と行つてしまひました。

(「ケチ」)

老婆が人の役に立つつもりで作つた鼻緒の前つぼは、男等にきわめて安っぽくてつまらないものだと思われた。男等は、文明開化がもたらした「洋服」「洋杖」「薄ッ髭」⁽¹²⁾の格好をしている。西洋かぶれで近代化を是認している男等は、資本主義の価値観にとらわれて、老婆の献身的な行動を一本の鼻緒の前つぼの価値に縮小させた。これに対して老婆は男等の格好を「余り感心しない洋服に、やすい洋杖薄ッ髭」と形容し、近代化の過程のなか生まれた機械で大量生産された割と品質の低い商品を鋭く批判し、その格好をして自慢そうに歩いている男等の滑稽さが浮き彫りになっている。加えて、老婆と男等との衝突について、「自分」が老婆を慰めている部分においても男等への批判が見られる。

誰にむかつてだつて、御安直だなんて侮蔑の意味を含んで居ます、失敬千万な、田圃中の泥濘路かなんぞで其奴の鼻緒がきれて弱つた時、ヒョックリお婆さんに出遇はせて、お婆さんの親切を貰はせてやりたい。

(「ケチ」)

これが示唆するように、この男等も鼻緒が切れると困るので、彼等の老婆に対する考えは理不尽である。老婆との対立から、男等は近代化の良し悪しを問わずに受け入れた近代人として描き出されている。

第二節 近代人の「自分」が見た近代化―「市治」の問題

「年をとるとケチになる」をめぐつて、もう一つのエピソードは、「自分」が今年の春に一本の樅樹に対して考えたり、調べたりする話である。先行論が注目しているように、このうち特に筆を費やして書かれているのは東京の治政という「市治」の問題である。一年前の嵐の特徴は「雨を伴なはぬ割合には余の庭及び隣家の庭の樹木を其の根から抜き倒したことの多かつたことであつた」。「自分」は原因が「風力の強かつた故のみでは無く、「市治」の問題であると考えた。具体的には、市外地の戸数の激増で多量となつた下水による土壌の酸化、増設される工場の煤煙による空気の不浄、そして隅田川下流の埋立地等による地下水の水位の上昇といった原因を指摘している。関谷氏は地下水の水位の上昇は地盤沈下現象の非常に早い証言であると述べている。確かに「地盤沈下」という言葉が紙上に現れるようになったのは昭和七年頃である。その頃ようやく江東地区にある運河の流れに異常が生じたり、高潮の時に浸水が深刻になる現象が地盤沈下に関連したものととして理解されるようになった^(B)。しかし、大正九年に発表された「ケチ」においてすでにその関連を示している。

隅田川の水面が平日に於て高いといふことは、東京市の暴風雨及び津浪に就ての危険率を高くしてゐるのである。況んや東京湾の大潮は春秋に於ては潮の干満のみでも七尺の差があるのであつて、地盤の低い市に取つては七尺だけ水の膨れるといふことは軽いことでは無い。(中略)河水の放流といふことは二重にも三重にも不容易になるのである。これでは東京市が水害に悩まされることは、有る可き道理で不思議も何も無い。

(「ケチ」)

露伴は本作において東京の水害と地盤沈下との関連を早くも指摘している。地盤沈下は大正十二年関東大震災後、東京の水準点を調査した際に発覚した。それより前に自身の洞察力によってこれらの現象を関連させて理解出来ていた。

また、「自分」は「工場の増設より生ずる煤煙の多量になった」ことを指摘しているが、当時の状況は記者で社会運動家の山口孤剣の『東都新繁昌記』⁽¹⁴⁾によって記録されている。まず、本所に関して以下のように書かれている。

京橋、日本橋が東京の『商業』を代表するやうに、深川と本所は東京の『工業』を説明する。前者の算盤玉を弾く時、後者の器械はぐるぐると廻つてゐる。富士紡、鐘紡、日清紡の工場は本所及之に接した処に在る。否紡績ばかりではない。種々の工場は本所に在る。『此処王孫遊 煙波落日浮 自看洲鳥白 京国至今愁』と詩人をして歌はしめし業平橋に立て眼を放てよ。東京瓦斯電気、日本製氷、高砂精米、日本硫酸攀土、東京食料品製造、三田土ゴムの諸工場は、煙突から吐き出す煤煙真つ黒に、悪鬼のもがくやうな器械の下に、炮烙の苦を嘗めてゐる労働者の痛ましき汗を思はせる。(中略) 見よ林立する煙突は自然に河を圧する籬となり、汚物塵埃は異臭を放ち、一時間内外の花見に、女は白いお召しに黒点を印し、男は鼠色の痰を吐かねばならぬといふやうでは、本所の名物は向島の花ではなくして、ペスト菌だといふ口悪男も出て来るのだ。

(『東都新繁昌記』職工の本所・煤煙黴黷工場村)

小石川については、左記のように述べられる。

生方敏郎君は砲兵工廠撤廃論を唱へて、次のやうに云つてゐる。

砲兵工廠は人家稠密の都会を避けて、是非共人煙稀薄な田舎へ移さねばならぬものだ。何の必要があつて是れを東京の真中に多くの人の健康を犠牲にして迄も置く必要があるだろうか、砲兵工廠の煤煙を頭から浴びせられる街々は、本郷と神田と小石川と牛込だ。そして此の区は最も学者の多い処だ。勉強仕過ぎるから肺病になるとか、秀才過ぎるから肺病になるとかいふ前に我々は如何に多くの学生が砲兵工廠の煤煙の為に肺病を患つてゐるかを思はなければならない。

東京に於ける肺病患者、十五区の内、浅草本所を除く時は小石川が一番多いといふことは確か生方君のいふ通りであるが、然し砲兵工廠ばかりを罪するには当たらない。小石川は今や煙突林立の工場街たらんとしてゐる。其の煙突の煤煙は小石川の繁栄を祝福せんとするものであつて、『富』の前には市民の健康も趣味も幸福も蹂躪し去らんする今日の社会では仕方がない。

（『東都新繁昌記』学者の小石川・地価の騰貴）

当時の東京では、工場地帯の煤煙が花鳥を害するだけでなく、「市民の健康も趣味も幸福も蹂躪」していたと指摘されている。東京の近代産業が大規模となり、煤煙の問題が貧民窟から市民に広く影響を持ち始めたのは第一次世界大戦を通じてである⁽¹⁵⁾。本作においてまさに当時の大きな問題が突かれてゐる。樹木の被害の原因を語ることによって、実際の人々の生活に密接した公害の問題を指摘している。経済が発展する一方、自然や人類がそれに害されるばかりで、政府が対策を打たない状況を批判している。これらの問題を指摘した後、「自分は諦めるしかない」と吐露している。

時々水害が起るのは地面の洗濯だとも思つて、「あきらめる心の底はむごい也」で、一寸いやな気はするが、まあ皺くちや面にならぬ道でがなあらう。然うも片づけて置かねば、常習性——不平狂といふ病名でも頂戴して、巢鴨へでも生理にされることだらう。

(「ケチ」)

「市治」の欠陥を知らながら、精神病者にされるといふ迫害を恐れて、その不平を隠して曖昧な態度を取るしかない「自分」が描かれている。不平を言い続けると精神病院へ「生理」にされると書いたのは政府の言論統制を諷刺している。「自分」は不平を隠すと言いながら、遠回しに批難している。露伴は深い洞察力と鋭敏な反応により近代工業化、都市化の問題を暴露している。

第三節 近代合理主義の相対化——「自分」の心境描写

第一節と二節において、近代以前から生きてきた老婆と近代人として生きている「自分」の両方を通して近代化が批判されている。注意すべきことは、「自分」は近代に生きながら、近代合理主義者ではない点である。それを端的に表しているのは「自分」の心境描写である。本作における心境の描写は自然主義の客観的心理描写と違い、無意識・潜在意識を描いている。例えば、冒頭部の心理描写を見てみよう。

「年をとるとケチになる。」

此言葉は誰から聞いたのか、また何時おぼえたのか、其由来が甚だ不明であるが、何でも其由来が忘れら

れたほど遠い過去に、そして其由来が想ひ出されぬほど不注意に受取つた言葉に相違ない。それが何様なものか此一二年來、時として頭を擡げて来る。

(「ケチ」)

「年をとるとケチになる」という言葉が頭のどこかに潜んでおり、「時として頭を擡げて来る」ように、あくまで意識せずに想起されている。他にも「何処からか聞こえる」と無意識にこの言葉が浮かぶように描いている。また、「とねりこ」という樹の名前を想起する場面は、仏教の「輪廻応報」の道理で説明しなければならぬほど不思議な体験として描かれる。

昨日と今朝との間の自分は熟睡して何も知ら無かつたが、過去に於てたゞ僅に心境に触れたのみのとねりこが、我も求めず彼も来らぬのに、時節因縁で忽然と躍り出して来るのである。千畳敷へ落とした針の音の微かなのも滅するものではない。輪廻応報の道理で、其者に跳り出されて、其の因は其の果を生じ、其の業はその報を受けるであろう。自分がたゞ何かの書で遭遇したゞけのとねりこさへ、今朝はおのづからにして現はれたのである。

(「ケチ」)

前日に「とねりこ」についての考えが膠着してしまつて「いくら目を睜つても無駄な霧の中で見えぬものを見出さうとする痴態に陥つて終」い、つい何も得ず寝てしまつたが、次の朝食時に、「とねりこ」が生きているかのように「自分の世界」に「踊り出した」。これは潜在意識の働きによるものであるが、露伴は宗教的な原理で説明し、一層神秘性を増している。

この無意識・潜在意識の描写は「ケチ」から始まったものではなく、露伴の初期作品にすでにこの傾向が見られる。成瀬正勝氏は初期のテーマの一つである「風流」を以下のように解釈する。

今日の精神分析学に照せば、それはもつと適切な用語で、この種の意識下の意識を捕え得たかもしれない。すくなくとも合理を超えた何物かである。氾濫すれば魔的エネルギーであり、凝固すれば純粹な精神的エネルギーでもある。自在に融通する点からすれば、まさしく風流と呼ぶにふさわしいであろう⁽¹⁶⁾。

成瀬氏は「風流」の発想が露伴の仏典読破や、文明開化の合理主義の射程外の北海道時代に因ると述べている。一方、「ケチ」になると、明らかに近代の合理主義が浸透している。主人公の「自分」は樹の種類を認識するために、「科学の書」である自然分類の検索表⁽¹⁷⁾を使おうとしたり、庭師の老爺と柗樹が良い樹か否かの議論をする中に、持ち出した論拠が「強いものが好いもので、弱い者が悪いものだ」というダーウィニズムの優勝劣敗の論理であったり、柗樹を好い樹と証明するために、西洋の釣りの書、『淮南子』、百科辞書等よりその用途を探し出したりする。これらは皆合理主義や科学主義的な振る舞いである。露伴は「ケチ」を執筆した際、すでに合理主義や科学主義の射程内にあることが分かる。

しかし、自然分類の検索表を「久しく書架の塵埃に埋もらせ」たまま、「自分」はつい隣の庭師から樹の名前を聞いた。優勝劣敗の原理で好いものとなる雑草の莧には「自分」も「大閉口」で、「全く彼には恐入る」。更に、大昔の東洋の本、遙々彼方の西洋の本等より発見した柗樹の用途は日本において実現できず、あくまで紙上の空論に過ぎない。つまらないと言われた柗樹を価値のある樹と証明することに対し、「自分」は「年をとるとケチになる」と自嘲することになる。このように、主人公の描写によって文明開化がもたらした合理主義や科学

主義が相対化されている。先述の無意識・潜在意識の描写も合理主義や科学主義の相対化として位置付けられる。

おわりに

明治の文明開化より日本は近代化の道を進んでいる。しかし、それに伴い、老婆が言う浪費の問題、女工の問題、また「自分」が見た公害の問題が発生している。男等に代表された近代化の是非を問わずに受け入れた人もいる。露伴は私小説の形式を借りて、それらの問題を指摘しつつ、文明開化がもたらした科学主義や合理主義を相対化することによって、近代化する日本社会に対する文明批評を行っている。一人称の主人公の心境を綴る形式を用いたとはいえ、露伴の社会を見つめる姿勢は個人にこだわる私小説とは大きく相違する。この姿勢は次の資料においても明白である。『現代』に「ケチ」を発表した際、雑誌名に因んで現代を論ずる意義が述べられる。

思ふ可きは今日なり。昨を思ひて今を忘るゝを棺裏の活計といふ。明を思ひて今を忘るゝを現鐘打たず更に山を鑄るといふ。好く今日に行はば、昨もおのづから好く、明もおのづから好からん。論ず可きは現代なり。前古を論じて現代を遺るゝを、雨霽れて蓑笠を被るといふ。後世を論じて現代を遺るゝを、火を熾んにして空鼎を煮るといふ。善く現代を論じ得て中らば、前古を論ずるも中り、後世を論ずるも中らん⁽¹⁸⁾。

「ケチ」もこの題辞が述べた通り、現代の問題を取り上げるのである。露伴は佐幕派の子弟であり、明治政府の政治のあり方に関心を持ち、常に社会問題に留意している⁽¹⁹⁾。日本が近代化によって大きく変容する中、露伴は多くの評論を残している。例えば明治三十年代、日本の産業資本を確立させる段階で、「都市問題」が現れ

た。幸徳秋水序、細野猪太郎著『東京の過去及将来』（金港堂、明35・9）が出版され、露伴も「一国の首都」（『新小説』明32・11/12、34・2/3）を書いた。これは東京が江戸に比べて醜悪な都会に墮落したのは、薩長出身の政府高官の責任であると批判することから始まり、幼稚園の増設、道路、下水道の整備等、近代的都市としての東京の未来図が縦横に論じられる評論である²⁰。例は枚挙に遑がないが、「ケチ」が書けたのは、常に社会問題に関心をもっていたからこそである。

文明批評を行おうとする露伴は何故、当時の文壇の一現象である、一人称の主人公が心境を綴る形式を用いたか。前年に文壇に復帰した露伴は、自然主義以降の大正文壇に、特に私小説の流行に対して意見を述べたかったのではなからうか。大正五年十月の『新潮』は、文壇新機運号という形で編集されているが、武者小路実篤、長与善郎、里見弴ら『白樺』組にまじって、『奇蹟』の同人である相馬泰三と谷崎精二が作品を寄せている。これにより彼等は大正文壇の中軸の人となった。白樺派の「自己肯定」と『奇蹟』の同人なる新早稲田派の「心」の重視は共に自我へのこだわりが窺える²¹。露伴は「自然派勃興以降の小説壇」（『新日本』大6・1）において、次のように語っている。

而して又、翻へつて一方作家の側に就いて観ると、これ亦概して筆先の努力と云ふことのみが主として重んぜられ、創作に最も須要なる感激の方が、傍位に置かれて居はしまいかとの嫌がある。凡そ創作の成素に努力の必要であることは、著明のことであるが努力ばかりでは不可ぬ。必ず其処に感激がなければならぬ。感激と努力の二つは互に相俟つて芸術品の光を發揮するものである。勿論今の文壇諸家の小説にも、感激がなくはないのであるが、その感激が大なる感激ではなく、小さな個人の感激が主となつて居るやうに思はれ

る。(傍線―引用者)

露伴はこの頃の文壇の傾向について、「創作に最も須要なる感激の方が、傍位に置かれ」、しかも「個人の感激が主となつた」ことを指摘している。つまり、白樺派や新早稲田派に代表される私小説の類に不満を漏らしている。露伴は「ケチ」において、私小説の形を用いながら、「小さな個人の感激」に止まらず、社会問題に対する深い洞察力を示している。事実として読まれる私小説を逆手に取って、社会の現実を照射する装置として駆使した。大正文壇に対して、「大なる感激」の小説を書いて見せた。

以上の第Ⅱ部においては、文壇復帰を果たした露伴が、自然主義から私小説へと流れていく文壇に対して自ら考案した創作方法を援用しつつ、いかなる文学を創造しているかを明らかにした。最初に取り上げた「運命」は露伴の文壇復帰を果たした作品である。『幽情記』と同じく資料を自在に駆使しているが、さらに一人称の語り手を使用し、客観的な歴史叙述ではなく、建文帝と燕王との皇位争奪をめぐる歴史小説を成していることを明らかにした。

第一章では戦争の部分を取り上げ、露伴は典拠の『明史紀事本末』に拠りながらも、「予」という一人称の語り手を仕掛け、「予」の認識した歴史を語らせていることを確認した。語り手は建文帝が上書を採用せず戦争を阻止できなかったのは、彼の過ちというより、運命の力のためであるとしている。また、戦争中に過った策を用いたのも彼の「寛厚」な人柄のためであるとしている。このように語り手は建文帝に同情する立場に立ち戦争を語っていることが読み取れる。

第二章では戦争後の両帝の運命を描く部分を典拠との比較によって考察し、語り手の意図的な語りを明らかに

した。敗北した建文帝の行方について、語り手は意図的に正史の『明史』を利用して建文帝が出亡したと語る。更に両帝のその後の境遇について、語り手の描いた「優游自適」の建文帝と「安き無し」の永楽帝の人物像を基準に、典拠の『明史紀事本末』が取捨選択されている。最後に建文帝の長寿と対比して、歴史記述を選別しながら、永楽帝が戦死したと語られている。このように「運命」において、客観的な歴史を語っているように装いつつ、その実、建文帝に同情する語り手を用いて、歴史小説を生成することに成功しているのである。

更にこうした創作は同時代の文壇の文学形式に、より接近した作品へと発展していく。第三章に取り上げた「ケチ」は、典拠の引用がされていないが、「運命」と同じく一人称の語り手が存在している。露伴の実生活に基づいて書かれたこの小説は、当時の私小説の形式を借用している。しかし、形式が私小説に似ていようが、作品のテーマは文明批評である。露伴は事実として読まれる私小説を逆手に取って、社会の現実を照射する方法として駆使し、それらの問題を指摘しつつ、文明開化がもたらした科学主義や合理主義を相対化している。私小説が流行するなか、自我へのこだわりではなく、現実社会の問題に触れる小説を書いて文壇に見せたのである。

注

- (1) 単行本に収録された際に、例えば初出の「S博士」が「斎田博士」に変更される等、本文に語の異同が見られるが、内容にかかわる大きな異同は見られない。
- (2) 塩谷賛「望樹記」(『幸田露伴』中巻、中央公論社、昭43・11)
- (3) 川村二郎「観察から幻視へ―幸田露伴論―」(『文学界』25巻1号、昭46・1)

- (4) 関谷博「『望樹記』―暮らしの領分」(『幸田露伴論』翰林書房、平18・3)
- (5) 前掲注3
- (6) 前掲注4
- (7) 前掲注2
- (8) 前掲注3
- (9) 宇野浩二「甘き世の話」(『中央公論』35巻9号、大9・9)
- (10) 幸田露伴「序文」(『龍姿蛇姿』改造社、昭2・1)
- (11) 宮地正人「一九〇〇年代の経済構造」(『新版世界各国史1日本史』第10章2、山川出版社、平20・1)
- (12) 桑原利夫編『文明開化絵事典』(PHP研究所、平16・4)によれば、三代将軍・徳川家光の時代に頬髭禁止令が出されているが、文明開化とともに西洋の風習が日本に上陸し、髭を生やすことが流行した。
- (13) 東京都公害研究所編『公害と東京都』(東京都広報室、昭45・6)
- (14) 山口孤剣『東都新繁昌記』(京華堂書店、文武堂書店、大7・6)は大正四年十二月より大正六年二月まで新聞『新日本』で連載された記事を収録したものである。
- (15) 前掲注13
- (16) 成瀬正勝「紅葉と露伴における小説の理念」(『国文学解釈と鑑賞』30巻1号、昭40・1)
- (17) 自然分類の検索表は斎田功太郎・稲葉彦六著『新撰植物教科書附録・植物自然分類検索表』(大日本図書、明37・3初版)のことであろう。注1の通り、「ケチ」の初出では「S博士の著」となっているが、『龍姿蛇姿』

に収録された際、「齋田博士の著」となっている。木原均・篠遠嘉人・磯野直秀『近代日本生物学小伝』（平河出版社、昭63・12）によれば、齋田功太郎は東京大学が明治十年十月に開学した時に開設された生物学科植物専攻の矢田部良吉教授の下で勉強し、大学院で博士学位を得た。その『大日本普通植物誌』や教科書は広く用いられた。

(18) 幸田露伴「現代に題す」(『現代』1巻1号、大9・10)

(19) 平岡敏夫「幸田露伴『風流伝』の文体——佐幕派の執念について——」(『佐幕派の文学史——福沢諭吉から夏目漱石まで——』おうふう、平24・2)によれば、明治十七年一月四日に公布された「官吏非職条例」によって、旧幕臣である露伴の父成延も大蔵省を非職となり、その影響で、露伴一家は落魄していた。平岡氏は「反政府的発想の根源に、佐幕派的悲運と憤怒が存在し、それが佐幕派の子弟たちのエートスを形成せしめた」と指摘している。

(20) 小田切進編『日本近代文学大事典』2 (講談社、昭52・11)における前田愛が執筆した「幸田露伴」の項目に拠る。

(21) 紅野敏郎・三好行雄・竹盛天雄・平岡敏夫『大正の文学』(有斐閣、昭47・9)

終章 大正期における露伴の文学観

本論文では、第Ⅰ部で文壇復帰以前、露伴が模索した創作方法を明らかにし、第Ⅱ部では、文壇復帰以降の露伴の創作方法の変化について検討を加えてきた。これらの検討によって、大正期において、露伴が文壇の動向をにらみつつ、それとは別の文学を生成していた様相が明らかになった。大正初期、自然主義文学の隆盛によって小説を書かなくなった露伴は、『幽情記』において、自然主義文学が主張した事実性に配慮して資料を引用しつつも、事実に縛られないロマネスクな作品世界を作り上げる方法を獲得した。資料に記された歴史背景を利用しつつ、人物の内面を引き出し、人物の立体的な造形に成功した。さらに、大正八年以降は、私小説の流行と相まって、創作方法の推移が見られることが注目される。「運命」では資料の引用とともに、一人称の語り手を取り入れ、歴史事実と見せかけた小説を書き上げている。「ケチ」で一人称の語り手を含めた私小説の要素を取り入れながら、実際には私小説ではなく、明治期から意図してきた文明批評を実現させた。大正期の露伴は、同時代の小説を意識しつつ、明治期の小説の中断を乗り越えて新たな創作方法を呈示しているのである。

終章では、これまでの検討を踏まえた上で、大正期の作品を俯瞰しながら、露伴の創作方法はどのような文学観に基づいているかを究明したい。

明治三十七年の「天うつ浪」の中断から大正八年「運命」を発表するまで、露伴は執筆活動を続けていた。この状況について、塩谷賛氏は以下のように説明している。

このあたりで露伴の文壇的地位を考えておくと、自然主義ばやりの時代が露伴の理想的傾向を棄てたのか露伴のほうで小説に飽きて自分から第一線を退いたのかは論じないとして、露伴の本を出す本屋が二流三流となり、原稿を頼みに来る雑誌が世間あまり名を知られないものとなったのは事実である。博文館からも

本を出しているがそれは文芸叢書の校訂本であり、一方ではその主人の商売ぶりが心に染まないのを感じながらもつぎつぎに本を与えている東亜堂はまずは二流の出版社である。ここ数年来原稿を与えている雑誌は「東亜之光」「成功」「新修養」「向上」の類いなのである。この時期の露伴の地位は文壇的には潜んでいるのである⁽¹⁾。

「自然主義ばやりの時代」において、出版社や雑誌は「二流三流」であったとはいえ、露伴は執筆活動を続けていたのである。その時代に、露伴は小説を書かなくなるが、むしろ内容が豊富で、範囲の広い文学を目指していたと考えられる。

この時期の露伴の文学観を端的に示すのは第Ⅰ部で扱った短編集の『幽情記』である。第Ⅰ部第三章で論じたように、『幽情記』は出版される際、露伴によって大正四年から六年の間に書かれた十三篇が選出され、改題や加筆が行われており、露伴が意識的に編集した物である。塩谷氏は『幽情記』に対する露伴の意気込みを証言している。

どの篇の原稿も毛筆を用いて一字ずつ丁寧に記している。人には多く知られないが作者にとっては苦心の作なのである⁽²⁾。

ところが、『幽情記』が一体どのような作品集なのかは、近代の小説や随筆等ジャンルの概念からは判別できない。本論文で論じた「狂濤艶魂」、「共命鳥」のような創作と見てよい篇もあり、「真真」「桃花扇」のように同時代において「支那文学研究上まことに得やすからぬ珍珠」と評される篇もある⁽³⁾。

大正期の文壇は特に小説が盛んになっている。この時期に、露伴は『幽情記』という従来のジャンルの概念と

は相容れない短編集をあえて作ったのではないか。ここでは『幽情記』という集合体を小説、或は研究等の一つのジャンルで裁断するのではなく、内容と物語構造との二つの方面より『幽情記』の性質を確認することによって、露伴の目指した文学の内実を考察する。

まず、内容に関して検討したい。『幽情記』は典拠に拠って書かれているため、各篇には、種々のジャンルの内容が引用されている。露伴は序文において「物語には皆詞詩あり 詞詩無きは収めず」と述べているように、各篇には必ず詩が引用されている。その他、引用には、人物伝記や、学説、評論、考証等も含まれている。

一例として、「真真」の場合をみてみたい。「真真」においては、詩の他、史書や儒学書に拠る引用も見られる。「真真」は元代に翰林学士たる姚燧が真真という妓女を救う物語が主となっているが、真真の先祖たる大儒の真西山に関する伝記に、史書の『宋史』からの引用が見られる。

長ずるに及びて果して国家の有用の材となり、君に事ふる忠、民に臨む仁、文章学問の優れたるのみにはあらず、経済政治みな観るべきありたること、宋史卷の四百三十七を讀みて、其伝に徴すべし。

(「真真」)

『宋史』と比較した結果、典拠で多く語られた真西山の政治面の貢献が省略され、禁じられていた朱子学を伝承した部分がクローズアップされていることが明らかになった。「大儒」「聖学の功臣」等の評価から見ても、真西山は優れた儒学者として描かれている。

また、姚燧の叔父である姚枢の紹介は『元史』に拠って引用されている。

元もまた世宗成宗を経て、武宗の時となりて、姚燧といふ人あり。王佐の才ありし姚枢といへる大官の従子

にして、寛仁恭敏、未だ曾て人を疑ひ己を欺きたることあらずと云われたる従父（元史卷百五十八）に負かず、この人また徳あり才ありと覺しく、文章をもつて時に名あり、官は翰林学士承旨に至り、謚して文公といはれしほどなり。

（「真真」）

真真を救った姚燧を紹介する時に、養父である叔父の姚枢の伝記を用いている。『元史』では、姚燧について、文章にも政治にもすぐれた才能があるとの記述はあるが、「徳あり」をめぐる記述が見当たらない。そこで、姚燧の「徳」を言うために、叔父の姚枢の「寛仁恭敏、未だ曾て人を疑ひ己を欺きたることあらず」という記述を取り入れたと考えられる。

以上は史書の『宋史』『元史』に拠る引用であるが、物語の最後にもう一度姚枢が登場する部分においては、儒学書が引かれている。物語の後の「仁の説」の部分を見てみる。

西山先生かつて人の仁といふことを問へるに答へて曰く。凡そ天下至微の物も皆この心あり、発生皆此より出づ。稟受の初、皆天地發生の心を得て以て心と為す。故に其心の能く発生せざるもの無し。一物に一心あり、心中より生意を發出し、又無限の物を成す。蓮の実の中に謂はゆる玄荷えうかといふものあるが如き、便ち巖然として一根の荷なり。他物も亦是の如くならざる莫し。是の故に上蔡先生（謝良佐、字は頤道、程子門人、所謂上蔡学派の祖なり。其学は仁を以て本となす。人或は謂ふ、陸象山の学、これに源すと。）桃の仁杏の仁を以て之に比す。其中に生意ありて、才わづかに種ううれば便ち生ずるが故なり。惟人これは中ちゆうを受けて以て生れ、全く天地の理を具ふ。故に其の心たるや、又最も物より靈なり。故に其の蘊ひんむところの生意纔に發出す

れば、便ち近くしては親を親しみ、推しては民を仁^{めぐ}み、又推しては物を愛し、可ならざる所無し、以て四海を覆^{ふく}冒し、百世を恵利するに至るも、亦此よりして之を推すのみ。此^{これ}仁心の大なる、天地と量を同じうする所以也。今学を為すの要、須らく常に此心を存して、平居省察し、胸中盎然として、慈祥惻怛^{こころ}の意あり、伎忍^{ぎにん}の私無きを覚え得るを要すべし。此即ち所謂本心なり、即ち所謂仁也。便ち当に之を存し之を養ひ、之をして失はざらしむれば即ち万善皆これよりして生ぜんと。知らず姚枢のかつて此説を読めるや否やを。

(「真真」)

この「仁の説」では仁の意味が説かれているが、これは儒学書の『宋元学案』卷八十一「西山真氏学案」のうちの「西山答問・問仁字」の部分殆ど全て読み下したものである。宋の真西山、元の姚枢は朱子学の伝承における重要な人物であった。この引用は「真真」の物語とは無関係のように見えるが、引用の末尾に「知らず姚枢のかつて此説を読めるや否やを」を加えることによって、姚燧が従父の姚枢を通して、この「仁の説」を知っていたことが仄めかされている。「仁の説」を挿入することによって、姚燧が真真を助けたのは、仁によるものであると読み取れる。つまり、種々のジャンルの内容が恣意的に引用されるのではなく、他のエピソードと関連させて取り入れられているのである。

このように、「真真」の一篇の中には、詩や史書、儒学書等のテキストが併存している。他の篇も同じように多くのジャンルの引用からなる。例えば、「水殿雲廊」では王蒙の「宮詞」に対する祇園南海の詩評が引用されている。「一枝花」では袁宏道と日本の瓶花史との関係について考証されている。「碧梧紅葉」では木の葉に詩を題する類話が引用されている。「楼船断橋」では竹枝詞が紹介されている。『幽情記』各篇は物語と共に、こ

のように多くのジャンルの引用も収めるのである。発表当時、研究的価値が認められたことも理解できよう。

つぎに、物語構造についてみたい。露伴は小説のプロットとは異なる、並列の物語構造を作っている。これは種々のジャンル引用を一篇の作品にまとめるために、最適の方法であろう。例えば、右の「真真」において、結末部に西山の子孫を述べる際、曾孫である真山民の詩が引用されている。

真山民詩集を元の大徳中の人董師謙に授けて其の序を為らしめし真伯源は蓋し蜀孫の子なり。而して山民は蓋し同祖の子、西山の曾孫にして、宋季元初の時に際し、学ありて仕へず詩を善くして自から娛しみ、隠士を以て身を終る。故に宋元の史、名を載する無し。然れども山民の集、伯源の手より出で、伝へて今に至りて泯びず。其詩清逸幽雅。道に過軍に遇ひて山寺に投宿する篇の句に、

蟋蟀 数声の雨、

芭蕉 一寺の秋。

といへる如き、(中略「真山民の詩」―引用者注) 人品詩品俱に卑しからざるを示す。篇什富まずと雖も、一個の好詩人たるを失はず。真々は紹祖の系に出づるか、同祖の系に出づるか、今これを詳らにすべからず、たゞ西山の後を談るの因に、山民も亦西山の後なるを挙ぐるのみ。

(「真真」)

真山民の詩は真真の物語には直接関わらないが、「西山の後を談るの因に、山民も亦西山の後なるを挙ぐるのみ」が示されているように、真真と同じく真西山の文事の継承を語っているために、引用されているのである。このように関連づけをして、真山民と真真の物語とを並列している。

そして、このような並列の物語構造とともに、露伴は独自の連環体を使用している。これは明治二十六年一月より連載し始めた「風流微塵蔵」において試みられた方法である。露伴は当時自ら次のように述べている。

かういふ風に新三郎お小夜の物語から発端して、此の二人の物語から離れて別の物語を發展させ、一わたり發展させてしまふと又此の二人の物語に還つて来るといふやうな具合で連環体とか何とかいつても、凡ての物語が、この人の物語によつて貫通されてゐる、丁度他の凡ての物語は珠数の珠のやうなもの、此の二人の物語はその珠をつなぐ緒のやうなものともいへる⁽⁴⁾。

これによれば、連環体とは関連を持つエピソードが連なり、最後のエピソードが最初のエピソードの人物を語るという物語構造である。「風流微塵蔵」は完結していないため全貌を見ることができず、連環体の集大成は、昭和十五年、露伴の晩年に書かれた「連環記」であると言われている。しかし、実際には、『幽情記』の「師師」において、すでにこの方法を実践しているのである。

『幽情記』全体が並列の物語構造を使用しており、そのうちの「師師」はこの物語構造の延長線上に連環体を用いている。「師師」における大部分のエピソードは一つの連環を成している。以下、連環となる部分の概要を述べる。名妓の李師師は「水滸伝中第一の美人」で、宋徽宗の寵愛を得ている。『水滸伝』において、浪子燕青が師師を姉と拝して、「師師に縁りて徽宗皇帝に親謁し、終に朝廷権貴の奸詐を訴へ、草莽忠義の真衷を述べ、梁山泊百八人の真に招安を受くるに至る」。『水滸伝』の粉本とされる『宣和遺事』では、師師は徽宗皇帝以前より恋人の賈奕がいる。賈奕の師師に寄せる「南郷子の詞」に「鮫綃を留下して宿銭に当つ」という句があり、それが発覚し、賈奕が皇帝を謗った罪で危うく処刑されそうになった。師師は李明妃となったが、金の侵入で徽

宗が退位し、師師が庶人となり、ついに商人に身を寄せることになった。元の屈子敬の雑劇『宋上皇三恨李師々』では、師師の恋人は賈奕ではなく、周邦彦である。情詩が発覚し、左遷されることになる。邦彦が別れに師師に「蘭陵王の詞」を送り、徽宗がそれを聞いて「大に喜び、復邦彦を召かへして」、宮廷の礼楽を司る「大晟樂正」をさせる。周邦彦と同時に別に邦彦という人が李邦彦である。官は左丞に任命されたが、鄙猥の事を習い、自ら李浪子と号する。「真浪子」の李邦彦は「輕佻猥薄」であり「悪むべく」、「仮浪子」の燕青は伶俐乖巧で「愛す可く」と書かれている。

「師師」では次のように、右記の内容が一つの連環となっていると明示されている。

浪子燕青、美人李師々、徽宗皇帝、詞を以て罪を得る賈奕、詞人周邦彦、浪子李邦彦、我是に於てか一連環の環々相連なりて相接かず、環々互いに遊いて互に離れざるを觀る也。

「師師」

『水滸伝』の浪子燕青、美人李師師、徽宗皇帝、『水滸伝』の粉本とされる『宣和遺事』の師師の恋人賈奕、同じく師師の話である元の屈子敬の雑劇『宋上皇三恨李師々』の師師の恋人周邦彦、周邦彦と同じ邦彦の名を持つ浪子の李邦彦、真の浪子李邦彦に対して仮の浪子燕青、というように、エピソードとエピソードが繋がっており、最後は冒頭の浪子燕青に戻る形式になっている。これは「師師」における連環体の実践である。露伴は連環体を独自の物語構造として磨いており、これが晩年の『連環記』において完成されたと見ることが出来る。

ただし、作品はこれで終わりではない。最後に師師を詠む張子野、秦觀の詩が挙げられるが、この最後の詩のエピソードも師師と関連しており、他のエピソードと並列しているのである。以上、作品全体が必ずしも環の形

になって首尾関連しなくても、エピソードとエピソードとの間が繋がっており、並列の物語構造となっている。この物語構造を使用することによって、関連する種々のジャンルの引用を自在に取り入れることが可能になる。この並列の物語構造は近代小説の概念に照らして考えれば一つのプロットとして成立しないだろう。露伴は東洋的な物語の構造に触発され、当時の小説とは別個の物語構造を考案していたのである。

これまで見てきた通り、『幽情記』は種々のジャンルの引用を含めており、且つこのような内容に相応しい並列の物語構造を用いている。この内容や物語構造によって、近代小説の概念に囚われない、自由に豊富な作品が創り上げられている。どのジャンルを引用しても、近代小説のプロットによらなくても、研究と見做されるような内容であっても、文学性のあるものは文学である——これが露伴の文学の内実なのである。

実際に露伴は当時の文学の範囲の狭さを感じ、大正八年に文学史の見直しを呼びかけている。

今までに人が文学々と云つて居るものは、何時となく、誰がきめるとなく、出来てしまったのです。これが誰の作った物指で定めたのでもなく、ボンヤリ定まつて居ります。それで今迄の文学史に入れてないものでも、広い意味で取れば文学のうちに入れられるものがまだ沢山あると思ひます。小説や浄瑠璃を書いたとします。小説や浄瑠璃が文学だとは誰が定めるとなく定まつて居りますから、余程価値の少ないものでも其作者は文学者として扱われて居ます。和歌や俳句も矢張り文学として取扱はれて居ます。小説や浄瑠璃や和歌や俳句でない異なつたものが書いてありますと、其種類が普通に人の云ふ文学でないと云ふだけの為に、全く文学から除かれてしまふものもあります、何も種類によつて文学か否かを定めるべき訳もありますまい。勿論純粹文学とは云へませぬが、通俗的のもので、いくらか文学的色彩を持つもので、大に其時代に行

はれたものは、今から云へば文学の範囲内に入れ難いものでも、其時代の文学の一分科と見做してもいゝと思ひます⁽⁵⁾。

露伴は江戸期の教訓書を取り上げ、ジャンルによつて文学を判断するのではなく、教訓書であっても「文学的色彩」を持つものは文学として認めるべきと唱えている。露伴は文学史研究において段々狭くなってきた文学の範囲に違和感を覚えている。文壇が小説壇に等しい大正期にあつて、この意見は現実的な意味を持っている。

露伴がこのように文学を広義的にとらえる観点は、幼い頃から受けた漢文教育に由来していると考えられる。露伴は七歳の時に漢文の素読を習い、一四歳から菊池松軒の漢学塾に通い、漢学塾と東京図書館の漢籍を読み耽った。露伴の世代までは漢文教育が知識体系の基盤となつている。鈴木貞美氏によれば、古代中国では文学とは学問一般を指すという。中世になると、加えて「文章」（歴史と詩）や人物評判記（志怪伝記）もまた文学と見做され、近世になるとさらに白話小説、元曲も文学とされる⁽⁶⁾。露伴は漢文教育によつて学問と文章を習い、同時に日本に伝来した志怪伝記、白話小説、元曲等も受容していた。露伴の文学の範囲についての認識は、こういった中国の文学観に基づくものと考えられる。

『幽情記』の典拠である詩話集の『続本事詩』は、詩の評論、詩人の逸話故実等を記した書物であり、筆記小説集の『情史』は通俗雑記、古今の考拠等を広く含めたものである。露伴は中国の文学観の元で、『続本事詩』と『情史』に拠り、加えて史書、儒学書等を引用し、これらを取捨選択して『幽情記』という文学にまとめ上げたのである。

さて、『幽情記』に見られるこの文学観は大正期に他の作品においても反映されているだろうか。このことを

考えるために、まず大正期に歴史物が多く書かれていることに注目したい。歴史物は自ずと様々なテキストを引用して、近代小説と違う物語の構造を有しているため、歴史物が多く執筆されることそのものが露伴自身の文学観を示すこととなる。

また、その他の創作については、露伴全集^⑦の小説の巻に収録されたこの時期の作品を通して検証してみる。これらの作品のうち、近代小説とは言い難い作品が殆どである。大正二年に、短い作品である「利休の妻」「忽必烈の妻」「活羅が妻」が発表された。「利休の妻」では利休と妻とが香炉の脚が一分高すぎると同じ意見のため会心して笑ったエピソードが書かれ、「忽必烈の妻」では元朝を開く忽必烈の皇后の逸事が挙げられている。「利休の妻」は短い作品であり、種々の引用や、並列の物語構造を用いていないが、一瞬の出来事を描出し、小説よりも明治四十年代より流行した小品の類に属している。小品は同時代の小説の方法に囚われない自由な形式であり、露伴は『幽情記』以前より同時代の小説とは異なる文学形式を求めていたと考えられる。「活羅が妻」では冒頭に金の国の歴史、景祖の伝記が挿入され、引用が多様である。全体に金の国の六世景祖の妻多保真が夫を支えるエピソードが並べられており、並列の物語構造も確認できる。

次に『幽情記』各篇と同じ時期に執筆された「伊舎那の園」「春の夜語り」「道を尋ねて」は皆『華嚴経』の「婦人に関する面白い話」である。「伊舎那の園」「道を尋ねて」では一つの話が記されるのみであり、小品の類に近いと考えられる。それに対して、「春の夜語り」では『華嚴経』の具足艶吉祥童女の事に止まらず、日本の赤猪子の恋物語、印度の孫陀利の恋物語が挙げられ、日本と印度の恋愛観が比較されている。エピソードを並列する物語構造が見受けられる。また、冒頭部に恋を論じる考証の部分があり、異なるジャンルの内容が取り入

れられていることが認められる。

大正八年に『幽情記』が出版され、同年「運命」の発表によって露伴は再び文壇の脚光を浴びた。「運命」においても、明時代における建文帝と燕王の皇位争奪の事件の他、人物伝、詩等の内容が見られる。これ以降の作品は「ケチ」「水の上」「土地の花と時代の花」「観画談」「夏の夜」「骨董」となる。第Ⅱ部第三章で論じた「ケチ」は小説として掲載されたが、そのなかで筆を費やして書かれた東京の治政の問題は評論に属していると考えられる。「水の上」も私小説に似た一人称の語り手を用いながら、貧富の差が冬に目立つが、夏になるとそれほど眼立たないと論じている。「土地の花と時代の花」と「夏の夜」は共に会話体である。「土地の花と時代の花」では甲造夫婦と隣の老人が夕飯にしゃべることによって住宅難の問題が論じられている。「夏の夜」では三人の客がカフェーでお茶を批評することが描かれている。これらの作品では評論というジャンルの内容が挿入されていることが認められる。

「骨董」では骨董にまるわる話が主に二つ書かれている。一つは道具屋の子である金八が騙されて鎧を高い値で買った話である。もう一つは明の時代、骨董好きの人々が名高い定窯の宝鼎の真偽が区別つかないため、騙される話である。それと共に冒頭部に骨董という言葉の由来、豊臣秀吉が骨董を高慢税として定着した等の考証が行われている。骨董に関わるエピソードが自由自在に並列されている。

大正期に最も小説らしいのは大正十四年に発表された「観画談」である。以下はその梗概である。大学の最も年長の学生である「晩成先生」が神経衰弱になったため旅に出かけた。旅中知り合いになった遊歴者に、あるお寺に病気を治す霊泉があると教えられ、そこに向かった。お寺に入って、「ざあつと雨が降つてゐる」。その夜

浸水してきて、「晩成先生」が寺の坊主によって小山の上の建物に避難させられ、奥の部屋に入って寝れないので、まわりを見た。「橋流水不流」の額があり、「美はしい大江に臨んだ富麗の都の一部を描いた」絵があった。ランプを動かしながら絵を部分部分見ていくと、江岸に小船があり、その船頭さんが彼を呼んだようだ。晩成先生が「今行くよーッと思はず返辞をしようとした」。途端に船が近くなりまた遠くへ去った。その後病気が治った晩成先生は学業を止めたと書かれている。これは虚構の小説である。自然主義文学が隆盛した時期に小説を書かなくなった露伴がこの大正末に虚構の小説を書いたのは、この時期の文壇において、事実⁸にこだわる「写実」という小説の作法が無効になりつつある状況と係わっていると考えられる。

以上、露伴全集の小説の巻に収録された大正期の作品を検証し、『幽情記』に具現された文学観は大正期の作品中に反映されていることを確認した。自然主義文学運動が隆盛した時期、「天うつ浪」の中絶後、露伴は小説を書かなくなったと言われているが、実は近代小説概念より自由な、漢学に由来した文学観の元で自らの文学を打ち出していた。奥野健男氏が述べた通り、自然主義文学は「文学の純粹化、倫理化の運動」で、「文学の本来持っているおもしろさ、美しさ、虚構性、想像性を犠牲にし」、文壇を「世間から隔絶された」、「閉鎖的なもの」にした⁸。露伴はこのような行き詰まりを感じていたため、漢文由来の文学観の元で、大正期に史伝や、近代小説とは言えない作品を書いたのである。

露伴と同じく漢文教育を知識体系の基盤としている森鷗外も、大正期に入って歴史小説の「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」「佐橋甚五郎」を経て、史伝「渋江抽斎」を結実せしめた。これに対して、紅野敏郎は「近代小説概念の放棄に近い営みではあるが、そのような概念をつきぬけたところに成立する、強い、意志的な文体と清朗な境

地」を見ている(9)。

『幽情記』や「運命」のように、露伴は中国の古典に依拠して作品を書いているためであろうか、東洋的で、古いと言われてきた。しかし、「ケチ」に見られる同時代の文壇に対する露伴の態度と併せて考えると、これらの古典に依拠してこそ、当時の小説とは異なる、新しい文学を作り上げることができたのである。大正期の露伴は日本近代文学史において積極的に評価されるべきである。

露伴の文学観によれば、彼の執筆した考証、評論、随筆であっても、そこに文学性があれば、文学として認めてよいことになる。これらの作品を再評価することは今後の課題となる。

露伴は昭和二十二年に亡くなるまで、盛んに執筆活動を行っている。露伴文学の全体像を明らかにするには昭和期の露伴の文学を考察しなければならない。露伴文学を再評価することによって、これまで小説を中心とする近代文学史を見直す契機となると信じている。

注

- (1) 塩谷賛「幽情記」(『幸田露伴』中巻、中央公論社、昭43・11)
- (2) 同右
- (3) 「新刊紹介」(『読売新聞』大14・6・25)
- (4) 柳田泉記幸田露伴「露伴談叢抄―「風流微塵蔵」と「天うつ浪」について―」(『国語と国文学』11巻8号、昭9・8)

(5) 幸田露伴「文学の範囲を広げよ―水の行方―其他に就て―」(『帝国文学』25巻15号、大8・5)
(6) 鈴木貞美「中国における「文学」の歴史」(『日本の「文学」概念』作品社、平10・10)79頁の図表4、「中国における「文学」の変容」においてその結論がまとめられている。

古代 「文学」 || 学問一般 (↓ 儒学中心)

中世 「文学」 || 学問一般 (儒学・仏教・道家) + 「文章」 (歴史と詩) / 人物評判記・伝記 ↓ 志怪

近世 「文学」 || 学問一般 (儒学・仏教・道家) + 「文章」 (歴史と詩) / 白話小説・元曲

19世紀半ば 「文学」 || “polite literature” と翻訳

19世紀末 言語芸術の概念の移入 ↓ 詩・小説・戯曲が「集部」に

「中国文学史」の成立

20世紀前期 近代的な「文学」の使用広がる

(7) 幸田露伴『露伴全集』(岩波書店、昭53・5〜55・3)

(8) 奥野健男『日本文学史』(中央公論社、昭45・3)

(9) 越智治雄・三好行雄・平岡敏夫・紅野敏郎『日本の近代文学―明治・大正期』(日本放送出版協会、昭51

・2)

参考文献

- 『欽定明史』（『欽定二十四史』五洲同文局、1903、筑波大学附属図書館所蔵刊本）
- 谷心泰編『明史紀事本末』（『歷朝紀事本末九種』巻49～55、慎記書莊、1899、筑波大学附属図書館所蔵刊本）
- 徐軌編『本事詩』（筑波大学附属図書館「那珂文庫」所蔵清刊本）
- 錢謙益『錢牧齋全集』（上海古籍出版社、1996・9）
- 陳善『捫虱新話』（上海書店、1990・9）
- 馮夢龍編『情史類略』（立本堂、東京大学附属図書館「鷗外文庫」所蔵清刊本）
- 村瀬季徳編『清名家小伝』（文政二年序、筑波大学附属図書館所蔵刊本）
- 楊維禎『鉄崖先生古楽府』（『四部叢刊』384、上海商務印書館）
- 井波律子「露伴の中国小説―『幽情記』と『運命』について」（『文学』6巻1号、平17・1）
- 井波律子「幸田露伴―その生涯と中国文学」（井波律子・井上章一編『幸田露伴の世界』思文閣出版、平21・1）
- 植村清二「『運命』伝説について」（『露伴全集』月報23、昭28・12）
- 宇野浩二「甘き世の話」（『中央公論』35巻9号、大9・9）
- 越智治雄・三好行雄・平岡敏夫・紅野敏郎『日本の近代文学―明治・大正期』（日本放送出版協会、昭51・2）

- 大木康『中国明清時代の文学』（放送大学教育振興会、平14・2）
- 太田正雄「露伴管見」（『文学』6巻6号、昭13・6）
- 奥野健男『日本文学史』（中央公論社、昭45・3）
- 遅塚麗水「迎暎塾時代の幸田露伴」（『文学』6巻6号、昭13・6）
- 片岡良一「夜明け前の巨人」（『日本読書新聞』昭22・8・4）
- 川村二郎「観察から幻視へ―幸田露伴論―」（『文学界』25巻1号、昭46・1）
- 木原均・篠遠嘉人・磯野直秀『近代日本生物学小伝』（平河出版社、昭63・12）
- 紅野敏郎・三好行雄・竹盛天雄・平岡敏夫『大正の文学』（有斐閣、昭47・9）
- 齊藤希史『漢文脈と近代日本―もう一つのことばの世界』（日本放送出版協会、平19・2）
- 齊藤茂吉「露伴先生に関する私記」（『文学』6巻6号、昭13・6）
- 笹淵友一『浪漫主義文学の誕生』（明治書院、昭45・4）
- 塩谷賛『幸田露伴』（中央公論社、昭43・11）
- 篠田一士「幸田露伴のためにI」（『文学』34巻5号、昭41・5）
- 鈴木貞美『日本の「文学」概念』（作品社、平10・10）
- 須田千里「幸田露伴「観画談」「土偶木偶」の材源」（『国語国文』75巻1号、平18・1）
- 須田千里「幸田露伴「骨董」の原話」（『叙説』33号、平18・3）
- 須田千里「幸田露伴『暴風裏花』の原話」（『京都大学国文学論叢』31号、平26・3）

- 関谷博『幸田露伴論』（翰林書房、平18・3）
- 瀬里廣明『文明批評家としての露伴』（未来社、昭46・9）
- 高橋菊弥「露伴「運命」の原典について―「従亡随筆」を中心として―」
（『弘前大学国語国文学』4号、昭53・3）
- 高橋菊弥「露伴の歴史小説「運命」の背景―野史的復元力の様相」（『郷土作家研究』27巻、平14・7）
- 田中美樹「「空想なき虚構」の世界―幸田露伴「運命」研究」
（『学習院大学国語国文学会誌』28号、昭60・3）
- 田山花袋「紅葉と露伴」（『東京の三十年』博文館、大6・6）
- 東京都公害研究所編『公害と東京都』（東京都広報室、昭45・6）
- 徳田武「西鶴と十七世紀中国文学―『西鶴諸国ばなし』と『情史』―」（『西鶴新展望』勉誠社、平5・8）
- 中村光夫「露伴の死」（『文学界』1巻4号、昭22・10）
- 成瀬正勝「紅葉と露伴における小説の理念」（『国文学解釈と鑑賞』30巻1号、昭40・1）
- 登尾豊『幸田露伴論考』（日本図書センター、平18・10）
- 原田親貞「中国文学と幸田露伴（一）―主として『幽情記』をめぐって」（『学苑』505巻、昭57・1）
- 原田親貞「中国文学と幸田露伴（二）―主として『幽情記』をめぐって」（『学苑』517巻、昭58・1）
- 平岡敏夫『佐幕派の文学史―福沢諭吉から夏目漱石まで―』（おうふう、平24・2）
- 福本雅一注釈「運命」（『日本近代文学大系6 幸田露伴集』、角川書店、昭49・6）

- 宮地正人編『新版世界各国史1 日本史』（山川出版社、平20・1）
- 三好行雄「笹淵友一著『浪漫主義文学の誕生』」（『文学』26巻5号、昭33・5）
- 三好行雄「反近代の系譜」（『解釈と鑑賞』25巻1号、昭35・1）
- 柳田泉「露伴談叢抄——「風流微塵蔵」と「天うつ浪」について——」（『国語と国文学』11巻8号、昭9・8）
- 柳田泉『幸田露伴』（中央公論社、昭17・2）
- 柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」（一）（『文学』34巻3号、昭41・3）
- 柳田泉「露伴先生蔵書瞥見記」（二）（『文学』34巻4号、昭41・4）
- 山口孤剣『東都新繁昌記』（京華堂書店、文武堂書店、大7・6）
- 山本健吉「露伴の「運命」——小説の再発見——」（『文学界』16巻11号、昭37・11）
- 吉田賢抗『新釈漢文大系1 論語』（明治書院、昭53・10）
- 李学穎「出版説明」（『本事詩・続本事詩・本事詞』上海古籍出版社、1991・4）
- 陸樹命『馮夢龍研究』（復旦大学出版社、1987・9）
- 林淑丹「森鷗外と明清小説——『舞姫』『うたかたの記』『雁』を中心に——」（『国際日本文学研究会会議録』28巻、平17・3）
- 小田切進編『日本近代文学大事典』第2巻（講談社、昭52・11）
- 桑原利夫編『文明開化絵事典』（PHP研究所、平16・4）

近藤春雄編『中国学芸大事典』（大修館書店、昭53・10）
近藤春雄編『日本汉文学大事典』（明治書院、昭60・3）

初出一覧

序章 書き下ろし

第Ⅰ部

第一章 『幽情記』の典拠考

「幸田露伴『幽情記』の典拠考」(『日本語と日本文学』50号、平22・2)

第二章 「狂濤艶魂」考

「幸田露伴「狂濤艶魂」考」(『稿本近代文学』35集、平22・12)

第三章 「共命鳥」考

「幸田露伴「共命鳥」考」(『和漢比較文学』49号、平24・8)

第Ⅱ部

第一章 「運命」における一人称の語り手―戦争部分をめぐって―

書き下ろし

第二章 「運命」における一人称の語り手―「建文出亡」を中心に―

「幸田露伴「運命」における歴史叙述の問題―建文出亡から考えて―」（『稿本近代文学』37集、平24・12）

第三章 「ケチ」論―私小説との関わりから―

「幸田露伴「ケチ」論―現実を照射する装置としての私小説―」（『日本語と日本文学』56号、平25・8）

終章 大正期における露伴の文学観

書き下ろし